

The Daibyakurenge

大白蓮華

昭和30年1月18日第3種郵便物認可(通巻570号)平成10年2月1日発行(毎月1回1日発行)ISSN 0418-2650

2

仏法を基調とした平和・文化運動の理論誌

Feb. 1998 — No. 570



[巻頭言] “勇猛精進、こそ創価の魂”——◎秋谷栄之助

[連載] 法華經の智慧——21世紀の宗教を語る③7

[連載] 忘れ得ぬ世界の友①6



池田大作 著

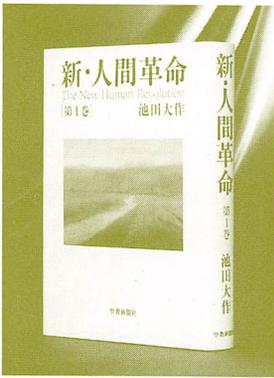
世界の新しい歴史の舞台に

「地球上から悲惨の二字をなくしたい」との恩師の
願いを胸に、人類の平和と幸福を開く世界旅へ――

新・人間革命

第1巻

「旭日」「新世界」「錦秋」「慈光」「開拓者」の章



平和ほど、尊とときものはない。
平和ほど、幸福なものはない。
平和こそ、人類の進むべき、
根本の第一歩であらねばならない。



★絶賛発売中！
書店にてお求めください！

★四六判上製 本体価格 1,238円

※消費税が別に加算されます。



平和行動展

連載 143

中国・内蒙古大学から贈られた

「名誉教授証」と「馬の置物」

1997年10月6日、池田SGI会長は、中国の名門大学である内蒙古大学の名誉教授に就任した。この年、創立40周年をむかえた内蒙古大学は、中国の少数民族地域で最初の総合大学。席上、旭日干学長はSGI会長を、人類の平和へ常に先頭に立ち、中国の発展に多大な貢献をしている、「中国人民の『古き友人』というにふさわしい」と称えた。30年前、SGI会長は東西冷戦の渦中にある中国との国交回復を提言した。SGI会長が築きあげた、日中の友情と信頼の絆は、時とともに大きく広がり、更なる輝きを増している。



後継の友が祝福するなか、旭日干学長からSGI会長に「名誉教授証」が。SGI会長は「若き英知の学徒とともに、永遠なる日中友好と世界平和へ」と語った



名誉教授証。
中国語とモンゴル語で記されている



「モンゴル民族は馬が大好きなんです」（旭日干学長と、輝く馬の置物が贈られた）

World Square

世界の街に広布の若人

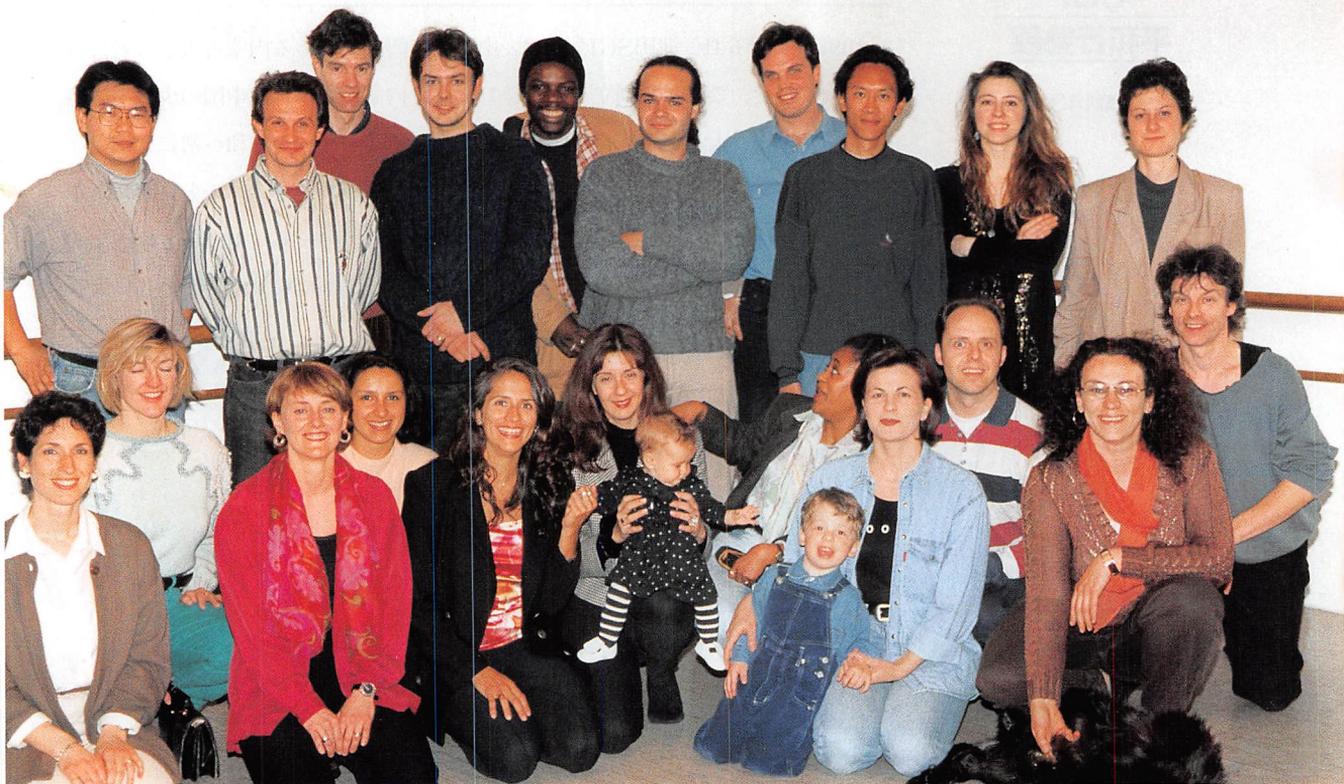
連載-38

ワールド・スクエア



スイス

ジュネーブ



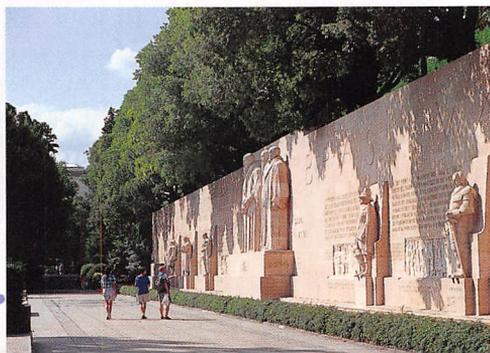
ジュネーブ・ローマンド支部の青年部代表メンバー



日々研鑽を目指し、勉強会に集う

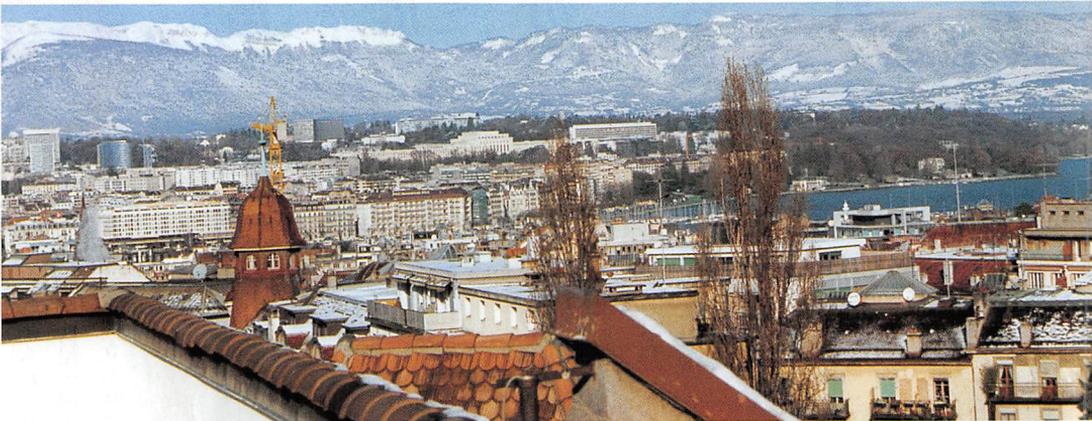


ジュネーブの市街地



16世紀、カルヴァンによってなされたジュネーブ宗教改革の記念碑。約100人にも及ぶ

スイスの北側に連なるジュラ山脈



WHO(世界保健機関)本部。ジュネーブには、国際赤十字委員会や国連ヨーロッパ本部などがあり、国際機関の中心的都市となっている



ジュネーブの名所・レマン湖の大噴水。高さ140mまで噴き上がる



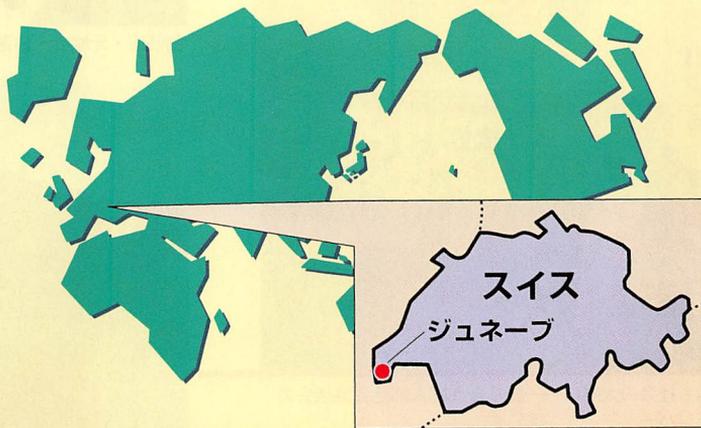
研修会でのひとこま



市民の憩いの場・マドレーヌ広場のカフェテリア

独自の憲法と政府をもつ20余りのカントン(州)が連邦をなしているスイス
その中の1つ・ジュネーブは
レマン湖の西に位置する世界有数の国際都市
多くの国際機関の一大センターであり
世界中から観光客の集まる美しき街
ジュネーブの若き世界市民は
新世紀に人間主義の連峰を築く

(本文70頁)



岡山文化会館

中国・四国の「交流の十字路」として重要さを増す岡山。岡山文化会館は昨年夏、県広布の新牙城として誕生した。児島湾を望む地に、明るい建物が、地域の灯台として「幸の光彩」を放つ。愛する岡山の友へ、と池田名誉会長から長編詩「金波の海に「幸のかけ橋」を贈られて10年。この指針を胸に岡山の友は金の歴史を築いてきた。新世紀を迎えようとする今、闇を破る「旭日の岡山」を合言葉に、一人立つ強き賢者のスクラムが広がる。



「ダイヤモンドの岡山」へ限りなき前進の宝城・岡山文化会館



昨年秋に開催された総県の青年文化音楽祭。各園ごとにも行われ、一万人の青年から大歓喜の波動が



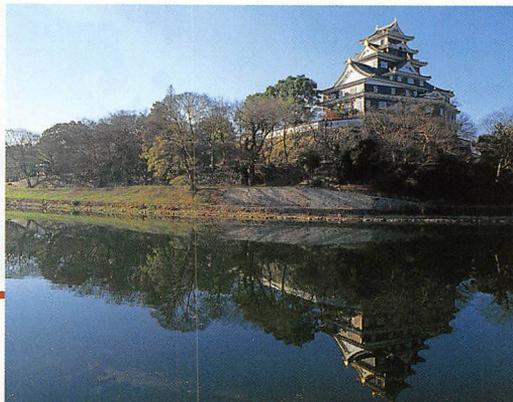
岡山総県の全ラロックを紹介した支部アルバムが展示コーナーに



創価班・牙城会・白蓮グループの代表メンバー



私も社会の太陽に——語り合う婦人部社会協議会のメンバー



堂々とそびえる岡山城

春夏秋冬



大白蓮華

②

1998 No. 570

「天曇るつめたさに触れ梅ひらく」(鷲谷七菜子)

吐く息も真つ白に手足も凍える寒中

暦のうえでは春が立ち

そちこちで可憐な梅の花の香りが漂い始める

梅を「木母」とも称するのは

この字が「木」と「母」の合成であることによるが

辛苦のなかでも笑みを絶やさぬ慈母を思わせる一面が

梅花にはある

観心本尊抄(二四二節)には

「木中の花信じ難けれども縁に値うて出生す」と

春告草の異称をもつ梅は

極寒を縁として

枯れ木のごとき枝から蕾を膨らませ花を開かせる

仏法もまた同じ

勇気を奮い、障魔と戦うなかに威光勢力は増し

信じ難き境涯の変革も起こる

(由)

「巻頭言」 勇猛精進こそ創価の魂 秋谷栄之助 10

法華経の智慧

21世紀の宗教を語る② 12

分別功德品 弘教の功德——我が身に「獅子王の大生命力」が!!

池田名誉会長 斎藤克司 遠藤孝紀 須田晴夫

「連載」 忘れ得ぬ世界の友⑩ 38

「幸せには勇気が必要です
信念に殉じる勇気が!」

ネパール国立トリバパン大学元副総長
ネパール王国 マテマ駐日大使



ネパール国王の
御即位25周年記念コイン

「今月の拝読御書」

生死一大事 血脉抄／兵衛志殿御返事 45

●座談会御書ポイント講義 47

●友人と語る座談会御書 48

●御書講義の内容の要点 54

「御書の御文と学会指導」 悪しき聖職者と戦え 30

大白蓮華 ②月号

1998 February No.570 目次

The Daibyakurenge

グラフィア

*SGI平和行動展^㉔

中国・内蒙古大学から贈られた「名誉教授証」と「馬の置物」

*ワールド・スクエア^㉕ スイス・ジュネーブ

*われらの広場——会館・研修道場^㉖ 岡山文化会館

〔質問箱〕「一生成仏」と「即身成仏」の違い 坂井泰博 32

〔ウーマン・アイズ〕かけがえのない人生を人々のために 奥山弘子 33

〔教学研究会資料〕「立正安国論」研鑽のために① 34

〔あしおと〕西口良三／ファウスター・チャンティ／中野也寸志／常深勝世／沢田幸子 40

〔連載〕新入会の方のために⑩ 大切にしたい——家族との心通う交流 沖野君枝 63

〔連載〕御書とともに⑩ 浄蔵浄眼御消息 66

〔連載〕ワールド・スクエア^㉕ ジュネーブ 70

〔連載〕教育プラザ^㉗ “生きる力”の育成 海野 衛 72

〔連載〕いのちの不思議⑩ “リウマチ”との闘い 広瀬 恒 74

〔教学随想〕仏典の譬喩と説話 細田俊雄 77

〔青年部教学研究〕21世紀に生きる宗教と創価学会の正義① 埼玉県青年部教学研究室 80

〔連載〕サイエンス・トーク⑩ よく効く薬の話(中) 藤本幸男 84

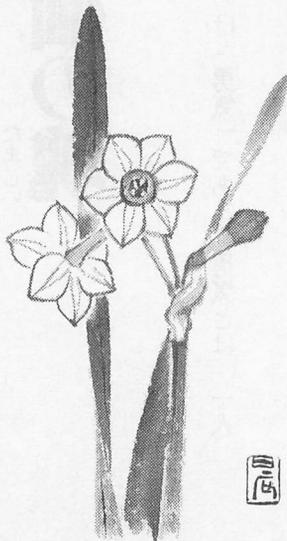
〔連載〕仏教入門⑩ 根本分裂 88

〔創作短編童話〕ひとすじのけむり⑤ とやま まさゆき 92

〔なぜなの？それはね…〕おしゃれと流行 96

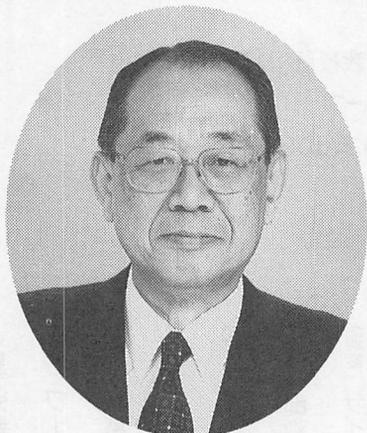
〔我が家のドラマ〕群馬県 鈴木宏明 97

*読者の広場・モニター便り 98



卷頭言

勇猛精進こそ創価の魂



創価学会会長

秋谷 栄之助

仏法を實踐していくうえで最も大切なものは「勇気」である。勇気とは「一人立つ」の異名でもある。

釈尊が弟子たちに一人で各地へ修行に行くように指示したのも、一人立つ勇気を教えられたものである。日蓮大聖人は、御書の中で幾度も「臆病にては叶うべからず候」（一一九三頁）と仰せられている。武士である四条金吾に対しても、あえて臆病であってはならないと言われているのは、どれほど信仰を持ち続けるうえで勇気が必要かを物語るものであるといえよう。

臆病であれば、仏道修行は成就しない。何よりも大聖人御自身が、「勇気」を唯一の武器として、ただ一人権力に立ち向かわれ、御本仏の振る舞いとして、身をもってお示しくくださったのである。

学会もまた「勇気」を掲げてきたがゆえに大発展してきた。なかんずく歴代会長の行動は「勇猛精進」の実践に貫かれている。「敢んで為すを勇と言ひ、智を竭すを猛と言ふ」とあるように、勇猛精進の信心によって、険難の坂を乗り越え、日本の広宣流布の基盤を盤石にし、未曾有の世界広布の時代を開いてきたのである。

日寛上人は、勇猛とは信心、精進とは題目であると結論されている。言い換えれば勇猛とは強い信心、戦う信心のことであり、精進とは強い祈りのことである。勇猛精進とは、強盛な信力で祈ることであり、即行動することである。

勇猛と蛮勇は違う。勇猛とは智慧を尽くすことである。強盛な信心のなかに智



画・西村昭二郎

慧がわき、祈ることは具体的行動が伴うものである。祈ったから自動的に勝てるのではなく、祈って行動するから勝つのである。祈りと行動は即一体である。

精進について、大聖人は御義口伝で「一念に億劫の辛勞を尽せば本来無作の三身念念に起るなり所謂南無妙法蓮華経は精進行なり」(七九〇頁)と仰せである。我が一念に億劫にわたるほどの労苦を重ねることによって、自身の胸中に仏の智慧の泉が滾々と湧き出るのである。

ゆえに戦う人が仏なのである。何事も一つ一つ丁寧に成功させようと真剣に取り組み努力する、その精進行を積み重ねる人が、即そのまま仏なのである。

大聖人はこの御義口伝の中で法華経の一節の読みを変えられている。「精進するのは仏道を求めるがためである」と従来読んでいた経文を「精進行そのものの中にすでに仏道が成就している」と読まれ、その本義を示されている。勇猛精進の心を出して戦って戦い抜く人が真の大聖人の弟子である。

この「勇猛精進」の信心があれば何も恐れるものはない。濁悪の乱世には信念の人が光る。動乱の時代であればあるほど勇猛精進の人が輝く。創価学会は草創以来、何も恐れずに勇猛精進の精神で戦ってきた。だから見通しの暗い不安定の時代にあつて学会は各界から信頼を集め、希望の存在となっているのである。

二月は「伝統の月」である。いうまでもなく、その歴史の淵源は池田先生が東京・蒲田で大法戦を展開されたことにある。青年の「一人立つ」実践が不滅の歴史を築いた。「必死の一人は万軍に勝る」と先生に教えていただいた通り、一人が真剣になれば広布は進む。勝利は青年の気概と息吹から生まれる。

今こそ一人一人が勇猛の獅子となって真剣に戦おう。そして、各人が不滅の境涯革命、宿命転換の戦いを通し、各地域にあつて偉大な広布の歴史を築く活動を展開していこう。

智慧

●21世紀の宗教を語る

池田名誉会長

斉藤克司教学部長 ● 遠藤孝紀副教学部長 ● 須田晴夫副教学部長

第37回 分別功德品

弘教の功德——我が身に

「獅子王の大生命力」が!!

じゆりょうほん えいえん せいめい
寿量品の「永遠の生命」を

かくち
覚知すると どう変わるか。

ふんべつ くどくほん
続く分別功德品では

すべてを功德へと転じゆく

かちそうぞう
「価値創造の人生」を

語り合っています。



連載

法華経の

齊藤教学部長 早いもので、「法華経の旅」も三年が経ちました。あつという間です。

池田名誉会長 諸君には、あつという間でも、毎月やる私は大変なんだよ（笑い）。

しかし、「生命の世紀」への大事な作業だから、頑張つて、総仕上げの探究を開始しよう。

一同 よろしくお願ひします。

名誉会長 これから「分別功德品（第十七章）」「随喜功德品（第十八章）」「法師功德品（第十九章）」と、三章にわたつて「功德」という名前がついた章が続く。

全部、妙法の功德が説かれている。

なканずく、妙法を弘める大功德が説かれている。「広宣流布に戦う人」の生活、人生は、どうなっていくのか。それが説かれている。

その意味で、現代において、これらの経文を実感できるのは、私どもをおいてない。

その確信で学んでいこう。

まず「功德」とは、どういう意味だろうか。

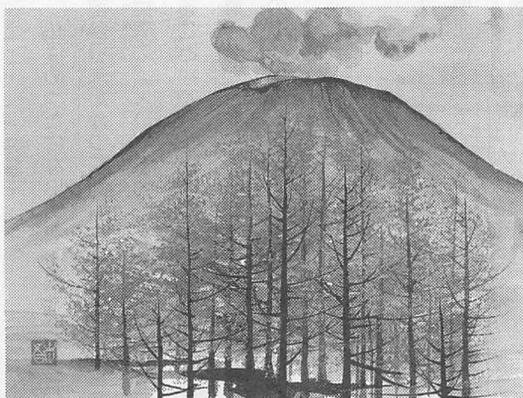
須田副教学部長 はい。「功德」とは「利益」とほとんど同じ意味としてよいと思います。

「功德福德」の略とする場合があります。

「功能」とは福利・福德を生じさせる働きです。

「福德」とは、この功能によって生じた結果です。

善い行動（善行）には、福德を生じさせる「功能（働



画・木村圭吾

分別功德品から

仏希有の法を説きたもう 昔より未だ曾て
 聞かざる所なり 世尊は大力有して 壽命量
 るべからず 無数の諸の仏子 世尊の分別し
 て 法利を得る者を説きたもうを聞いて 歡
 喜身に充徧す
 (開結五一四六一)

通解

仏はめつたにない法をお説きになられた。
 昔から未だかつて聞いたことのない法である。
 世尊には大いなる力があって、その壽命は量
 ることができない。無数の多くの仏子は、世
 尊が分別して、法の利益を得た者を説かれる
 のを聞いて、歡喜が全身に充満している。

き)が「徳」として備わっている。このことを「功德」という場合もあります。

功德は「行動」に備わる

名誉会長 少々、まわりくどい説明だが(笑い)、要するに、善の「行動」そのものに「功德」は備わっている。

決して、他から与えられるものではない。自分自身の生命の中から、自分自身の行動によって、泉のごとく滾々と湧いてくる。奔って出てくる。

それが「功德」です。

遠藤副教学部長 棚からポタ餅のような、いわゆる他力本願的な甘えとは違いますね。

名誉会長 日蓮大聖人は、「六根清浄」によって「功德」はあると言われている。

「六根(眼・耳・鼻・舌・身・意根)」が「清浄」になる

とは、我が生命の浄化です。

「人間革命」であり、「宿命転換」です。

〈法師功德品の御義口伝に「功德とは六根清浄の果報なり(中略) 功德とは即身成仏なり又六根清浄なり」(七六一)と〉

「成仏する」すなわち「人間革命する」こと以上の大功徳はない。

生活上のさまざまな功德も、自分自身の生命が浄化された分だけ、依正不二で、さまざまな幸福の現象として現れてくるのです。

齊藤 根本は、自分自身の生命変革にあるということです。ね。

名誉会長 自分が変われば、「さいわいを万里の外より」(一四九二頁)集めることができる。

戸田先生はよく「私が受けた大功德をこの講堂いっぱい」とすれば、諸君の言っている功德は小指の先くらいのもの

だ」と言われていた。
 広宣流布のために牢獄まで行って、牧口先生とともに迫害を一身に受けた。その「行動」の結果です。
 大聖人は「悪を滅するを功と云い善を生ずるを徳と云うなり」（七六二頁）とも言われている。

自分自身の生命の「悪」をなくし、「善」を生みだしていくのが「功德」です。

そうなるためには、折伏です。折伏とは「悪」を破折して、「善」に伏せしめることです。

齊藤 「悪を滅し、善を生ぜしめる」行動ですね。その行動によって、自分自身の生命の「悪を滅し、善を生ぜしめる」ことができるということですね。

名誉会長 反対に「法華經の敵を見ながら置いてせめずん

ば師檀どもに無間地獄は疑いなるべし」（一〇五六頁）と大聖人は仰せだ。

「法華經の敵を見ているながら、放置して、責めなければ、師も門下も、ともに無間地獄の苦を受けることは疑いなし」

折伏です。これから学ぶ三章も、基本は「流通分」に入る。

「分別功德品の前半」は、本門の正宗分。「涌出品の後半」と「寿命品」とこれを併せて「一品二半」とする。

「流通」とは「流れ通わしめる」ことです。「弘教」です。弘教の功德を説いているのです。

妙法によって、人の幸福に尽くした分だけ、自分も幸福

御義口伝から

此の品は上の品の時本地無作の三身如来の
 寿を聞く故に今品にして上の無作の三身を信
 解するなり、其の功德を分別するなり功德と
 は十界己己の当体の三毒の煩惱を此の品の時
 其の儘妙法の功德なりと分別するなり、其の
 功德とは本有の南無妙法蓮華經是なり

（御書七九九頁）

通解

この品（分別功德品）は、前の品（如来寿命品）の時、本地である無作三身如来の永遠の寿命を聞いた菩薩大衆が、この品でその「無作の三身」を信解するのである。その功德が、ここに分別されている。

すなわち、無作の三身を信解した時には、十界のおのの衆生が本然的にもっている貪・瞋・癡の三毒の煩惱は、そのまま妙法の功德である、この分別功德品では分別するのである。その功德とは、我が身がもともと南無妙法蓮華經の当体であると悟ることである。



になる。これが仏法の功德論です。
 遠藤 教えを「流れ通わしめる」のは弟子の使命ですから、法華経のこの章以下は、「弟子の戦い」を説いているわけですね。

✪ 「生きた哲学」か否か

須田 「功德」と言うと、いわゆる「現世利益」のように思って、低級な宗教のように見下す人もいます。
 しかし、仏法の功德論は、「生命を浄化せよ」「自分自身を変革せよ」という教えなのです。
 名誉会長 功德とは、現代的に言えば、「価値」であり「価値創造」ということです。

価値の内容は「美」「利」「善」です。
 その反対(反価値)は「醜」「害(損)」「悪」です。
 人間の生活は、だれもが、これらの「価値」を目指して生きていくのではないだろうか。

須田 働くのも、食べるのも、本を読むのも、病気を治そうとするのも、全部、何らかの「価値」を得よう、創ろうとしていますね。

名誉会長 だれもが「幸福」を求めている。草木も自然に太陽に向かって伸びる。
 人間もよりよき生活へ、よりよき生活へと生きている。それは生命の本然の働きであり、それがなくなったら、「生きながらの死」です。墓場に入ったようなものです。
 斉藤 意識しようとしまいと、人間は幸福を求め、価値を

SGIの友は、妙法の偉大な功德の証明者。社会に、地域に、「価値創造の人生」の喜びを広げる(上からアメリカ、ザンビア、イタリア、アルゼンチンの友)

求め、功德を求めている——たしかに、これは厳然たる事実だと思えます。理論や解釈をうんぬんする前に、この「事実」から出発すべきです。

そうでない、どんな哲学も、実人生と関係のない「死んだ哲学」になってしまいません。

遠藤 仏法では、積尊以来、「利」を否定したことは一度もありません。

「功德」を積むことを常に奨励してきたのが仏法です。そもそも功德の「功」は「功」とも読み、「幸」のことです。また「徳」は「得」のことです。

〈御義口伝に「功は幸と云う事なり」(七六二頁)と。また「徳は得なり」(勝鬘宝窟卷上本)とされる〉

須田 もちろん仏法の「功德」は、目に見える「現世利益」だけのことではありません。しかし、それを否定することは、宗教を実生活から離れた「観念の遊戯」にしてしまふ。

または、現実生活を向上させる力をもたない「力なき宗教」の弁解になってしまうのではないでしょう。

煩惱すら そのまま功德に

名誉会長 ともかく、宗教を「主観」の世界のことだけと見る偏見があることは、たしかでしょう。

しかし、仏法は「生命の法」であるゆえに「生活法」なのです。

人生は、主観視すれば「我が生命」であり、客観視すれば「我が生活」です。

どちらか一方ではない。

主観に偏れば唯心論的になるし、客観に偏れば唯物論的になる。

どちらにも偏らず、「我が生命」を浄化し、強化して、「我が生活」を向上させていくのが仏法です。

また「我が生活」の改善をもって、「我が生命」の向上の証明とします。

たとえば「所願満足」と仏法では説く。「所願」は、基本的に客観世界の「我が生活」に関する。

「満足」は主観世界の「我が生命」の満足です。

この両者が完全に冥合すれば「所願満足」であり、それが「幸福」です。

これが戸田先生の哲学でした。

須田 そうしますと、「所願」が少ない人は、簡単に「満足」でできる——そうなるでしょうか(笑)。

名誉会長 ソクラテスだっと思いが、「ちよっぴりしか欲をもたないことが、幸福への道」と言っている(笑い)。

斉藤 ある意味で、小乗仏教は、欲望を滅することによって、「幸福」を得ようとしたと思います。

それに対し、大乘仏教なかならず法華経は「煩惱即菩提」と説きます。

煩惱という「生命エネルギー」を、悪の方向にはなく、善の方向に方向づけていく智慧を教えてください。

名誉会長 大いに欲ばり、大いに目標を高くして、全生命を燃やしていけと教えるのです。

「怒りを抑えよ」と説かず、悪に対しては激怒して戦え
 というのが法華経です。

御義口伝には「三毒の煩惱を此の品（分別功德品）の時
 其の儘妙法の功德なりと分別するなり」（七九九頁）と仰
 せです。

「貪・瞋・癡の三毒を捨てよ」というのでは偽善者をつ
 くってしまふ。

また末法の巨大な悪にとつて、こんな都合のいい民衆は
 ない。おとなしく、無力に、翻弄されるだけの民衆であつ
 てはならない。

大いに怒れ、大いに情熱を燃やしていけ、妙法を根本と
 すれば、すべてが価値創造のエネルギーに変わるのだ。こ
 れが法華経の哲学です。

ともあれ、「功德」と言い「罰」と言つても、宗教の専
 売特許ではない。

万人の生活は、「功德と罰」「価値と反価値」の連続で
 す。

商売して、売れば「得(利)」、だし、安く売って損すれ
 ば「損」すなわち「反価値」です。

「素晴らしい名画を描きたい(美の創造)」という主観が
 実現したら、主観と客観の冥合であり、「幸福」を感じ
 る。

望むように絵が売れたら、「利」の価値の創造です。
 価値創造できたら、人間は幸福を感じるのです。

そして、「いかなる境遇(客観世界)にあろうとも価値創
 造できる」大生命力を、我が生命(主観世界)に開発するの
 が法華経の目的であり、それを人間革命という。

須田 それが真実の「功德」ですね。

名誉会長 信仰したからといって、苦しいことが何も起
 らなくなるのではない。生きているかぎり、何か問題はあ
 る。

しかし、何があろうとも「心」は微動だにしてはならな
 い。妙法は「煩惱即菩提」「生死即涅槃」の法です。

広宣流布に前進していく信心があれば、必ず一切が「功
 徳」に変わる。その時はわからなくても、時とともに「万
 事これよかつたんだ」という所願満足の軌道に入ってい
 くののです。

それを前提にして、三つの章を学んでいこう。
 まず順序として分別功德品から。

「自我偈の功德」を多角的に

遠藤 はい。これは、前章の寿命品の説法を聞いた人々
 が、それぞれの境遇に応じて、さまざまな功德を得まし
 た。

その功德を十二段階にわたって分別して(区別して)説い
 てあります。

そこで「分別功德品」と言います。

斉藤 大聖人は端的に「自我偈の功德」と仰せです。

「法蓮抄」に「自我偈の功德をば私に申すべからず次下
 に分別功德品に載せられたり、此の自我偈を聴聞して仏に
 なりたる人人の数をあげて候には小千・大千・三千世界
 の微塵の数をこそ・あげて候へ」(一〇四九頁)とありま
 す。



斉藤教学部長

〈この自我偈の功德は、私が勝手に言う必要はありません。〉

法華經で、次の分別功德品に説かれています。この自我偈を聴聞して仏になった人を数えていうには、小千世界・大千世界・三千大千世界を微塵にしたほどであるとされているのです。

名誉会長 くわしくは、また論ずるとして、自我偈の説法を聴聞して仏になったというのは、文底から拝すれば、「南無妙法蓮華經如来を拝した功德」のことです。

御本尊を拝した大功徳です。

自分自身が久遠の昔より、久遠元初の御本仏と一体不二であったことを信解した大功徳のことです。

須田 分別功德品は、こう始まります。

「爾の時に大会、仏の、寿命の劫数長遠なること、是の如くなるを説きたもうを聞いて、無量無辺阿僧祇の衆生、大饒益を得つ」(開結五一―一)

〈その時、そこに集まっていた大勢の集いは、仏が、その寿命の劫の数が長く遠いことを、このように説かれたのを聞いて、無量・無辺・無数の衆生は、大いなる利益を得た〉

遠藤 この「大饒益」の中身については、こう説かれています。

「或は不退地に住し 或は陀羅尼を得 或は無礙の樂説 万億の旋総持あり 或は大千界 微塵数の菩薩有つて 各各に皆能く 不退の法輪を転ず(中略)是の如き等の衆生 仏寿の長遠なることを聞いて 無量無漏 清淨の果報を得(後略)」(開結五一―五)

名誉会長 釈尊の説いた功德を弥勒菩薩が、まとめ直して述べたところだね。

遠藤 はい。

ある者は「不退の地」に住する。

「不退」とは「退かない」ことであり、「前へ前へ」と永遠に前進できる境涯です。

名誉会長 そう。「進まざるは退転」「戦わざるは退転」です。

この「不退の境涯」を得られれば、その人はもう勝利者です。

斉藤 「陀羅尼を得」とは「聞持陀羅尼門」のことで、聞いた教えを忘れない力を得るということです。

名誉会長 「憶持不忘の人は希なるなり」(一一―三六)と、大聖人は仰せです。

「つたなき者のならひは約束せし事を・まことの時はわするるなるべし」(二三―四)です。

そうならない、誓いを忘れない境涯を得る。また師匠の教えをちゃんと覚えていて、実践している。

※語れば語るほど「声」は「力」に

須田 「或は無礙の楽説」とは、「楽説無礙弁才」のことで

す。礙りなく、自由自在に、相手の楽うところにしたがって、正法を説ける力のことです。

名誉会長 「声仏事を為す」(七〇八頁)です。

しゃべらなければならぬ。「口八丁、手八丁」くらいでいい。

もちろん「弁才」といっても、単なるおしゃべりではない。たとえ短い言葉であっても、ぴしっと的確に破折できる。

また、相手が心の底で一番知りたいことに、きちっと答えていける。

自分がわからなければ、「わかる人のところに行きましょう」。それでもかまわないのです。それが一番いい場合だつてある。

大切なことは相手の「心を揺さぶり」「心をつかむ」力です。

要するに、広宣流布への自在の言論戦です。

齊藤 たしかに、池田先生の世界的な言論戦は、この通りの行動だと思います。

対談集の発刊だけでも、あらゆる分野の人を相手に、約三十もの対談があります。



世界の知性との対談をはじめ、各国で共感を呼んでいる池田名誉会長の著作の数々。「誠実」と「行動」で刻み残した「魂の声」は、世紀を超えて人々を励まし続ける

〈対談の相手は、進行中のもも含め、外国人では、トインビー博士、アンドレ・マルロー氏、カレルギー伯、ルネ・ユイグ氏、ペッチェイ博士、ウィルソン博士、ロゲノフ博士とは二冊、キッシンジャー博士、カラン・シン博

士、デルボラフ博士、ポーリング博士、ウィックラマシ
ンゲ博士、常書鴻氏、カズンズ氏、アイトマートフ氏、アタ
イデ氏、ガルトウング博士、チリ共和国のエイルウィン前
大統領、ゴルバチヨフ氏、金庸氏、リハーノフ博士、ナ
ンダ博士、シマー博士ならびにブルジョ博士、ヴィティエ
ール博士、ジュロバ博士、また日本人では、松下幸之助
氏、井上靖氏、ブラジル移住者の児玉良一氏らである。』
名譽会長 仏法には、それだけの力があるのです。皆、ま
だまだ妙法の偉大なる力を知らない。

精神は休まない

須田 次の「万億の旋総持あり」というのは、「旋陀羅尼」
ともいいます。〈総持とは陀羅尼のこと〉

「旋」というのは、比重の異なるものが混じり合ってい
るのを旋回させて、遠心力で分離させることを言いま
す。

ものすごい「回転」によって煩惱を分離させ、昇華し、
仏の偉大さを示しきっていく精神力をいうと考えられます。
「陀羅尼」とは、善を行い、悪を止める精神力のことで
す。

名譽会長 本当の安穩の境地というのは、悪と戦い続ける
「大回転」のなかにあるということです。

次も、そうした「回転」の意味がこめられているでしょ
う。

須田 はい。五番目に「能く不退の法輪を転ず」、六番目
に「能く清浄の法輪を転ず」とあります。

「法輪」とは、教えを「回転する輪」に譬えたものです。
仏の教えを退くことなく弘めていこう、清浄なる教えを
どこまでも伝えきっていこうという信心の躍動を表現して
いると思います。

遠藤 このあと七番目に、多くの菩薩たちが八回生まれ変わ
った後に、この上ない完全なさとりに到達することが述
べられます。

それ以降、同様に⑧四回生まれ変わった後に⑨三回生ま
れ変わった後に⑩二回生まれ変わった後に⑪一回生まれ変
わった後に、多くの菩薩が、この上ない完全なさとりに到
達する、と続きます。

そして最後に、⑫「多くの衆生が皆、この上ない完全な
さとりに到達したいという心を起こした」と、寿命品を聞
いた功德の紹介がしめくられます。

奇藤 天台大師は、これらの功德を菩薩の五十二位に立て
分けています。

〈不退地(無生法忍) 十住、聞持陀羅尼 十行、樂説
無礙弁才 十回向、旋陀羅尼 十地のうち) 初地、転不
退法輪 第二地、転清浄法輪 第三地、八生して無上の
悟り(阿耨多羅三藐三菩提)を得る 第四地、四生して無
上の悟りを得る 第八地、三生して無上の悟りを得る 第
九地、二生して無上の悟りを得る 第十地、一生して無
上の悟りを得る 等覺、無上の悟りを得ようと発心する 十
信〉

菩薩が得る功德が、さまざまに挙げられています。一見
これらは「人によって、それぞれの段階の功德しか得られ
ない」ことを示しているように見えます。

しかし、そうではなく、むしろ「どんな人にも功德を与えられる」寿量品の力用の大きさを示していると思えます。

名誉会長 菩薩行によって得られる功德のすべてが「寿量品への信」に含まれているのです。

それは、なぜか。

「等覚一転名字妙覚」といって、寿量品を聞いて「等覚」に登った菩薩（仏と等しい）覚りを得た菩薩も、実は、その説法を通して、久遠元初の妙法を覚知し、一転して、名字即の凡夫の位から直ちに「妙覚」（仏の位）に入ったのです。

くわしくは次回に論じたいと思うが、譬えて言えば、「妙覚」という仏の位を目指し、一段一段、山を登ってきた。ところが登ってみると、何が見えてきたか。

寿量品の山頂から見た光景は何であったか。

それは、久遠元初以来、常住の本仏が、休むことなく不断に一切衆生を救う活動をなされている。自分自身も、かつてその化導を受けた。「大宇宙と一体の仏」と自分とは、本来は師弟一体であった。

その「我が生命の真実」を思い出したのです。

自分がどこから来て、どこへ行くのか、自分が何者なのか。それを思い出した。

この本有常住の仏とともに、永遠に一体で衆生を救っていくために働き続ける——その「わが使命」を思い出したのです。

「仏（妙覚）」とは決して、安住の「ゴール」ではなかった。「名字の凡夫」即「妙覚」こそが真実であった。

成仏の本因に住して「戦い続ける」その境涯こそが「仏」であった。

その真実がわかったのです。

あえて要約して言えば、そういうことになるでしょう。

斉藤 寿量品の文上では、そういうことは、はっきり説かれていません。

しかし、「五百塵点劫」の説法を「ヒント」として、そこまでわかったということですね。

名誉会長 信濃町の駅まで連れてくれば、あとは教えなくても学会本部には行ける（笑い）。

いわんや、一度本部に行ったことのある人なら、なおさらです。思い出せばいいのです。

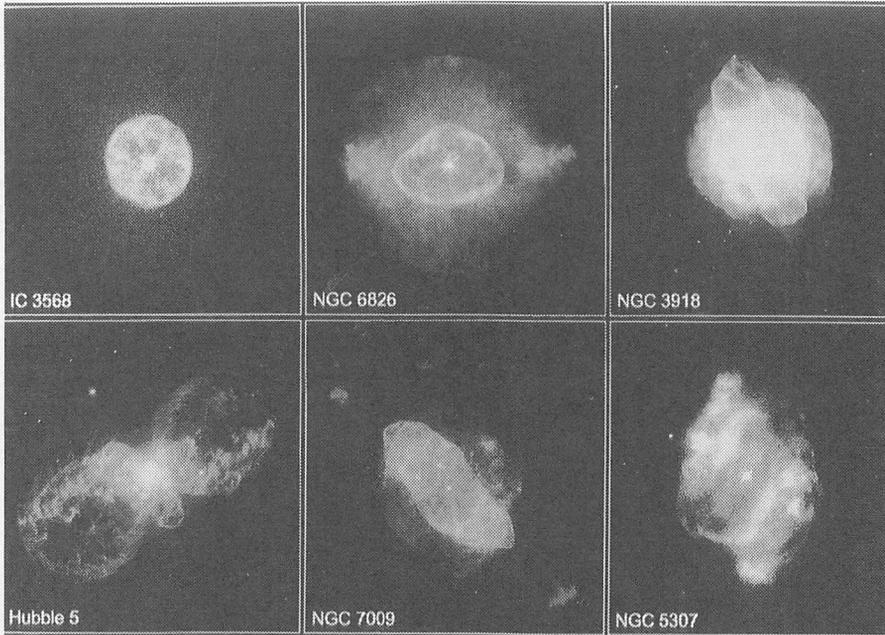
須田 釈尊が「すでに五百塵点劫という遠い昔に私は成仏していた」と説きました。それを聞いて「等覚」に至った聴衆は、釈尊が成仏するために師とした「久遠元初の妙法」こそ成仏の本因であることがわかった。

遠藤 そして、その法を信受したのが「名字即」で、それによって直ちに釈尊と同じ境地である「妙覚」に至った——文底からみた本質論はこうなるのではないでしょう。

星々のさまざまな死

名誉会長 自らの生命の根源に立ち返ったのです。

宇宙全体が、一つの大生命体です。自分もその宇宙生命と一体だとわかった。



「球形」「風船形」「蝶々形」など……ハッブル宇宙望遠鏡がとらえた星々のさまざまな最期の姿（97年12月17日、NASAが公表=AP）。星にも人間にも、「生死の二法」のリズムが

飛躍するようだが、先日、NASA（アメリカ航空宇宙局）が「星々のさまざまな死」の写真を発表していたね。須田 はい。ハッブル宇宙望遠鏡でとらえた写真です。

（一九九七年十二月十七日、公表）

星の最期の姿は、「球形」のもの、「風船形」「スプリングカラー形」「蝶々形」「ロケット形」「車輪形」のものなど、さまざまです。

遠藤 星にも「生」と「死」がある。「生死の二法」のリズムを奏でているということですね。

名誉会長 恒星の「死」は、星の質量によって違ってもいわれている。

太陽と同じくらいの質量の星だと、最期は燃え尽きて、ゆっくりガスを出しながら、やがて、多くは「燃えない星」となるそうだ。白色矮星と言われる星です。

齊藤 「燃え尽きて」静かに死んでいく——人間にもいませぬ（笑い）。

名誉会長 一方、太陽の数倍の質量があると、最期は華々しく「大爆発」を起こすと言われている。

齊藤 超新星といわれるものですね。

名誉会長 そうです。日本の藤原定家の日記「明月記」にも、今の「かに星雲」を生んだ超新星の大爆発が記録されている。

西暦でいうと一〇五四年（天喜二年）。

平安時代の後半です。

遠藤 ちょうど「末法の始まり」とされた年（一〇五二年）の二年後ですね。

須田 超新星というのは、天空に突然、輝き始めて、昼間でも肉眼で見えるほど輝くものもあるそうです。

そのあと、光がまた弱くなっていくわけですが——。

名誉会長 この時（一〇五四年）の超新星は、中国でも、ア

ラビアでも記録され、アメリカの洞窟にも、その記録らしい線画が残されているという。

遠藤 かに星雲は、地球からどれくらいかの距離ですか。

須田 たしか七二〇〇光年くらいです。

遠藤 そんな遠くの「死」が地球で大騒ぎを引き起こすほどですから、エネルギー満々の、まあ、実に「派手な死に方」です(笑い)。

須田 そういう死に憧れる人もいるでしょうね(笑い)。

齊藤 今回発表された写真では、太陽と同じくらいの質量の星にも「多彩な死に方」があるとわかったわけで、興味深いですね。

名誉会長 宇宙のありとあらゆる存在が、「生きています」。

「生死の二法」すなわち「妙法」の当体です。妙は死、法は生を表す。

物質面だけを見ても、星の「死」によって宇宙にまき散らされた物質が、また次の星の誕生に使われ、生物の体にも使われていく。

我々の体をつくっている原子も、かつては、どこかの星として輝いていたものかもしれない。

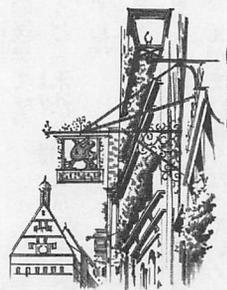
人間は「星の子」であり「宇宙の子」なのです。

我が生命は「宇宙の大生命」と一体であり、南無妙法蓮華経の功德とは、文字通り、宇宙大の功德である。はてがない。限界がない。

分別功德品には「虚空無辺なるが如く 其の福も亦是の如し」(開結五二九)とある。

また「譬えば、虚空の東西南北、四維(東北・東南・西北・西南)上下、無量無辺なるが如く、是の人の功德も、

窓の王様



ドイツでは二百年ほど前から仏教の紹介が始まり、多くの文化人・知識人に影響を与えた。哲学者ショーペンハウアーは、自らを「仏教徒」と呼ぶほどに関心を示し、仏教思想を取り入れて独自の哲学を展開した。そのショーペンハウアー

近代ドイツ文化と仏教

ーに心酔したオペラ作家のワーグナーは、釈尊を主人公にした「勝利者」という作品を構想した。この二人に強い影響を受けたニーチェは、キリスト教批判の立場に立ち、仏教や釈尊を高く評価した。また、ノーベル賞作家のヘルマン・ヘッセも、小説「シッダールタ」を残している。それぞれ小乗仏教の範囲での着想には違いないが、東洋から遠く離れたドイツの地で花開いたこれらの動きは、仏教のもつ大きな力を感じさせる。

亦復是の如し」(開結五二六)とある。

必ず「所願満足」に!

名誉会長 御本尊には、無量無辺の功德がある。無量無辺だから、説き尽くすことはできません。「祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福

として来らざるなく、理として顕れざるなきなり（日寛上人の「観心本尊抄文段」）です。

その大確信の中に、分別功德品で説かれる「四信」も「五品」も、すべて含まれている。

「法華經の功德について、在世の弟子に約して「四信」、滅後の弟子に約して「五品」の各段階を立てる。

四信とは①一念信解（一念の信心を起す）②略解言趣（説かれたことの趣意をほぼ理解する）③広為他説（広く他人のために説く）④深信観成（深く信じ真理を観じて理解する）。

五品とは①初随喜品（法華經を聞いて随喜の心を起す）②読誦品（法華經を読誦する）③説法品（自ら受持し他人のために説く）④兼行六度品（法華經を受持する傍らに六波羅蜜を行ずる）⑤正行六度品（六波羅蜜を本格的に行ずる）。

ゆえに、「信心」があれば、乗り越えられない苦難などない。



遠藤副教学部長

「獅子王の大生命力」がわいてくる。御本仏・日蓮大聖人の御生命がわいてくる。

分別功德品にも「仏と同じく師子吼して」とある。

齊藤 はい。こうあります。

「我未来に於いて、長寿にして衆生を度せんこと 今日の世尊の諸釈の中の王として、道場にて師子吼し、法を説きたもうに畏るる所無きが如く、我等も未来世に一切に尊敬せられて、道場に坐せん時、寿を説くこと亦是の如くならんと願わん」（開結五二二ジベ）

（仏の寿命の無量なることを聞いて、そのまま信じ受けいれる人々は、この法華經をいただいて、このように願う）私は、未来において、長き寿命を生きて、衆生を救済しよう。あたかも、今日の釈尊が、多くの釈迦族のなかの王として、道場において師子吼し、法を説かれるのに恐れなきように、我らも未来世において、すべてのものに尊敬されて、道場に坐す場合には、仏の無量の寿命を説くことにおいて、積尊のようでありたい、と）

名誉会長 「長寿にして」とは「妙法の大生命をもって生き抜く」ということです。

「師子吼」とは、「師」とは師匠、「子」とは弟子。師とともに叫びきっていくという師弟不二です。これが本来の折伏です。

私は「戸田先生は末法の折伏の師匠である。私はその弟子である。ならば折伏ができないはずがない」と決めた。その一念で、だれ人にもまさる弘教をなしたげたのです。

「畏るる所無し」です。恐れてはならない。恐れもなければ、グチも嘆きもない。晴れやかな「強氣



須田副教学部長

の信心」でいくのです。そこにこそ妙法の無限の功力が噴出してくる。

私は、あらゆる迫害に耐え、あらゆる障害を乗り越えて、正法を弘め、学会を守った。ゆえに御本尊から偉大な功德を頂戴した。

同じ御本尊を拝んでいても、こちらの信心が弱ければ、こみあげてくる真の「大歡喜」は味わえない。

信心次第で、功德が違ってくる。一人一人、千差万別の功德です。これを「分別功德」というのです。

また、それぞれの信心、境遇、宿命などによって、功德の現れ方は違うが、信心を貫けば、必ず最後には「所願満足」となる。これが「分別功德」の深義です。

たとえば、事故は絶対にあつてはならないが、かりに不慮の事故等で亡くなった場合にも、「信心」さえ燃えていれば、「須臾の間に」(五七四節)——すぐに——また広宣流布の陣列に戻ってこられる。

「悪知識」に染まれば地獄に墮ちるが、「悪象」に殺されても地獄には墮ちないと、経文にも御書にも仰せです。

「悪象に殺される」とは、今で言えば交通事故などの不慮の事故です。

いわんや、広宣流布の活動の途上で亡くなった方が、大果報を受けなければいけない。「転重軽受法門」(二〇〇〇節)にも、そう仰せです。いわば殉教です。人間として最高に尊貴なる死なのです。

学会同志の莊嚴な生死

齊藤 先ほど、「星の死に方も、さまさまである」というお話がありました。人間の死に方もさまさまです。

これは、白樺会の書記長の小島明子さんから聞いた話です。よく「本人の生前の死生観が大切」と言いますが、臨終の時は理屈や知識だけでは全く役に立たないそうです。

貪・瞋・癡の三毒が噴き上げてくるような厳しきの中で、「本心に心の底から安定していきな」と乗り越えられるものではないと語っておられました。

地位や財産が関係ないのは当然ですが、学会の世界にあつても、役職は関係ない。自分は幹部だから大丈夫などと無理して痛みをつくらなくても、臨終の苦悩はごまかすことができない、と。

遠藤 ある壮年の方の体験ですが、訪れて来る人を最後まで励まし続けて亡くなるんですね。

もう、これで最期だという時に、看病していた奥さんが

泣き出す。そうしたら、ご主人が「泣くんじやない」と、かえって励ましたそうです。

看護婦さんたちにも、「もうこれで自分は最期だと思えます。お世話になった他の看護婦の皆さんにも『ありがとう』ございました」とお伝えください」とあいさつをされた。

そして、最後まで奥さんを励まして亡くなっていかれたそうです。

須田 私も、「看護婦さんたちから、『マシユマロのような存在だった』と言われた」婦人部の方の話を聞きました。

なぜ、マシユマロかというところ、その人を看病した誰もが、まろやかなマシユマロにフワフワと抱っこされるような気持ちになるからだというのです（笑い）。

人を思いやる温かさに満ちあふれていた方でした。亡くなる最期まで、豊かな気持ちで周りを包んでいたそうです。

名誉会長 菩薩です。いな仏の生命です。自分の境涯革命はおろか、他人の境涯まで高めながら亡くなられている。

齊藤 分別功德品は「如来の寿命の長さを知る功德」すなわち「永遠の生命を知る功德」が説かれています。

それはまさに、こうした人たちの臨終の姿にあらわれているのではないのでしょうか。

名誉会長 そうです。現実を離れた観念の話ではない。

私も無名の庶民が力強く、「生も充実、死も充実」と胸を張って、どこまでも前向きに、真剣に生きていく。その大生命力を与えるために仏法は説かれたのです。

窓の経王



法華経では「三千塵点劫」「五百塵点劫」というように、時間の単位に「劫」が使われている。この「劫」は、梵語「カルパ」の音写で、長遠な時間を指す。具体的には、この宇宙が成立するまでの時間（成劫）、安定して存在している時間（住劫）、破壊されていく時間（壊劫）、破壊の次に生成が始まるまで

「劫」とは

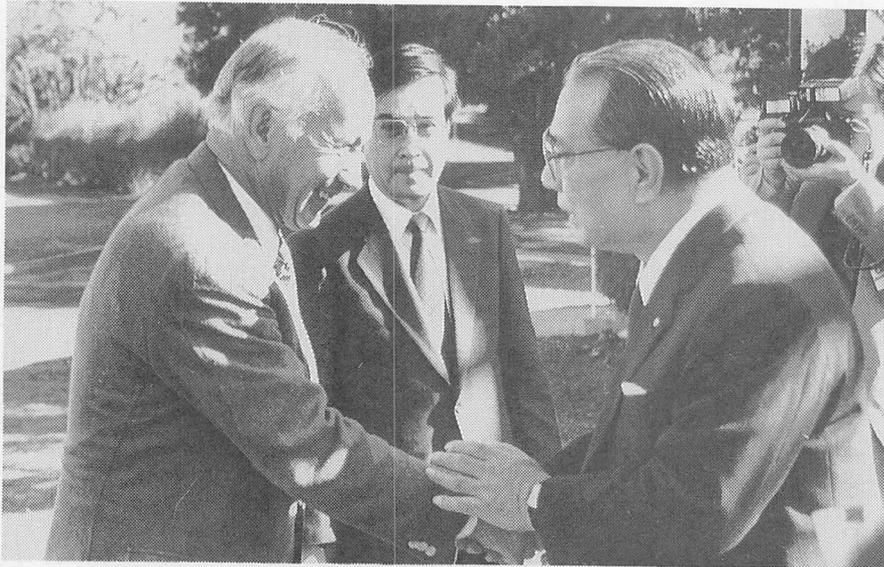
の時間（空劫）、これらそれぞれ「無限ともいうべき時間」を、一つの「時間の単位」として考えたのである（成住壊空の「四劫」が繰り返されるとした）。

その「劫」の長遠さを、仏典ではさまざまな譬喩を用いて説いている。例えば大智度論では、四十里四方の石山を百年ごとに軟らかい衣で拭いて、石山が摩滅しつくしても「劫」は尽きない、とある。また、四十里四方の大城を芥子で満たし、百年に一度、一粒を取って、取り尽くしても、なお「劫」は尽きないという譬えもある。

分別功德品には、こうある。

「精進勇猛にして、諸の善法を撰し、利根智慧にして、善く問難に答えん」（開結五二六節）

「精進すること勇猛にして、多くの善なる法を学び、機根と智慧にすぐれ、難しい問いにも、巧みに答えるである



他者の幸福のためにと行動するとき、人間本来の「生命の太陽」が赫々と昇る——「アメリカの良心」ノーマン・カズンス氏と「世界市民」の対話を（87年2月、アメリカ創価大学で）

う
これこそ、我が同志の姿ではないだろうか。勇猛精進
です。
須田 そう思います。

※最後まで「戦つ人生」

須田 先ほどの小島さんが、どうしても忘れられない患者さんがいたと語っていました。

壮年部員で、ガンで亡くなったのですが、どんなに重度になっても、最後まで「戦う人生」を忘れなかったというのです。

一つ一つの治療の時も、どんなに辛い時も、しっかりと戦っていく姿勢は崩れなかった。

医者や看護婦さんに、「きょうは、こうです」と容体を適切に話し、治療方法を相談し合いながら、可能性のある限り戦った。

小島さんが一番印象的だったのは「目」です。剣豪のような目であったといえます。

一度、元気になって退院し、再発して入院しますが、その時も戦いにいどむ「剣豪の目」は変わらない。

小島さんは、「肉体が蝕まれていても命そのものは燃えている」と感じたそうです。

名誉会長 最後まで生きて生き抜くことが、「永遠の生命を知った」証です。

「永遠の生命」と言っても、目に見えるわけではない。しかし、永遠の生命を「信ずる」ことはできます。

斉藤 法華経では「信」が重要であることが何度も強調されています。

名誉会長 信ずるということは、全生命を、その法にかけていくということです。「行動即信心」です。

折伏がそうです。友への励ましがそうです。妙法を伝えきっていく戦いが、今世の生命を鍛えるのです。

そして、その鍛え抜かれた生命が、三世の軌道を自在に飛翔できるようになる。

三世にわたる永遠の自由を、知らず知らずのうちに、我が生命に会得する。

ロケットが宇宙を飛んでいけるように、生命に無尽蔵のエネルギーを貯蔵していく。獅子王の「大生命力の自分」になれる。

それが如来寿命品の功德です。

齊藤 分別功德品で説かれる「無生法忍」の功德を思い出します。

「無生法忍」とは、先ほどの「不退地」の功德と同じとされますが、「無生」とは、生もなく死もない、すなわち常住の生命を確信する境涯です。

「忍」とは「認」の意味で、一切の諸法（現象）が「無生（不生不灭）」であることを認めることです。

名誉会長 我が身が「永遠の仏」と一体である。仏とは、この我が生命のことである——この大確信があれば、断じて行き詰まりはありません。

苦しみを乗り越え、悲しみを乗り越え、情性を乗り越えて、無限に前進できます。

悠々たる「不退地」です。

遠藤 それが仏法の樂觀主義ですね。

名誉会長 仏法の樂觀主義は「なんとかなるだろう」というような「現実逃避の樂觀主義」ではない。

むしろ悪は悪として、苦しみは苦しみとして直視する。

そして、それと断固、戦う。どんな悪や苦難とも「戦える自分自身」を信ずるのです。

そういう「戦う樂觀主義」です。

樂觀主義と言えば、「アメリカの良心」といわれたノーマン・カズンズ氏の、あの笑顔が浮かんでくる。亡くなられました。

氏は、仏法者ではなかったが、人間の力を信ずることに
おいては仏法者と同じであった。

氏はこう言われています。

「誰でも死を恐れなくてもいい。ただ一つ恐れなくてはならないのは、自分の持つ最大の力を知らずに死ぬことである。それは自分の命を他人のために捧げる自由意志の力である。我々の力で他人の内部の何かが蘇えたら、その時我々は不死に近づいたのである」（『人間の選択』松田銃訳、角川選書）

他人の幸福のために、自分を捧げていく。自由意志で、「菩薩の戦い」に打って出る。その時に、我が生命に「不死」の大生命力が湧現してくる。仏の「永遠の生命」が満ち潮のように、生命を浸してくる。

生活だって、よくならないわけがない。

その意味で、唱題できることが、弘教できることが、広宣流布に働けること自体が、最高の「功德」なのです。

「南無妙法蓮華経と唱うるより外の遊樂なきなり」（一一一四三）です。

「広宣流布に生き抜く人生こそ最高だ」と、明らかに分別していく——そう覚悟していく智慧を、分別功德品は教えているのです。（つづく）

と戦え

御書の御文と 学会指導

一凶を責めるのが安国論の精神

「如かず彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには」(二四六)

★社会にも「一凶」がある。大聖人は当時の日本の立正安国にとって、哀音の念仏の流行こそが「一凶」であるとされたのです。

★「一凶」——根本の病因と戦わずして、どんなに策を使っても解決はない。

★現在においては、日顕宗の大謗法こそ、「一凶」である。ゆえに、今、私どもが、御本尊根本、御書根本に進めている「正義の宗教改革」こそが、現代における「立正安国」の行動であり、大聖人から、こよなく御称賛いただけることを確信していただきたい。

非難・中傷を恐れるな

「されば仏法中怨の責を免れんとて・かやうに諸人に悪まるれども命を釈尊と法華經に奉り慈悲を一切衆生に与へて謗法を責むるを心えぬ人は口をすくめ眼を瞋らす、汝実(なんじまこと)に後世を恐れば身を軽しめ法を重んぜよ」(四九六)

★それゆえ、仏法の中の敵とならないように、このように人々に憎まれても、我が命を釈尊と法華經に捧げたまつり、慈悲を一切衆生に与えて、謗法を責めるのである。それがわか

らない人は悪口を言い、眼をいからせる。(しかし)あなたも本来に來世を恐れるならば、我が身を軽んじて法を重んじなさい。(すなわち、身を惜しまず、正法を明らかにし、悪侶らを責めなさい)

★責めるといっても、むやみに騒ぎたてたり、どこかにデモ行進する必要はない。……王者の学会は、「獅子」のごとく、「大河」のごとく、堂々と「御書」と「道理」のうえから魔僧を責め、追放してまいりたい。

★御書も經文も、悪侶を容赦なく懲らしめてこそ真の仏弟子であり、妥協すれば仏敵とされているのである。

自身の悪を滅することにも

「悪侶を誡めずんば豈善事を成さんや」(二一七)

★悪い僧侶を戒めなければ、どうして善事を成し遂げることができようか。できるはずがない——と仰せである。

★形ではなく、正しい振る舞いをしてこそ、尊ぶべき僧宝であり、法に反する悪しき振る舞いの者は悪侶であり、正法の敵であると、御書の多くの御文を通して、大聖人は仰せである。

★悪と戦うからこそ、自身の胸中の悪を滅ぼすことができる。



悪しき聖職者

したがって、そこに自身の人間革命があり、宿業の転換もできるんです。

だからこそ、悪人や迫害者の存在にも、結果的に意味を見いだすことができ、救ってあげようという、慈悲の心をいだけるのです。

★正法の世界も、法を奉ずる人が、「人間に奉仕する」という本来の慈悲の実践を怠る時、「人間を利用する」権威・権力の魔性のとりこになるスキができる。

それでは、もはや「法滅」に向かつてしま

う。その流れをとどめ、本来の「人間のため」という原点に戻り、常にそこから出発する戦いが必要となる。

その戦いは、世界に真の「人権の世紀」「人間性の世紀」を開く運動ともなっていく。

権威と権力が結託する構図

「悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮が如し、これおられるにはあらず正法を惜む心の強盛なるべしおられる者は必ず強敵に値ておそれる心出来するなり」(九五七ジベ)

★「悪王」すなわち悪しき「社会的権力」が、正法を破壊しようとする時、「邪法の僧」すな

わち、よこしまな「宗教的権威」が味方し、連合軍をつくって、智者をなきものにしてしまうとする。

★権力と権威が連合軍を成して行う「迫害の構図」は、永遠に不変である。その時に、正法を惜しみ、広宣流布を第一義とするゆえに、敢然と「師子王」のような心で戦えるかいなか。戦い抜けば必ず成仏できる。しかし「法」を大切に思わない傲慢な人は、臆病な「恐れる心」が出てきて、逃げてしまおうと御指摘になっている。

「破法の法主」に従うな

「時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事」(一六一八ジベ)

★時の貫首(法主)であっても、仏法に背いて、勝手な自説を立てた場合には、これを用いてはならない——と厳しく戒めておられる。

★日興上人は、「破法の法主」が出現することを危惧され、その場合には絶対に従ってはならないと命じられたのである。法主が絶対であり、誤りがなければ、そもそも、このような条目は必要ないはずである。

★ゆえに「法主信仰」「法主絶対」など明らかに後世の邪義なのである。





回答者 ● 坂井 泰博 埼玉総県男子部教学部長

質 問 箱

❖「一生成仏」と「即身成仏」の違い

編集部では読者の皆さまからの質問をお待ちしております。

【問い】「一生成仏」と「即身成仏」の違い、またその関係について、教えてください。

(岐阜・稲本孝志)

● 修行の長さからみた一生成仏

本質的には同じことですが、あえて「一生成仏」と「即身成仏」の違いをいえば、「一生成仏」が、要するに修行の長さから言われたものであるのに対して、「即身成仏」は成仏の仕方、その姿について言われたものといつてよいでしょう。

爾前経では、成仏のためには「歴劫修行」が必要だと説きます。すなわち、菩薩や声聞が何回も生死を繰り返し、何劫(劫は一説には約千六百万年)もの長い間、さまざまな修行をして、ようやく仏の悟りを得ると説かれています。

「劫」を「歴」て修行しなければなら

らないので、これを「歴劫修行」といいます。

それに対して、法華経では「一生成仏」と説きます。すなわち、法華経の偉大な功力によって、この一生の修行学の実践によって成仏すると説かれます。

これについて、日蓮大聖人は「法華経の行者は如説修行せば必ず一生の中に一人も残らず成仏す可し」(四一六節)と仰せられています。「如説修行」とは、大聖人の教えどおりに、御本尊を信受して自行化他の実践に励むことです。

● 成仏の姿からみた即身成仏

次に「即身成仏」とは、現在の「凡

夫」の身そのまま成仏するということとです。

爾前経で説かれる成仏の在り方は「改転の成仏」と言われます。つまり、現在の我が身を改め転じて成仏するということです。そこでは、凡夫は菩薩となり、その菩薩にも五十二もの位があつて「歴劫修行」をしながら、それを一つ一つ登っていくのです。

当然、そのたびに姿、形も変わっていきます。つまり「凡夫」のままでは成仏はありえないわけです。それに対して、法華経は、「一生成仏」ですから、この一生で成仏するということは「凡夫の身を改めないで成仏する」ということです。

これが「即身成仏」ということとです。

● 凡夫のまま成仏できる御本尊の功力

ゆえに「一生成仏」も「即身成仏」も、私たちが凡夫の身そのままに、一生の間に成仏できるといふ、御本尊の偉大な功力を表しているといえます。

(さかい やすひろ)



かけがえのない 人生を 人々のために

私は、軽度の知的障害者のための生活寮を営んでいます。寮母として、二十九歳から五十八歳までの「子どもたち」八人の食事や身の回りのお世話、資産管理などを行っています。

最初のころ、私は子どもたちは素直な子ばかりと思っていました。しかし、仕事に行くといつて寮を出たきり何日も帰らなかつたり、些細な嘘をついたりするなど、数々の問題が起り、私は裏切られたような思い

で、悩んだこともありましたが、そんなときは、彼らをどこまでも信じてぶつかっていくしかないと心から話し合いました。「みんなのお手本になってほしい」と彼らを信じ、責任を自覚してもらうことが、彼らの自立と自信につながり、行動も変わっていったのです。

子どもたちは一人一人、違った悩みや問題を抱えており、毎日が戦いです。一瞬一瞬、寮生たちを見つめる度に、一人一人が大切な命をもち、懸命に生きています。寮生たちの心は、刻々と変わり成長している」と思います。ありのままの彼らを愛し、今日より明日へ、成長させてあげたい、と思っています。

今、私がたくさんの人を大切に思えるようになったのは、長女のおかげともいえます。娘は、ダウン症という先天的な障害を抱えて生まれ、医師から短命と宣告されたときは、生きる意味も希望も見失いました。し

かし、生きようとする力を失わない娘の姿に、生命がどんなに尊いのかを目の当たりにしました。また、信仰によって、環境を作っているのも、乗り越えるのも自分であること、自分の命を他人のために使っていくすばらしさを教えられました。

学会と池田先生への感謝を胸に、日本一仲良く楽しい寮を目指して、かわいい子どもたち、家族、地域の方のために働いていこうと思っています。



◆あゆみ生活寮 寮母
東京都知的障害者相談員

奥山 弘子
おくやま ひろこ

『立正安国論』

研鑽のために ①

(一七六一行目から十四行目まで)

〈時代背景〉

立正安国論は、日蓮大聖人が文応元年(一二六〇年)七月十六日、三十九歳の時に鎌倉で著され、時の最高権力者である北条時頼に提出された国主諫暁の書である。時頼は、鎌倉幕府の執権職を後任の長時に譲っていたが、「得宗」すなわち北条氏の本家の家長として、引き続き実権を掌握していた。

大聖人がこの安国論の執筆を決意された背景としては、当時の度重なる天変地災があった。数年前から各地で流行病が発生し、また干ばつや暴風雨が繰り返していた。当時は農業技術も未熟で、流通機構も不十分

なため、異常気象に見舞われた地域は直ちに深刻な飢饉となった。

また、地震もしばしば発生し、とくに大きな被害をもたらしたのは、鎌倉など関東地方で正嘉元年(一二五七年)八月に起きた大地震であった。この地震のため、鎌倉では幕府の建物や寺院など、ほとんどの建物が壊滅した。

このような状況の中で、飢えや病気のために多くの人命が失われた。亡くなった人々の遺体を収容する余裕もなく、京都や鎌倉などの都市部においても、人々の遺体は動物の死体とともに路傍や河原などに放置されていたと言われる。

正嘉の大地震が立正安国論御執筆の契機

になったことについて大聖人は、文永六年に記された「立正安国論奥書」で「去ぬる正嘉元年「太歳丁巳」八月二十三日戌亥の刻の大地震を見て之を勸う、其の後文応元年「太歳庚申」七月十六日を以て宿屋禪門に付して故最明寺入道殿に奉れり」(三三三)と述べられている。

日蓮大聖人は、この惨状に深く心を痛められ、人々を苦しみから救うためにはその原因を明らかにし、それを取り除く戦いを起こさなければならぬと決意された。そこで災難の根本原因が国中の謗法にあるとの結論はすでに得られていたが、それを裏付ける資料を求めて大聖人は、正嘉二年、駿河国(現在の静岡県)の岩本実相寺で一切経を閲読され、これを「立正安国論」として著し、直接、最高権力者に示されたのである。

〈本抄の意義〉

立正安国論は、古来、「大聖人の御化導は、立正安国論に始まり立正安国論に終わる」といわれるほど、御書のなかでもとりわけ重要な意義を持ち、そこに示された法理は大聖人の仏法の全体を貫く骨格を成している。それ故に日興上人は安国論を十大部の第一に挙げられている。

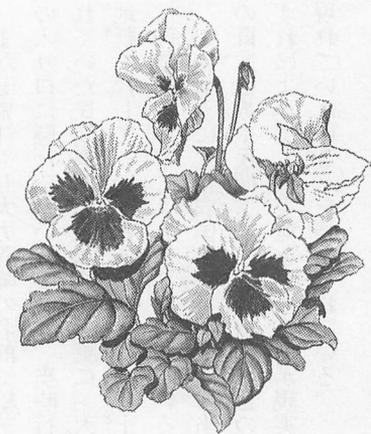
日寛上人が「文は唯日本及び現世に在り、意は閻浮及び未来に通ずべし」（文段集八頁）と記されているように、安国論は当時の日本の状況について述べられているように見えるが、その元意は、全世界及び未来永遠にわたる平和社会実現への根本原理を示されるところにあるのである。

そのうえで立正安国論の意義を考えるならば、第一には同時代の人々に対し、御自身の見解を公表された書であるということが挙げられる。もちろん提出された相手は北条時頼であるが、その内容は幕府要人も閲覧されることを考えられたものであることはいうまでもない。

第二には、大聖人がこの立正安国論を極めて重要視されていることが挙げられる。

大聖人は他の御書で何回も立正安国論に言及されているだけでなく、大聖人御自身が何回も書写されて、いくつもの御正筆が残されているが、このような例は立正安国論の他にはない。それは幾度か国主を直接諫暁される機会があったこと、激動の時代状況を考えられて、後世に残すための御配慮と拝せられる。

第三には、立正安国論の提出が大聖人に対する迫害が始まる契機になったということである。



大聖人は立宗宣言の後、鎌倉で弘教を開始されたが、立正安国論の提出までは特別の迫害はなかった。何の後ろ盾もない僧侶が、一国の最高権力者を諫暁するということは、ほとんど未曾有のことであり、厳しい迫害を覚悟しなければならぬことであった。実際に立正安国論提出の四十日後、松葉ヶ谷の法難が起きている。それ以後の、伊豆流罪、小松原の法難、竜の口の法難・佐渡流罪も「立正安国論」をもとにしての重ねての諫暁によるものである。

また大聖人は弘安五年九月、湯治のため身延の山を出られて常陸国に向かわれる途中、十月十三日に武蔵国（現在の東京都）

の池上兄弟の館で御入滅されたが、大聖人の病が重いことを知って池上の地に集まつてきた門下に対し、九月二十五日から病身を押し、最後の御説法をされた。その御説法は立正安国論の講義である。まさに「大聖人の御教導は、立正安国論に始まり立正安国論に終わる」と言われるゆえんである。

第四には、この立正安国論が予言の書であるということである。

大聖人は安国論において、日本国の人々が悪法への帰依を続けるならば、自界叛逆、他国侵逼難は必然であることを経文に照らして予言し、為政者を諫められた。この予言は後に的中することになったが、この事実をもって大聖人は自らが「三世を知る聖人」であることの裏付けとされるのである。

第五には国主諫暁の書であるということが挙げられる。

それまでの日本仏教は、権力に迎合してその保護の下に存続していくか、あるいは現実に背を向けて自分の心の世界にこもっていくかのどちらかであったといわれる。しかし、大聖人はそのどちらの在り方をも排し、正法を根本に、この現実社会に平和をもたらす道を示されたのである。

これまで権力に從属し、国家に奉仕するものと位置づけられてきた仏法は、立正安国論において、むしろ国家の盛衰を決定する根本として捉えられている。これは仏法の意義の根本的転換である。

このように立正安国論は、大聖人の御化導の骨格を成すだけでなく、日本仏教の歴史にとっても実に画期的な意義を持つのである。

なお立正安国論は、客の質問に主人が回答する問答の形式で述べられている。主人は日蓮大聖人、客は北条時頼、広くは日本の衆生になぞらえられていることはいうまでもない。そして主人と客の問答が九つ続き、最後は客が決意の言葉を述べて終わるといふ形（十問九答）になっている。

旅客来りて嘆いて曰く近年より近日に至るまで……是れ何なる誤に由るや

（一七七一行目～九行目）

まず冒頭では、客の言葉として、当時の悲惨な状況が述べられている。この表現は決して誇張ではなく、現実をそのまま捉えたものである。この惨状を前にして、もちろん、幕府も何もしなかったわけではない。当時の仏教各派の寺院に祈禱を命じて災難が止むことを祈らせ、各地の街頭に貧

民の救済に当たらせるなどの対策をとったが、しかし、それらは何の効果もなく災難はますます頻発した。

ここではまず各宗派の祈禱が示されている。「利劍即是の文を專にして西土教主の名を唱え」というのは念仏の祈禱である。次の「衆病悉除の願を持ちて東方如来の経を誦し」とは薬師経、「病即消滅不老不死の詞を仰いで」とは法華経、また「七難即滅七福即生の句を信じて百座百講の儀を調え」とは仁王経による祈禱で、これらは天台宗が行っていたものである。次の「秘密真言の教に因て」というのは真言宗の祈禱、「坐禅入定の儀」というのは禅宗の祈禱である。

また七鬼神や五大力量菩薩の名前や絵を家の入り口に懸けるといふことは、当時行われていた民間信仰を意味する。更に「天神地祇を拜して」云々とあるのは日本の土着信仰である神道による祈りを指している。

このように立正安国論の冒頭では、当時の既成仏教や民間信仰、土着信仰などのいづれによっても、災難を止める力が現実に見れていないことを強調されている。

主人の曰く独り此の事を愁いて……恐れずんばあるべからず

「国」と「國」と「園」

日蓮大聖人は、「立正安国論」で「くに」を表現される際に、「国がまえ(口)」に「玉(王の意)」と書く「国」や、「或(戈)を手にして国境と土地を守る意」と書く「國」という字よりも、主に「民」と書く「園」の字を用いられた。現存する御真筆では、「くに」を表す全七十一文字のうち、約八割に当たる五十六文字に、「園」が使われている。大聖人の「民衆」を根本とされる考え方が、象徴的に表れているといえよう。

（一七七一行目～十四行目）

主人の最初の答えは災難の根本原因を端的に明かしたものであり、いわば本抄の結論が冒頭に提示された形になっている。

「独り此の事を愁いて胸臆に憤悱す」の御文に大聖人御自身の心情を示されている。すなわち、当時の惨状を直視し、民衆の苦しみを我が苦しみとされる大聖人の姿勢がここに押せられる。「客来つて共に嘆く屢談話を致さん」とは、悩みを共にしている人間同士の立場で対話をしているという趣旨である。ここに示されているよ

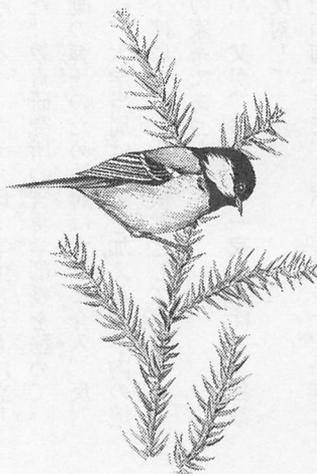
うに立正安国論を貫いているのは平等の対話の精神である。

当時の惨状に対して、仏教に限らずあらゆる宗教の高僧や高位の神官達が祈祷を行ったが、何の効果も表れなかった。そこで「後生の疑を発す」とあるように、一般人々はどんな宗教も信じられないという絶望的な心境になっていた。

「世皆正に背き人悉く悪に帰す」から「災起り難起る」までは災難の根本原因を示されたもので、そこには、①人々が正法に背き悪法に帰依している、②諸天善神と聖人が国を去っている、③魔と鬼が来ている、の三意が明かされている。災難が起こるのは①、②、③という順序によるということである。

つまり、災難の根本は人々が正法に背き悪法に帰依しているところにある。ここで大聖人は人々の持っている法によって国土ないし社会の在り方が決まるという原理を示されている。

諸天善神とは、国土や衆生の生命を護る働きをいう。宇宙の森羅万象を支えているのは、根源の法である南無妙法蓮華経であるから、諸天善神の働きも結局は南無妙法蓮華経による。故に人々が妙法に敵対して悪法に帰依している場合には諸天の働きも



画・三浦哲

失われてしまう。一国謗法の場合にはその国から諸天が去るといふ、いわゆる「神天上の法門」はこのことを指している。

また聖人とは、この場合、優れた社会的指導者を意味する。思想が乱れ歪んでいる時には、社会の枢要な位置は邪悪な人々によって占められ、平和と繁栄に導く優れた指導者は姿を隠してしまうのである。

次に魔あるいは鬼とは「聖人」の反対が「魔」、「善神」の反対が「鬼」と考えられる。仏法を護らず価値観が乱れてくると人間社会も自然界も邪悪な働きが力を増し、種々の災難が起こるのであるとされているのである。

立正安国論御執筆以前の主な災害

- ▽建長五年(二五三年)鎌倉で二月、大風雨。同月と六月、大地震。十二月、大火のため焼死者多数。
- ▽建長六年(二五四年)二月、鎌倉で大火、焼死者多数。五月、京都で大地震。七月、鎌倉で大風雨、民家倒壊。
- ▽建長七年(二五五年)十二月、京都で地震。
- ▽建長八年(二五六年)八月、鎌倉で大風洪水。米穀流失し、山崩れ、死者多数。九月、赤斑瘡流行する。
- ▽正嘉元年(二五七年)五月、京都で大雨洪水。六月、猛暑続く。北条幕府、祈雨の修法を命ず。八月、鎌倉で大地震、被害甚大。
- ▽正嘉二年(二五八年)八月、京都で大風雨。穀類に大被害。安嘉門も倒壊。八月、鎌倉で大風。十月、鎌倉で大雨洪水、民家流失し水死者多数。
- ▽正元元年(二五九年)この春、疫病流行する。この年、諸国に大飢饉、疫病が流行する。
- ▽文応元年(二六〇年)四月、鎌倉で大火。六月、鎌倉で大風洪水。春夏秋冬にわたり疫病流行し、病死者多数。

ネパール国立トリブバン大学元副総長

ネパール王国 マテマ駐日大使



「幸せには勇気が必要です」

信念に殉じる勇気が!

「あのヒマラヤのそばに、ひとつの正直な民族がいます。富と勇気を備えています」
(原始の仏典から)

「ネパールに戻ってきてほしい、とのことなんだ。どう思う？」
マテマさんは家族に打ち明けた。

当時、アメリカで世界銀行のネパール支局担当官をしていた。

「トリブバン大学の副総長として迎えたい」という話であったが、帰国すれば環境は激変する。収入も半減するだろう。養っている家族は多かった。

トリブバン大学は、かつて自分を追放した大学でもあった。七〇年代、民主化を求める学生運動が起こるや、マテマ氏は学生とともに立ち上がった。教育研究所の言語学部長を務めていた。運動の弾圧のため政府は大学に介入。反対した氏に、大学当局は圧迫を加えた。学内の地位は格下げになり、氏は憤然として辞職した。硬骨の家系であった。

祖父が、父が、おじが、一家を挙げて、独裁政権に反対してきた。

今世紀の前半まで、ネパールはラナ家一族に実質的に支配されていた。国王の権限は皆無に等しかった。国民の基本的な人権も認められていなかった。氏が語ってくれた。

「おじは、今のビレンドラ国王の祖父にあたる方(トリブバン国王)の運動担当の教師をしていました。王宮の中でも、政府の中でも、高い地位にいたのです。私の一家もそうでした。しかし、おじは、権勢をふるうラナ家の横暴が『目に余る』と許せなかったのです。国を牛耳っていた彼らは、人々に教育を与えることも拒んでいました。自分たちにとって脅威になるからです」

独裁権力は、人々に「真実」を伝えたがらない。「嘘と無知」の暗闇に閉じ込めておこうとするものだ。

「地位はいらぬ！ 私は戦つ」

「おじは、彼らを許せませんでした。国王に協力しながら、専制権力を打倒するための政党結成に努力しました」

おじは、自分の地位や立場を守ろうなどとは考えませんでした。そんなことは無視していました。ただ『貧しい人のために行動しなければ』、それだけでした。

その結果……おじは、絞首刑になりました。もう一人の親族も一緒でした。同志の二人は銃殺されました」

これこそ真の人間の歴史であろう。

「私は戦う！」という崇高な炎が消えたなら、人間はもはや動物と異ならない。死を覚悟で――



「ビレンドラ国王陛下より、あずかってまいりました」。御即位25周年記念のコインを贈るマテマ大使(97年7月、聖教新聞本社)。「これは名誉会長の言行一致の偉大なる御人格に対して贈られたものです」と

今、その決心で民衆のために行動している指導者が、どれだけ日本にいるであろうか。

氏は言っておられた。

「おじはなくなりりましたが、おじの精神は今も、私の人生の基盤になっています」

氏の一族は、インドでの亡命生活も長かった。一九二〇年代から五〇年代にかけて約三十年間。氏も、四五年、亡命先で生まれた。

一家は財産を没収されていた。

お父さんは、チベットの地方政府で働き、専

制政治打倒の資金づくりをした。

お母さんは、苦しい生計のなか、編み物などをして、子どもたちを立派に育て上げた。亡命してくる人たちの面倒も、いつも見ていた。

母の口ぐせは「自分の幸せを考える前に、人の幸せを考えなさい」「他人の犠牲の上に、自分の幸せを築いてはいけない」であった。

九〇年、ネパールの民主化が実現した。アメリカにいた氏に、「副総長に」との要請がもたらされた。民主化を支持されていたビレンドラ国王の御意思であったという。国王が大学の総長であられる。

マテマ氏の話に、お母さんとコヒヌー夫人は答えた。

「帰りましょう！ 国のため、人々のためになる仕事なのだから、やりましょう！ あなたが喜んでやるなら、家庭のことは大丈夫です。安心して、まかせてください」

◎**「釈尊生誕の国の「大いなる心」**

ネパール王国は釈尊生誕の国である。仏教徒にとって「心のふるさと」とも言うべきこの国を、私が初訪問したのは九五年の秋であった。

トリバン大学も公式招聘しただきった機関の一つ。光栄にも「名誉文学博士」の学位を頂戴した。マテマ氏は副総長の座を譲っておられたが、陰に陽に訪問の成功を見守ってくだ

さった。その大誠実のお姿が忘れられない。

首都カトマンズ。晴れた日には、白雲を遙かに突き抜け、天に届かんばかりの高みに、ヒマラヤの銀嶺が並んでいた。

ヒマラヤの山塊は、何と今も、上へ上へと隆起を続けているという。もっと高く！ 更に高く！ 天を目指して成長を止めない大雪山。

まさに釈尊を自然に移せばヒマラヤとなる。ヒマラヤを人に移せば釈尊となる。

釈尊は、この「地球で最も高い国」を選んで生まれた。そして人類の境涯を最高峰の高みへ引き上げようとした。

そのために釈尊は栄華の王宮を捨てた。「地位はいらない、本物の人間になるのだ！」と。その心を受け継ぐ人々が今も、ヒマラヤの麓にいた。マテマ大使のご一家のごとく。

氏のお母さんが、インド亡命中に面倒を見ていた政治亡命者の一人に、詩人のデウコタ氏がいた。詩人は書いた。

「人間は、心の大きさによって評価されるべきなのだ。名声や階級によってではなく、ゆえに私は、ネパール王国の人々に敬意の合掌を捧げる。

大使の信条は「幸せには勇気が必要」である。信念に殉じた一族の先達は、悲劇のように見えて、その心は晴れ晴れと天空の高みに飛翔していたことを信じておられるに違いない。



●大阪／関西長

西口 良三

にしぐち りょうぞう

何度も何度も場内に響き渡り、こだまする若人の歓声、雄叫びは、いつまでも鳴りやまなかった。私は、それを聞きながら興奮さめやらない大阪ドームをあとにした――。

昨年の十一月十八日、学会創立のその日を祝して、輝かしくも二十一世紀の黎明を告げた第十七回「世界青年平和文化祭」が、池田先生をお迎えし、百万の青年の代表の汗と涙の敢闘によって大成功裏に開催された。

その感動の記録は、「映画」でご覧いただけると思うが、男子部の体操のなかで、初の試みの十段ピラミッドの演技があった。総勢二百三十人で構成されているが、一人でも我慢できなかったり、誰かが咳をしても崩れてしまう。

一番下の土台は、百余人で約七つの体重を支える。この崩れないピラミッドの完成まで、数多くの障害があったが、不可能を可能にする智慧と、「絶対に崩すな！ 負けるな！」の一念が、一人一人の祈りとなって、見事に十段ピラミッドが出来上がった。

「皆のために自分が支えになっている」との誇りと使命感。また、どんな困難があっても、智慧を発揮して、乗り越えてしまう庶民の逞しさ――これこそ関西魂であり、この関西魂が燃える限り、常勝は永遠である。

常勝

そして、「先生に呼吸を合わせた戦いは、想像を超えた力が出る」との一点を生命に刻み、本年も関西は、連続勝利へ怒濤の前進を開始している。

常勝の原点は、昭和三十一年、大阪支部一部で弘教・一万一千百一十世帯という金字塔の達成にある。

先生は「私と関西の絆は、大きく立派になった関西との絆ではない。私は、関西のあの地、この地の懐かしい方々との交流で結ばれている。このお一人お一人との絆の結果として、常勝関西の絆がある」と。関西の地で、先生とともに戦える、これ以上の幸せはないというのが、関西同志の一致した思いである。

「関西は
常勝の責務と
使命があることを
私は訴えたい！」

――長編詩「常勝の空高く」の一節である。
本年は、関西の歌「常勝の空」発表から二十周年の佳節を迎えた。とともに「関西広布五十年運動」の第一年でもある。本年の勝利こそ二十一世紀の勝利」と決め、「常勝の城」を、そして、新たな民衆勝利の金字塔を打ち立てていきたい。



ウメ



●イタリア／全国副婦人部長

ファウスター・チャンティ



私は現在、音楽大学でピアノ教師をしています。十三歳の時にコンサート・デビューを果たすほど、若いときはピアノの才能に恵まれました。すべてが順調にいくような錯覚を覚えるほどでした。しかし、その後、少しずつ技術面の進歩が思い通りにいかなくなり、精神面の充実も物足りなくなっていました。

私をいらだたせたのは、家族が信仰していたカトリックの教えでした。自分がどんなに努力しようが、神によって定められた道があり、自己の運命は甘んじて受けなければならぬというものでした。悶々とした月日が過ぎました。

そして、今から十四年前にこの仏法に出あったのです。あるとき、知人が重病の手術で悩んでいることを同僚に話したところ、偶然、その話を横で聞いていた同僚の息子さんがSGIのメンバーだったので。

彼が語る仏法の話は、私がそれまで求めていた思想以上の内容のものでした。自分の一瞬の心、すなわち「一念」の变革によって、自分の周りの環境、社会を变革していくことができ、自分が望むように人生を悠々と生きていくことができる。いま一つ自分の生き方に自信がもてなかった私は、その青年の話に飛びつき入会することになりました。多くの信仰体験や功德



ラン

一家和楽

を積むことができました。どんな障害や苦境があっても、堂々と乗り越えることができました。七年前に、母がガンの宣告を受け、二カ月の命と診断されたときも、必ず母を長生きさせてみせると唱題を重ねました。その結果、手術は大成功し、九十二歳の母は今でも元気に暮らしています。

私が最も喜びとする体験は一家和楽です。夫は未入会ですが、今では、何でも話せる仲の良い夫婦になりました。ある日、SGIの運動にあまり関心を示さない夫が、一生の思い出に残るように、結婚記念日を祝う式を挙げようと言いだしたのです。それも、SGIの会館で挙げようと言うのです。私は驚きました。自宅での会合にさえ顔を出さない夫が会館に出向くことを言い出すとは、信じられなかったのです。きっと長年の間、私の信仰する姿を見守ってきた結果から、この信仰に信頼を寄せてくれたのだと思います。当日、会館には、多くのSGIの同志、親戚がお祝いに駆けつけ、本当の結婚式より素晴らしいと称えてくださいました。

現在、婦人部の周囲の話でも、家族の断絶、家庭の行き詰まりは、一番、深刻な問題です。今後、仏法対話を重ね、一家和楽の輪を世界に広げていく決意です。





●北海道 / 〈県〉 男子部長

中野 也寸志

なかの やすし

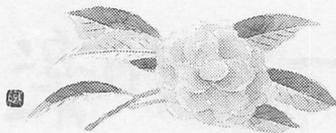


第一次宗門問題の時——昭和五十四年、網走に住んでいた我が家に、突然、地元・得成寺の坊主が訪ねて来た。池田先生の悪口を言いに来たのである。父が怒った。「頭がおかしいのはお前だ！」。きっぱり言い切った坊主を追い返した。役職もなく、学会の活動もそれほど積極的ではなかった父がだ。件の坊主は一昨年に病死。父は決着をつけたのだと思った。

その後、若い坊主が二代目住職として赴任。五十四年当時のように学会員宅を訪問してきた。父や先輩の悔しさを実感した。悪はあぶり出し、叩き出さなくてはならない。のらりくらりと逃げる住職との電話のやり取りは長時間に及んだ。有志との祈りは深夜におよび、とうとう市のコミュニティーセンターの一室での討論にこぎ着けた。横柄を絵に描いたような住職。御謹刻問題を誹法と言ったことに對し、方面教習部長が集中して問い糾した。「誹法と言ったことは取り下げる」——決定的な言質だった。

御謹刻の問題で学会を批判し、法華講を騙し続けた張本人が自分の大嘘を認めたのだ。法華講の信頼をなくしつつある坊主の姿に、勝つてこそ愉快になることを実感した。

盆地で寒さの厳しい北見。トラックの運転手だった昭和五十九年、凍てつく冬の夜に勤め先



ツバキ

愉快王

の寮に通い続けてくれた班長さんがいた。感謝の思いは実践で表した。その二月に友人に弘教。夏には二人が入会。公務員試験を目指すなかで、更に一人に弘教を实らせた。

平成六年、別海に池田先生を迎えた。有志で馬車を作り、お届けした。二年がかりとはいえず素人の手作り。その馬車に「黎明号」と名前を頂き、申し訳ないと思うほどの激励を頂いた。

私たちが思う以上に先生は一人一人のことを思われていることを実感した。ゆっくり休んで頂きたいとの思いが浅はかに思えて仕方なかった。かつて父が「なぜ先生が正しいということ、大声で言えないのか」と、幹部に詰り寄ったことがあった。言う父も、言われる幹部も辛かったに違いない。池田先生と学会員の間を裂こうとした山崎正友と、その尻馬に乗る坊主どもを絶対に許すことはできない。

積尊教団は提婆達多など悪逆の人間を、師である積尊の在世中に叩き出した。オホーツクの全メンバーがこの心で戦っている。極悪とは一人になっても戦う。絶対に決着をつける。それが北海健児であり、その心意気が昨年の弘教日本一の原動力だった。勝って勝って勝ち抜いてオホーツクへ県男子部の一人一人が愉快の王者となっていきたい。





●香川/地区担当員

常深 勝世

つねみ かつよ

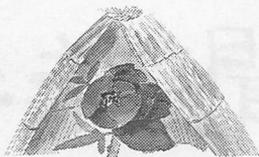
一昨年の十一月、十八年間、勤めていた大手ネクタイメーカーが倒産。店長の私は失業の身となりました。社会的に不況であることを知ってはいましたが、まさか私の身に降りかかってくるとは思ってもみませんでした。

倒産劇はショックでしたが、自分を成長させるチャンスだととらえました。婦人部にあつては地区担当員でしたが、これまで夜の活動しかできなかった分、失業中は昼間の活動も存分にさせていたどころと決意し、全力で戦いました。また、何としても再就職先を決めようと誓い、一日一万遍の唱題に挑戦しました。

一日一日が真剣勝負。これまでの仕事上の知人から、色々と声をかけていただきましたが、条件面が厳しく、いくら元店長といっても、五十歳を超えた人間においてそれと条件面で折り合う会社などあろうはずがありません。「これから先の生活はどうなるのだろうか」と弱気の虫が頭をもたげる度に、「負けてなるものか」と自身を奮い立たせました。

あるデパートの人員募集に履歴書を書き、仕事にうれしい先輩に指導を受けました。その折、「履歴書だけを送るのですか」と尋ねられました。「そうです」と答えた私の一言に、厳しい言葉が返ってきました。「履歴書一枚で、

不況と戦う



カンボタン

それも五十歳を超えている人を好き好んで採用してくれるわけがない。あなたは甘い。もっと自分を売り込まなければ！」と。先輩は自ら筆を執り、三十年来の販売キャリアがあること、多くのハイクラスの顧客カードを持っていること、などをメモに書いてくださり、「これを清書して同封しなさい。あとは生命力を満々とたたえ前へ前へ！」と励ましていただきました。

弱気の自身の殻を破ることができ、「自信をもつていこう」と腹が決まりました。ある日、元いた職場の先輩から紹介された大手服飾メーカーの人事課長さんが、私が以前いた店での実績をこ存じて、「あの人を取らなければ損をする」と言って、採用を決定してくれたそうです。

再就職後も戦いの連続です。顧客の対象は女性から男性へ。しかし、女性の背後には、夫や子供、男性の友人がいると発想を転換。数百枚の葉書を自費で購入し、かつて顧客だった彼女たちに転職した旨と、今後のお付き合いを心からお願ひしました。努力のかいあって、昨上期の中国・四国地方の百貨店の担当分野でトップの売り上げを記録することができました。本当に多くの方々に応援していただいた結果だと喜んでおります。今後も、地域で、職場で、なくてはならない人を目指して頑張ります。





●埼玉／副ブロック担当員

沢田 幸子

さわだ ゆきこ

私は重い中耳炎が原因で、一歳のころから進行性の難聴でした。兄と私を、母は女手一つで育てていたため経済的に苦しく、思うように治療を受けさせられなかったそうです。仕事で疲れた体で折伏や唱題に励む母の姿を見ながら育った私は、ただ「苦勞し続けた母を幸せにしたい」一心で、信心に励みました。

高校を卒業すると、学会員のお役に立てればとの思いから、大石寺の従業員として、二年間住み込みで働いたのです。ところが、満足に勤行もしない墮落した僧侶の実態への驚きや長時間の労働のため、すっかり体調を壊し、聴力も失ってしまいました。

こうした辛い思いの毎日を送りましたが、たまたま出会った主人（沢田茂、地区幹事）と、縁あって結婚。二人の子どもにも恵まれました。

「何としても、広布に頑張りたい」との思いから、自動車の運転免許も取得し活動にも励みました。でも、高度難聴のため補聴器も役に立たず、地域の方との対話も十分にできず、寂しい思いを味わいました。時には、あまりの辛さに、涙とともに補聴器を壁に投げつけたこともありました。そんな時、主人の力強い唱題や地域の婦人部の皆さんの真心の励ましを得て、ひ

聞こえた!



シクラメン

画・菊川三織子 題字・稲田茂

たすら祈り抜くことができたのです。

そんななか、聖教新聞に人工内耳の記事が掲載され、主人が手術を受けるために奔走し、一昨年の十一月に実現しました。

その日は、地域の同志や妙音会の仲間、家族が唱題で応援をしてくれ、手術は大成功でした。その後、強度の目まいなどの後遺症も乗り切り、再び我が耳に音が蘇ったのです。

退院の日。四十日ぶりに我が家へ戻った私の耳に、勢いよく飛び込んだのは「おかあさんーん!」という子どもたちの元気な声でした。「分かるよ、分かるよ!」と子どもたちを抱きしめながら、「妙とは蘇生の義」(九四七頁)の御金言を感謝と歓喜でかみしめました。

人の声はもちろん、鳥や虫の鳴き声、コップの触れ合う音や自動車の排気音など、何でも新鮮に聞こえます。「これは何の音?」と、子どもと対話する瞬間にも、しみじみと生きる喜び、信心でできた喜びを感じます。そして、何よりもうれしいのは、池田先生のスピーチを我が耳で聞くことができることです。

今では、母も再婚し悠々自適の生活を送り、創価大学に学んだ兄は養護学校の教師をしています。報恩の思いを込めて、学会の信心の正しさを生涯訴えていく決意です。



2
月度

解説
の

拝読御書

生死一大事血脈抄

御書全集1336巻◆編年体御書401巻
文永9年(1272年)2月◆51歳◆佐渡・塚原

兵衛志殿御返事

御書全集1090巻◆編年体御書810巻

生死一大事血脈抄

人・時代・書體

本抄は、天台宗の学僧であった最蓮房が「生死一大事の血脈」について、日蓮大聖人に質問したことに對する返事のお手紙である。

ポイント

生死一大事の血脈とは法華經の會座で上行菩薩に譲られ、末法に流布される南無妙法蓮華經そのものである▼この生死一大事の血脈は、①久遠の釈尊と法華經と衆生とが全く差別がないと解って唱題に励むとき、②過去、現在、未來にわたって法華經を受持するとき、③異体同心で南無妙法蓮華經と唱え、広宣流布を目指すとき、その信心のなかに流れるのであり、こうした信心に立つなら広宣流布は必ず成し遂げられる▼大信力で唱題するところに生死一大事の血

背景と大意

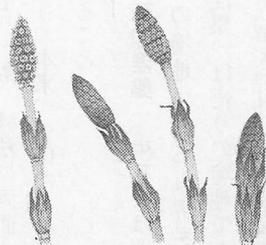
兵衛志殿御返事

人・時代・書體

池上兄弟は鎌倉幕府の作事奉行(建設関係の役人)を務めていた池上左衛門大夫康光の子。文永十二年(一二七五年)、極楽寺良觀を崇めていた父は信心を理由に兄の宗仲を勸当。翌建治二年に一旦は許したが、翌年、再び宗仲を勸当。この時に弟の宗長に送られたお手紙が本抄である。

ポイント

浄蔵・浄眼の兄弟が力を合わせて父を仏法に帰依させたように、兄弟の信心の団結が大切である▼三障四魔が競い起きた時こそ成仏への絶好の機会である▼親の心に背いても仏道修行を貫くことが真の孝養になる。



歴

〈拝読御書の参考資料〉『日蓮大聖人御書講義』第21・30(上)巻

生死一大事血脈抄

御書全集 一三三八頁八行目〜十行目
編年体御書 四〇二六十七行目〜四〇三六一行目

大第ごみふんおんえい

増え革命、
裸になつた時

ゆいりてん

相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經・臨終正念と祈念

し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩惱即菩提

受持即觀心

行字みえりず仏にほありへからず

提・生死即涅槃とは是なり、信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり

通解

よくよく心して強盛の大信力を出し、「南無妙法蓮華經、臨終正念」と祈念されるがよい。生死一大事の血脈といつてもこれよりほかには

全く求めてはならない。煩惱即菩提、生死即涅槃とはこのことである。信心の血脈がなければ法華經を持つとも無益である。

臨終正念 正法を信じて疑わず、死に臨んでも心が乱れないこと。

生死一大事の血脈 「生死」とは生死を繰り返す生命のこと。「一大事」とはその生死の根源にあつて変わる事のない大生命自体であり、仏のみが悟っている妙法のこと。「血脈」とはその妙法が仏から衆生に伝えられること。すなわち、仏の悟りの妙法が衆生に伝えられることを「生死一大事の血脈」という。

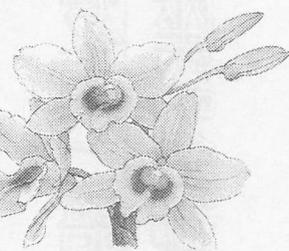
煩惱即菩提 煩惱も菩提（悟り）も、妙法の両面であり、本来、一体のものであること。

生死即涅槃 「生死」は迷いの境地である九界を、「涅槃」は悟りの境地である仏界を指す。妙法を受持する凡夫がその身そのまま、成仏の境涯を得ること。

座談会御書 ●ポイント講義

ここでは生死一大事血脈についての結論を示されています。「相構え相構えて」と重ねて言われているところに、ここに示されている一節が重要な結論であることが窺えます。すなわち、生死一大事血脈とは「強盛の大信力」を奮い起こして南無妙法蓮華經と唱えていくこと以外にはないと仰せられています。

「臨終正念」とは、死に臨んで動揺しないことですが、とくに妙法への信心が揺るがないことをいいます。「生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ」と仰せのように、成仏できるかどうかは、この「臨終正念」であるかどうかによるのです。



しかし、「相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經・臨終正念と祈念し給へ」と仰せられているように、臨終の時に一生の総決算があらわれるのであって、「その時に正念でいればよい」というものではないのです。臨終に正念であるためには、この一生の一日一日の積み重ねが大切なのです。

大聖人は「信心の血脈なくんば法華經

を持つとも無益なり」と断じられています。この「信心の血脈」の根源は、本抄にお示しのように「上行菩薩」すなわち末法御出現の日蓮大聖人です。そして「法華經」とは末法においては「御本尊」であることはいうまでもありません。

したがって、この仰せは、たとえ御本尊を受持していても、大聖人の教えられたとおりの信心でなく、あるいはその行学が狂っていたのでは何の功德も現れることはないとの仰せです。

本抄において「日本国の一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとするに」(二三三七頁)と仰せられているように、大聖人は、一切衆生に「仏に成る血脈」を継がせるために御本尊を顕され、信行学の実践を教えてくださいましたのです。

創価学会は、あくまでこの日蓮大聖人の教えをあらゆる人々に伝え、また、あらゆる人々を大聖人の仏法の信仰へ導く「仏の使い」の団体です。

「仏に成る血脈を継がしめん」とされた大聖人のお心を心として、お手伝いをさせていただくのだという精神が、私たちの永遠の魂なのです。

友人と語る 座談会御書

青年と
大教壇運動

座談会の御書講義をめぐる
青年部員とその友人との語らいを
まとめてみました。

まず、「臨終正念」とは、どういう意味
かがよく分からない。

死に臨んで動揺しないことであり、信心
が揺るがないことをいうんだ。

死に臨んだ時、人は一切の虚飾が剝がさ
れる。学歴があっても、地位があっても、
財産があっても、死と向きあった時には何
一つ役に立つものはない。いわゆる裸一
貫の自分しかない。それ以外の自分を飾る
ものは何の意味もなくなってしまう。

ゆえに自分自身を高めていかなければな
らないと思うんだ。

仮に死は一切の終わりであり、無に帰す
という割り切った信念を最後まで貫ける人
がいたとしよう。その人は自分の父や母や
友人が死に直面している時も、そう割り切
って平然としていられるだろうか。恐ら

く、永遠の別離に直面して悲嘆に陥り、苦
しむと思う。結局、それは正しい生命観、
生死観が確立されていないからだと思う。

正しい「生死観」を持ってということか。

死を思ってこそ、今を大切に生きようと
するはずだし、一瞬一瞬を大切にしようと
決意できる。池田名誉会長は「『死』を意
識することが、人生を高めることになる」
と語ってくれている。逆に死の重みを忘れ
て生きるならば、その日暮らしの軽薄な生
き方にならざるをえない。

確かに現代は、死を忘れ、むしろ隠すよ
うな社会だね。それが無責任な欲望社会を
生み出す一因になっていることは理解でき
るよ。でも、そんな気持ちを持ち続けるの

は難しいね。

それは、僕も同じだ(笑い)。でも、僕
は師弟という生き方を知っている。

戸田第二代会長は、こう言われたことが
ある。「『臨終只今にあり』というが、この
臨終は、どなたの臨終かわかるかね。仏様
の臨終だよ。仏様がいらつしやらなくなっ
たとしたら、どんなに心細いだろう。どん
なにか悲しいことだろう。仏様に今、お別
れしなければならぬのだと思って、信心
することだよ。戸田先生は、この話を聞
いていた人たちに、師匠の臨終を只今と思
って、猛然と自身を高めていくべきことを
教えられたんだと思う。例えば、母親が明
日に死ぬと分かれば、君だって親孝行に必
死に励むだろう。まして親よりも尊敬し、
慕う人がいたならば、生きていけるうちに喜



んでもらおう、役に立とうと頑張るのが当然だろう。これが、「臨終正念」の生き方に通じるところ。

そう思える師匠を持った人生は、自己を輝かす悔いなき人生になるし、これほど有り難いことはないと思う。

何だか誰かに頼っているようで、君が日ごろ言っている自立した生き方というのは少し違うような気がするが。

それは違うよ。自立した人生とは、自分以外のものの助けや支配を受けずに生きていくことだろう。僕の言う師匠とは、助けを求める対象でも、自分を支配する存在でもない。師弟の関係は、いわば、高い理想を共有し、同じ心で同じ目的に向かって進む同志になることなんだ。同じ道を歩む先

輩と後輩の関係ともいえると思う。師匠と同じ心、同じ祈りに立って戦う——この関係を「師弟不二」というんだ。

そういう意味ならば、自立した信仰とは矛盾しないね。

更に、「師弟不二」の生き方を貫くならば、どれほどの力が出るか分からない。仏がこの世に生まれた理由は、人々に仏と不二の境涯を得させるためなんだ。一人一人の可能性を最高に開発させる方法を知る師匠が、弟子を自分と同じ境涯に高めたいと思っている。そのもとで薰陶を受けるならば、どれだけ自身を高めていけるか。それは僕自身が実感しているし、保証するよ。

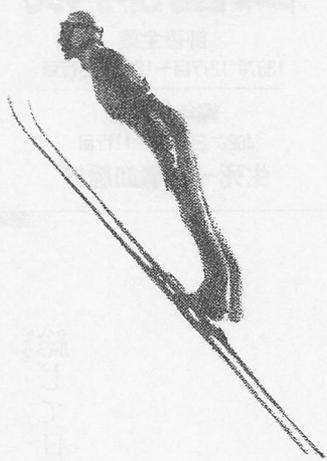
渾身の師匠に続く渾身の弟子との間に

脈動する息吹を、日蓮大聖人は、「生死一大事の血脈」と呼ばれているように思えてならない。自分の生死という一大事に比べれば、あとはすべて小さなことと言えるだろう。「臨終正念」の信心は、「生死一大事」と述べられているほど、信仰の根幹に関わる大事なことだと思う。

本抄には、全人類に「仏に成る血脈を継がしめんとするに」とある。この大聖人の心のままに実践されたのが歴代会長なんだ。僕はその弟子の道を生きて生きて生きて抜く決意なんだ。

話は変わるが、「師弟不二」にさせまいと画策したのが日顕宗なんだ。師匠と弟子とを引き離し、そのすき間に自分たちが入り込んで、信徒たちの上に君臨して甘い汁を吸いたがった。大聖人の仏法への敵対以外の何ものでもないよ。

師と同じ心 同じ祈りで



御書講義

御書全集

1337頁12行目～1338頁2行目

編年体御書

402頁3行目～11行目

生死一大事血脈抄

総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の

思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る

自他彼此の心 自分と他人、あれとこれなど区別して考える心のこと。

水魚の思 水と魚のようにならなれた密接な関係のこと。古来、「水魚の交わり」など、親密さの譬えとして用いられてきた。

異体同心 体は異なっているが、同じ心であること。

通解

総じて日蓮と弟子檀那等が、自分

と他人、あれとこれなどと隔てる心

なく、水と魚のように一体の思いに

なつて、異体同心に南無妙法蓮華經

と唱え奉るところを生死一大

事の血脈というのである。しかも

今、日蓮が弘通する要はこれなので

ある。もし、弟子檀那等がこの思い

を抱いて進んでいくならば、広宣流

布の大願も成就するであろう。これ

通する処の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶

処を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘

うべき者か、剩え日蓮が弟子の中に異体異心の者之有

れば例せば城者として城を破るが如し、日本国の一切衆

生に法華経を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんと

城者 城の中に住んでいる者のこと。

種々の難 松葉ヶ谷の法難、伊豆流罪、小松原の法難、竜の口の法難、佐渡流罪などの諸難のこと。

此の島 佐渡のこと。

するに・還つて日蓮を種種の難に合せ結句此の島まで流

に対して、日蓮の弟子のなかに異体

異心の者がいれば、それは譬えば、

城に住んでいる者が城を破壊するよ

うなものである。

日蓮は日本国の一切衆生に法華経

を信じさせ、仏に成るべき血脈を継

がせようとしているにもかかわら

ず、人々はかえって日蓮を種々の難

に遭わせ、あげ句のはては、この佐

渡にまで流罪した。そうしたなか

で、あなたは日蓮につき従われ、ま

御書講義

生死一大事血脈抄

罪す、而るに貴辺・日蓮に随順し又難に値い給う事・

心中思い遣られて痛しく候ぞ、金は大火にも焼けず大

水にも漂わず朽ちず・鉄は水火共に堪えず・賢人は金

の如く愚人は鉄の如し・貴辺豈真金に非ずや・法華経

「衆山の中に須弥山……法華経も亦復是くの如し」

法華経薬王品第二十三の文。「衆山の中に、須弥山為れ第一なるが如く、此の法華経も亦復是の如し」(開結六〇〇ジ)とある。

た法華経ゆえの難に遭われており、

その心中が思いやられて心を痛めて
いる。

金は大火にも焼けず、大水にも流

されず、朽ちることもない。鉄は水

にも火にも、ともに耐えることがで

きない。賢人は金のようにであり、愚

人は鉄のようなものである。あなた

が、どうして真の金でないことがあ

ろうか。それは法華経の金を受持し

ているからである。薬王品には

の金を持つ故か、経に云く「衆山の中に須弥山為第一」。

此の法華経も亦復是くの如し」又云く「火も焼くこと能

わず水も漂わすこと能わず」云云、過去の宿縁追いかつ

て今度日蓮が弟子と成り給うか・釈迦多宝こそ御存知

候らめ、「在在諸仏土常与師俱生」よも虚事候はじ

「山々のなかで須弥山が第一である

ように、この法華経もまた諸経のな

かで最第一である」とあり、また

「火も焼くことができず、水も漂わ

すことができない」と説かれている。

過去の宿縁によって今世で日蓮の

弟子となられたのであろうか。釈

迦・多宝の二仏こそ御存知である

う。化城喻品の「在在諸仏の土に常

に師と俱に生ぜん」の経文は、よも

や虚言であるはずがない。

在在諸仏土常与師俱生 法
華経化城喻品第七の文。
「在在諸仏の土に常に師と
俱に生ぜん」と読む。仏が
化導した衆生は、常にその
師である仏とともに出生
するということ。

「生死一大事血脈」について

本抄の題号の「生死一大事血脈」とは、生死についての根本の大事となる法の血脈という意味です。また、「血脈」とは、仏から衆生へ、また師から弟子へと法が伝わることです。

生死一大事の血脈として伝えられるべき法とは、法華經において釈迦・多宝の二仏から上行菩薩に譲り伝えられた「妙法蓮華經」であると、本抄の冒頭で明らかにされています。これはすなわち、大聖人が上行菩薩の再誕として末法に弘める「南無妙法蓮華經」のことにほかなりません。

ここで大聖人が仰せの妙法蓮華經とは、人間の生命も、十界の衆生も、万物も含む根源の一法の名なのです。すべての現象は、この根源の一法の現す姿であり、したがって、宇宙全体が一体の大生命なのです。

生と死も、実は、この妙法蓮華經という大生命に、本来具わる働きであり、リズムであるということになります。

このことが私たちの生死にとっての一大事なのです。なぜならば、この妙法蓮華經の大生命が分かなければ、生死は苦しみ以外のなものでもないからです。反対に、大生命を信解すれば、生死は仏界のリズムにかなったものとなります。「生も歡喜、死も歡喜」とは、この仏界の生死をいいます。

さて、この生死一大事の法は、どのようにして伝えられるのでしょうか。大聖人は本抄で、そのことを大要、次のように教えられています。

第一に、真実の仏の生命と、法華經で教えている成仏の法と、我等衆生の生命の三つは差別がないと信解して南無妙法蓮華經と唱えることが肝要である、と。

これは、御本尊根本の信心です。仏界の生命を顕された御本尊を我が己心の法と信じて南無妙法蓮華經と唱えることが、生死一大事の血脈が通うための根本の要件です。

第二に、「臨終只今にあり」と心得

て、御本尊根本の信心を瞬間瞬間、眞劍に実践するとともに、謗法を戒めて過去・現在・未来の三世の生死にわたって法華經から離れないようにするの法華經の血脈相承である。

第三に、広宣流布を目指して異体同心で団結し、生死一大事の法を弘通していくところに血脈が通うのである。

第二は血脈を受け継ぐ個人の信心の上で、第三は血脈を広げる弘通の上で、最も大切な姿勢を示されたものと拝せます。

今回は、この第三の箇所を中心に学びます。

異体同心の組織に血脈

総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る処を生起一大事の血脈とは云うなり

前

述の第三の点を述べられていてる御文です。

性格や社会的立場は異なっていて

も、差別・対立の心を排して、同じ信心という絆で團結していくことが異体同心です。この絆によって生死一大事の血脈が伝わり、広がっていくとの仰せです。

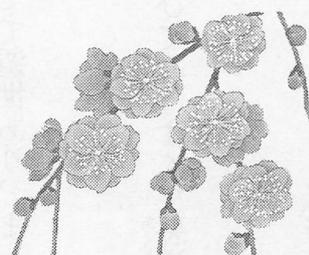
異体同心の團結があれば、その和合僧（組織）に生死一大事の血脈が流れ通うのです。

ゆえに異体同心こそ、生死一大事の妙法を弘めていくための要です。ゆえに、続いて、この異体同心が「日蓮が弘通する処の所詮」であり、これによって「広宣流布の大願」も叶うであろうと仰せです。

結局、御本仏・日蓮大聖人と心を一つにして、地涌の菩薩の使命である広宣流布を目指していく信心こそ、異体同心の「心」なのです。

具体的には同志が互いに尊敬していることが異体同心です。池田名誉会長は次のように語っています。

「私たちは『共に尊敬』『共に感謝』『あいながら、『共に幸福』『共に向上』の道を歩んでいきたい。お互い



を仏として尊敬しあつていけば、永遠の連帯ができる。絶えざる広布の拡大が可能となる」と。

大聖人は更に次のように仰せです。「剩え日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し」

日蓮宗はまさにこの御文に当たります。「法主信仰」を立てて御本尊根本の信心を失ひ、「僧が上で在家が下」などと自他彼此の心を立て、「遊蕩三昧」はあつても「臨終只今」の真剣な信心はありません。さらには「C作戦」なる策謀を企てて広宣流布の和合僧である学芸を破壊しようとした。広宣流布を根本使命とする日興門流の末流でありながら、広宣流布を破壊しようとする姿は、「城者として城を破る」との大聖人の御叱責に当たることは明確です。

苦難に耐えて自身を磨く

金は大火にも焼けず大水にも漂わ
ず朽ちず・鉄は水火共に堪えず・
賢人は金の如く愚人は鉄の如し・貴
辺真金に非ずや・法華経の金を持
つ故か

本

抄をいただいた最蓮房は、大聖人の弟子になったために難を受けたようです。ここでは難に耐えて信心を貫く最蓮房を「真金の人」と励まされています。

愚人は苦難に遭うと、恐れや迷いによって自分を駄目にしてしまいます。反対に、真に大切なものを知っている賢人は、難に遭っても、自分を貫き、かえって難によって自分を磨いていくことができます。

生死の根本の解決法である妙法を信ずる人は最高の賢人です。ゆえに、難によって、妙法の当体としての生命の力を磨き、「真金の人」として輝いていくことができるのです。

研修会

御書全集

1091頁6行目～14行目

編年体御書

811頁2行目～10行目

兵衛志殿御返事

せんするところひとすぢにをもひ切つて兄と同じく仏

道どうをなり給たまへ、親父しんぷは妙莊嚴王みまうしよこんおうのごとし兄弟けいどうは浄藏じようざう

浄眼じようげんなるべし、昔と今はかわるとも法華経のことわり

は・たがうべからず・当ても武藏むさしの入道にゅうどうそこばくの所しよ

領りよう所しよ従等じゆどうをすてて遁世とんせいあり、まして和殿のばらがわづ

かの事をへつらひて心うすくて悪道あくどうに墮おちて日蓮にっれんをうら

みさせ給うな、かへすがへす今度こんどとのは墮おべしとをぼう

通解

つまるところは、一筋ひとすぢに思いきつ

て兄と同じように仏道ぶつどうを成じようじなき

い。父親ちちおやは妙莊嚴王みまうしよこんおうの立場たちばなであり、

兄弟けいどうは浄藏じようざう・浄眼じようげんという立場たちばなにな

る。昔と今と時代は変わっても、法

華経の道理は違うことはない。

先まづごろも、武藏むさしの入道にゅうどうが多くの所しよ

領りよう・所しよ従じゆを捨てて遁世とんせいしたとい

ことがあった。まして、あなたが、

わずかの所領しよりやうや利益りやくにへつらつて、

信心しんじん弱じやくく、悪道あくどうに墮おちてから、日蓮にっれん

を怨うらんではならない。どう考えて

も、今度は、兵衛志殿ひょうゑしだんのは退転たいてんする

妙莊嚴王・浄藏浄眼 法華
経に説かれる。妙莊嚴王の
夫人ふじんを浄徳じようとく、二人の子ども
を浄藏じようざう・浄眼じようげんといった。浄
藏・浄眼は仏の教えを信
じ、無量の功徳くどくを得て、母
の浄徳夫人じようとくふじんとともに出家しゆげ
した。王は初め外道げどうを信じて
おり、これに反対したが、
後に二人の子どもの導みちびきで
正法しやうぽうに入った。

武藏の入道 武藏国の国司
であった北条義政ほうじょうよしまさのこと。

遁世 俗世間ぞくせけんを逃のがれて關係
を断たつこと。

るなり。

此の程心ざしありつるがひきかへて悪道に墮ち給はん

事がふびんなれば申すなり、百に一つ千に一つも日蓮が

義につかんと・をぼさば親に向つていい切り給へ親なれ

ば・いかにも順いまいらせ候べきが法華経の御かたき

になり給へば・つきまいらせては不孝の身となりぬべく

候へば・すてまいらせて兄につき候なり、兄をすてら

れ候わば兄と一同とをぼすべしと申し切り給へ

と思っている。

これまで信心してきたのに、ひき

かえて悪道に墮ちられるのはかわい

そうだから言うのである。百に一

つ、千に一つでも日蓮の教えについ

ていこうと思うならば、親に向かっ

て言い切りなさい。「親であるから、

なんとしても従うべきですが、親が

法華経の敵になられたから、つき従

ってはかえって親不孝の身となつて

しまうので、私は親を捨てて兄につ

きます。兄を勸当されるのならば、

私も兄と同じだと思ってください」

と言い切りなさい。

本抄は池上兄弟のうち、兄の宗仲が親から再度、勸当され、危機に陥っていた時、弟の宗長に与えられたお手紙です。

兄と同じく親から勸当されるかもしれないという恐れと、親に従えば、兄に代わって家督を継げるという誘惑から、宗長の心は、さまざまに揺れ動いていたであろうことが想像されます。大聖人は宗長の信心を慮って、こまごまと激励されています。

せんするところひとすぢにをもひ切つて兄と同じく仏道をなり給へ

周 囲のさまざまな雑音があるかもしれないが、兄と同じく不退転の決意を固めるべきであると、まず指導されています。

そして、兄弟を法華経妙莊嚴王品第二十七に説かれている浄蔵・浄眼に、信仰に反対している父を妙莊嚴王に譬えられています。

妙莊嚴王、浄蔵・浄眼は、雲雷音宿

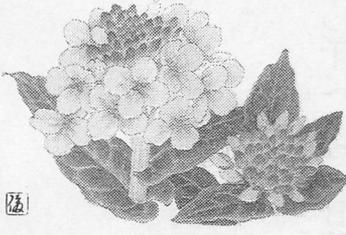
王華智仏の時代の王と王子であると説かれています。

妙莊嚴王は仏に帰依していませんでしたが、浄蔵・浄眼が父を導いて仏に帰依させたことが、同品には説かれています。

そのなかで、浄蔵・浄眼がさまざまな神変を示すことによって父を仏道に導いたと述べられています。

この神変とは、仏法によって、人間として成長し、力をつけたことを、このように表現した、と考えてよいでしょう。

大聖人が池上兄弟に浄蔵・浄眼のようになりなさいと仰せられているのは、兄弟があくまでも信仰を貫くことにより、その人間の成長の姿をもって、父を正法へ導くとともに、いかなる状況にあつても信仰を貫く以外に、仏道を成就する道はないことを



画・谷井俊英

教えられているのです。

昔と今はかわるとも法華経のことは、たがうべからず

浄 蔵・浄眼は、力を合わせて、父の妙莊嚴王、母の浄徳夫人を仏法に導きました。

その一家四人が法華経の会座に、華徳菩薩や葉王・葉上菩薩として列なつたと説かれています。

池上兄弟も浄蔵・浄眼と同じように父を諫めれば、彼らと同じく仏道を成就することができるというのが法華経の「ことわり」であると仰せられています。

法華経の「ことわり」は「昔と今」すなわち、時代が異なっても、同じ因を積めば、同じ果を得ることができるといふことです。

時代の異なりにとどまらず、いかなる人であれ、いかなる所であれ、同じ因が積まれれば、同じ果がともなつてこそ、普遍的かつ不変の真理といえる

のです。

仏法とは永遠に変わることなく、また、あらゆる場合に通じる真理を明かしたものですから、浄蔵・浄眼に当てはまったことは、池上兄弟にもその通り実現するのです。

本抄で武蔵の入道（北条義政）を挙げられておられるのは、武蔵国（今の東京都、埼玉県だけでなく、神奈川県の一部も含んだ）全体を領する人が、その広大な領地も捨てて仏門に入ったことを例に、池上家のわずかな領地や財産への欲にとらわれ、信心を捨てるようなことがあつてはならないと戒められています。

ここで「かへすがへす今度とのは墮べしとをばうるなり」と仰せられているのは、宗長の揺れ動く心を心配されて、このように厳しく言うことによつて宗長が信心を奮い起こして難を乗り越えるであろうという大聖人の大慈大悲からのお言葉であることを知るべきです。

それは、そのあとの「此の程心ざし

ありつるがひきかへて悪道に墮ち給はん事がふびんなれば申すなり」と仰せられていることから明らかです。

百に一つ千に一つも日蓮が義につきかんと・をばさば親に向つていい切り給へ

ここでは具体的に、宗長に、どのように対処し行動していくべきかを指導されています。

大聖人がここで宗長に教えられているのは、信仰という問題では、毅然とした態度をとるべきであるということです。

それ以外のことについて、親は誹法なのだから、言うことを聞く必要はない、などと言われているのはありません。

親であるから、従うのは当然であるが、法華経を誹謗している親に従つては、かえって親不孝になるから、兄につくのであると言いなさいと言われているのです。

すなわち、父の反対に屈せず法華経の信心を貫くことは、宗長自身の成仏のためだけでなく、父のためでもあることを教えられているのです。また、そのことを父にきちんと言うべきであると言われているのです。

大聖人は、同じく法華経の信仰に反対する主君や同僚から迫害されていた四条金吾にも、主人から領地替えを言われた時、私の務めは主君の側にいて主君を守ることであると言いなさいと仰せられています。

これらは、いたずらに対立的な態度を勧められているのではなく、毅然とした姿勢、生き方を貫くべきことを教えられているのです。

そこには近代的といつてよい「自立した個」を大事にされた大聖人の考え方が押されます。

大聖人の、この兄弟を思う心に満ちた御指南を受けて、宗仲・宗長の兄弟と、その夫人たちは、父の池上左衛門大夫康光を正法の信仰に導くことができたのです。

グループ座談会

御書全集

1091頁・14行目～16行目

編年体御書

811頁・10行目～12行目

兵衛志殿御返事

過去遠遠劫 無量無辺の遠い過去のこと。劫は長遠な時間の単位。法華經の迹門では三千塵点劫、本門では五百塵点劫という昔から、仏は衆生を化導してきたことが示されている。

三障四魔 仏道修行を妨げる三種の障り（煩惱障、業障、報障）と、善心を害する四種の魔（煩惱魔、陰魔、死魔、天子魔）のこと。

すこしも・をそるる心なかれ・過去遠遠劫より法華經

を信ぜしかども仏にならぬ事これなり、しをのひると・

みつと月の出づると・いと・夏と秋と冬と春とのさか

ひには必ず相違する事あり凡夫の仏になる又かくのごと

し、必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび

愚者は退くこれなり

通解

少しも恐れる心があつてはいけな

い。過去遠遠劫から法華經を信じた

けれども、仏になつていないのは、

この恐れる心によるのである。

潮が引く時と満ちる時と、月の出

る時と入る時と、夏と秋と冬と春と

の季節の境目には、必ず相違するこ

とがある。凡夫が仏になるときもま

た同じである。必ず三障四魔という

障害が出てくるので、賢者は喜び、

愚者は退くのである。

障魔の出現に賢者は喜ぶ

池

上兄弟の兄・宗仲が父・康光から再び勘当されたとき、弟の宗長を指導された御消息です。別名を「三障四魔事」といいます。

日蓮大聖人は、兄が勘当されると、家督の相続権が弟へ移って、父の地位や役職、所領や財産をすべて受け継ぐことができるため、宗長の信心が動揺することを心配され、繰り返し厳しく指導されています。

大聖人は宗長に対し、「あなたは目の先のことと親につくであらうし、親につけば世間の人はほめるだろうが、それでは真の孝養にはならない」と教えられ、「千に一つでも日蓮の義につこうと思うならば、親に向かって兄を捨てるなら私も兄につきますと切り切りなさい」と指導された後に、少しでも恐れる心があつてはならず、過去遠劫の昔から法華経を信じながら成仏できなかつたのは、難を恐れて退転した

ためなのである、と教えられています。

そして、潮の干満の境目、月の出入りの境目、季節の変わり目には、必ず今までと違った現象が起こると同じように、凡夫が仏になろうとする境目には、必ず三障四魔が競い起こってくるのである、と示されています。

「賢者はよろこび愚者は退く」と仰せのように、そういう仏法の方程式を知っている賢明な人は、障魔に遭ってもくじけることなく、むしろ喜び勇んで難と戦って打ち破っていき、逆に目の先のことにとらわれる愚者は、難を恐れて退転してしまふのです。

三障四魔が現れた時こそ、宿命を転換するチャンスであると受け止め、強い祈りを根本にして、見事に難を乗り越えることが肝要であり、そこに真の勝利の人生が得られるのです。

私たちは、何ものをも恐れず、獅子として一人立つ信心を貫いていきましよう。

広布勤行全拜読のために

万物を構成する要素である地・水・火・風・空の五大の働きも、妙法の働きであり、地涌の菩薩はその力用の象徴でもあることを示されています。火大は自らの生命を燃焼しながら人々のために戦っていく上行菩薩、水大は自他ともに生命を浄化させていく浄行菩薩、風大はいかなる醜い世間の塵も吹き払っていく無辺行菩薩、地大は人々が安心して依処としていけることで安立行菩薩、空大は南無妙法蓮華経自体の力用の象徴と考えられるのです。これら四菩薩の働きは生命本然の発露であり、妙法をその当体とする地涌の菩薩の一身にすべて関わっているのです。

法華経によれば、末法は上行菩薩が出現する時に当たっているわけですが、大聖人は現実にはどうなのであろうかと仰せられたうえで、その上行菩薩が出現されているにせよ、まだ出現されていないにせよ、上行菩薩が弘めることになっていく妙法を大聖人御自身がすでにほぼ弘めているのであると仰せになり、御自身が外用において上行菩薩の再誕であることを示されているのです。

会行勤布広

御書全集

1338頁 4行目～8行目

編年体御書

402頁 13行目～17行目

生死一大事血脉抄

火は焼照を以て行と為し・水は垢穢を浄るを以て行と

為し・風は塵埃を払ふを以て行と為し・又人畜草木の為

に魂となるを以て行と為し・大地は草木を生ずるを以

て行と為し・天は潤すを以て行と為す・妙法蓮華經の五

字も又是くの如し・本化地涌の利益是なり、上行菩薩・

末法今の時此の法門を弘めんが為に御出現之れ有るべき

由・經文には見え候へども如何が候やらん、上行菩薩出

現すとやせん・出現せずとやせん、日蓮先ず粗弘め候なり

通解

火は物を焼き、照らすことをもつて、その働きとし、水は汚れを浄めることを、その働きとし、風はチリやほこりを払うことを、その働きとし、また人畜や草木のために、魂となることをもつて、その働きとし、大地は草木を生ずることをもつて、その働きとし、天は万物を潤すことをもつて、その働きとする。妙法蓮華經の五字もまた、地・水・火・風・空の五大の働きを具えている。本化地涌の菩薩の利益がこれである。

上行菩薩が末法今の時に、この法門を弘通するために御出現されると經文には説かれているが、どうであろうか。上行菩薩は出現していると考えらるべきであろうか、出現していないと考えるべきであろうか。ともかく日蓮は、まず（上行菩薩の弘められる）妙法五字を、ほぼ弘めているのである。

本化地涌 久遠成道の本仏に化導された地涌の菩薩のこと。法華經從地涌出品において、大地から涌出した地涌の菩薩のこと。

大切にしたい 家族との心通う交流



私は、入会したばかりなのですが、会合に行くとなると元気になるはず。いろいろな方が本当に温かくて……。

でも、家族のなかで信心をしているのは私だけなので、帰りが遅くなったりすると、父から「早く帰ってきなさい」と小言を言われてしまいます。良いことをしているのに、なかなか分かってもらえません。

電話一本でいい その心遣いが仏法

一生懸命、頑張っているんです。友人と語り合ったり、活動することは、大変に素晴らしいことです。その持続に自身の成長があります。

ところで、帰りが遅くなるときは、家に電話をいれたりしていますか。



……そういえば、あまりしてません……

きっと、お父さんは、あなたのことが心配でしょうがないと思うのです。

信心といっても特別なことをするわけではありません。

御書に「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」(一一七四頁)とあります。一人の人間としてどう行動するのか。それ以外に仏法はありません。濃やかな心遣いや、温かな振る舞いなど、人としての良いところを伸ばしていくのが信仰者なのです。ですから、まず、帰宅時間を電話で知らせてみてはどうでしょうか。きっと、お父さんは安心されると思いますよ。



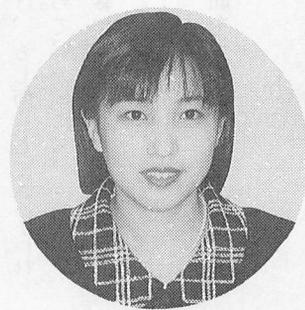
私の気持ちなんて、何も理解してくれない。自分だけが正しい……

連載 30

新入会の方のため ために



※回答者※



◆女子部教学部長

おきの きみえ
沖野 君枝

—そんなつもりになっっていたのかもしれない。

日蓮大聖人が、門下の青年リーダーの南条時光に送られたお手紙に「父の恩の高いことは、須弥山さえ、なお低いほどです。母の恩の深いことは、大海さえ、かえって浅いほどです。心して、父母の恩に報いていきなさい」（取意、一五二七頁）とあります。

大聖人御自身も、遠く故郷に住む母親の病気の時には、心からご心配され、お題目を送り続けられたと、御書に綴られています。

仏法では、恩を感じ、それに報いていくことを、本当に大切にします。



私たちは、そういう生き方を学んでいるのですね。

両親に感謝していない人はいない

女子部のAさんは、かつて、ご両親に反発して、なかなか活動ができなかったそうです。そんなある日、ふと、お母さんがいつも唱題している仏壇の引き出しを開けてみたそうです。

すると、中にはお母さんの体験発表の原稿。そこには「昔は貧乏で、娘には何も買ってあげられませんでした。ただ、良い友だちに恵まれますようにと、祈り続けてきました」と。

そして、毎年、Aさんの誕生日には長時間の唱題をしていたことを初めて知ったそうです。

お母さんが、自分のことをここまで思っていてくれたのか。Aさんは、胸がいっぱいになったそうです。

お母さんの深い愛情に包まれていたことを知ってはいましたが、はじめて素直に感謝できるようになった。そして、広

布の活動を純粹に貫いてきたお母さんを心から誇りに思えるようになっていったそうです。

Aさんの幸せをどこまでも願うお母さんの気持ちが通じた

んですね。実は私も、かつてのAさんのように、親の顔を見ると、なかなか素直になれないのですが……。

毎日顔を合わせていると照れくさいこともありますよね。南条時光へのお手紙の続きにこうあります。「親に良い物を贈ろうと心がけ、もし何もしてあげられなければ、せめて、一日に二、三回、やさしい笑顔で親に向かいなさい」（取意、一五二七頁）と。

親に笑顔を見せるということですか。

例えば活動から帰ってきたら、まず、

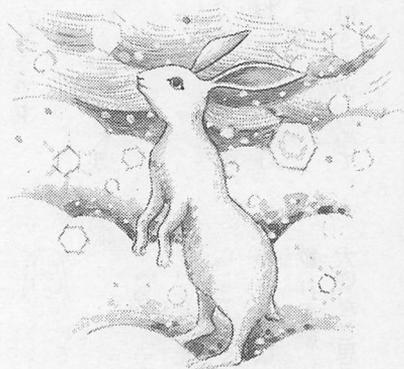


連載⑩

御書と 女子部教室編 ともに

しょうぞうじょうげん ごしょうそく
浄蔵浄眼御消息

弘安3年 59歳御作
(1396年～1397年)



● 日々の教学研鑽の便宜のために、御書の御消息文を現代語訳しました。
傍線をほどこした部分は、後に本文を掲げて解説を試みました。

生米一俵、瓜一籠、根芋などの品々をいただきました。

昔、楽徳という名の長者に奉公をして、自分はもちろんのこと、妻も子も昼夜となく、責め使われていた人がいました。あまりに責められたので、堪えられずに、密かに他国へ逃げて、その国の大王に仕えるようになりました。そのうちに、王から用いられ、王の寵臣となって権勢をもち、ついに関白になりました。後にその国の力を背後にして、自分のもとと主人の国を討ち取りました。その時、もとの主人の楽徳は、この関白を見て大いに怖れ、以前にひどく扱ったことを後悔してこの関白に仕え、さまざまな財宝を奉りました。そして負けてしまったことを悔しく思うところか、今はただ命が生きながらえることを願うというありさまでした。

法華経もまたこれと同様で、法華経は東方の薬師仏の主であり、南方・西方・北方・上下の一の仏の主です。釈迦仏などの仏が法華経の文字を敬われることは、民衆が王を恐れ、星が月を敬うようなものです。

ところが、我ら衆生は第六天の魔王の直弟子で、地獄・餓鬼・畜生等(の三悪道)に押し込められて、息つく間もなく、朝夕魔王が獄卒をつけて責め立てているのですが、そうこうしているうちに法華経に辿り着いたので、釈迦仏等の十方の仏が、我々を仏の子とされたので、梵王・

語句

薬師仏 東方浄瑠璃世界の教主。薬師経に説かれる。

第六天の魔王 魔の首領、他化自在天王のこと。欲界の六欲天の最頂に住する。正法に敵対し、仏道修行の障害となり、成仏を妨げようとする。三障四魔の天子魔にあたる。

帝釈たいしゃくでさえも恐れおそて寄りつかず、ましてや第六天の魔王は全く寄りつけないのです。魔王は以前は我らの主君の立場であつたけれども、今は（法華經に辿り着いた）我ら衆生を敬おそい畏おそれて、もし、（我ら衆生に）悪くあたれば、法華經・十方の諸仏とご対面たいめんのときには、（自分の立場が）悪くなるだろうと、恐れかしくんで供養するのです。だから何としても六道の一切衆生を法華經へ辿り着かせまいと一生懸命いっしょうけんめいに邪魔をするのです。

それなのに、どうしたことでしょうか。あなたは、皆が憎にくんでいる日蓮をあわれと思われて、このように遥々はるかと（身延の）山中へ種々の物を送ってくださることは、一度や二度のことではありません。これはただごとではありません。ひとえに釈迦しやくか仏が（あなたの身に）入り替かわられたのでしようか。あるいは、お亡なくなりになったご子息たちが仏様になられて父母を仏道ぶつだうに導みちびくために、（あなたの）お心に入り替かわられたのでしようか。

妙莊嚴王みょうじょうげんおうという王は悪王であつたけれども、その王子の淨藏・淨眼じようざうじようげんが（仏道に）導かれたので、両親は二人ともに法華經を信じて仏になられたのです。この度のことも、そのようなことなのであろうと不思議に思われます。甲斐公かいこう（日持）が語るには「亡なくなった甥わいは）普通の人よすがた形が勝すぐれていたことに加えて、心も素直で智慧ちえも賢かしこく、何事につけてもすばらしかった人が、早く亡なくなったことは何と哀あはれだろうかと、思っていました。一方でよくよく考えて見れば、この子が亡なくなったことで母親も仏道を求める者となり、父親は追善供養ついでんくようをするようになりました。ただごととは思えません。また皆の人が憎にくんでいる法華經につかれたことは、ひとえに亡なくなった子が父母二人の身に寄り添そって（信心を）勧めすすめ申し上げたのではないでしようか」と言っていました。が、（私も全く）その通りだろうと思いません。

前々まへまへの（ご供養をいただいた）時は、ただ一通りの形だけのことかと思っておりましたが、このたびはお志こころざしがこれほどまでに深かったと初めて知りました。

また、（あなた方に）もしもの事があつたならば、暗い闇やみに月が出るように、妙法蓮華經の五字が月となってあらわれてあなたの前を照らすでしょう。その月の中には釈迦しやくか仏と十方の諸仏はもとより、亡なくなられたご子息もあらわれているとお思ってください。詳しくはまた申し上げることに致いたしましょう。恐恐謹言。

七月七日

日蓮花押

梵王・帝釈 インド神話における中心的神。法華經では、眷属けんぞく二万の天子ともにも会座えざに連なり、法華經の行者の守護を誓ちかっている。

甲斐公 六老僧の一人、蓮華阿闍梨げんわあせり日持のこと。本抄が与えられたとされる松野六郎左衛門尉むつろさゑもんゑの弟。

情報

このお手紙は、弘安三年（一二八〇年）七月七日、身延において認められたものです。本文中に甲斐公日持が、このお手紙を与えられた人の子息の生前の面影を語っているところから、日持の兄である松野六郎左衛門尉に与えられたと考えられます。

ポイント

釈迦仏等の仏の法華經の文字を敬ひ給ふことは民の王を恐れ星の月を敬ふが如し

ここでいう「法華經の文字」とは文底下種の南無妙法蓮華經であり、釈迦仏などのあらゆる仏が敬う最高の法です。

そしてその敬う様子を、「民の王を恐れ星の月を敬ふが如し」と仰せです。法華經は、一切經のなかで最高の法だというだけではなく、だからこそ、法華經を受持する人も、また最高ののだという深い確信に立つべきでしょう。

その妙法は、御本尊を受持する私たちの胸中に具わられるだけでなく、すべての人の胸中に秘められているものです。私たちは、その確信に立って心から妙法のすばらしさを伝えていきたいのです。肝心なのは自分自身

文永の末から建治・弘安にかけて、様々な難が大聖人門下に起こり、弘安二年には熱原の法難が起こりました。この法難を機に大聖人は大御本尊を御建立され、令法久住の総仕上げの戦いを展開されて、弟子たちにも一層純粹な信心を貫くよう促されています。

の中で心の底からそう確信できるか否かです。

然るに我等衆生は第六天の魔王の相伝の者……梵王・帝釈だにも恐れて寄り付かず何に況や第六天の魔王をや

「相伝」とは師から弟子に法を伝えることで、私たちはことごとく第六天の魔王の相伝を受けた直弟子であると大聖人は仰せになっています。魔とは決してどこか別のところにいるのではなく、また観念的なものでもなく、厳然と生命の中に存在するものです。

池田先生は『仏界が顕れる』ことと『魔軍を降す』こととは一体なのです。魔は内にも外にもいる。しかし、それに勝つか負けるかは自分自身の一念です。「決して魔に紛動



されない自分自身を鍛え上げることです」と指導されました。

魔の相伝ではなく、仏の相伝を受けることが、妙法の人間革命です。魔が競い起こらなくなるのが成仏ではなく、魔と戦い続け、宿業につぶされることのない自分をつくりあげることこそ、成仏なのです。

人間革命は、やがては国土世間をも魔の所領から仏の国土に変えていく力となっていくのです。

皆人の憎み候日蓮を不便とおぼして、かく遙々と山中へ種種の物送りたび候事一度二度ならず、ただごとにあらず偏へに釈迦仏の入り替らせ給へるか

大聖人に対して日本国中の人々が非難を浴びせているときに、自身を顧みず何度も大聖人に御供養をした弟子の勇気を最大に称えられていきます。

信心の清らかな求道の弟子を心から大切に思い、真心にたいしては真心で接していかれる大聖人のお振る舞いこそ、人間主義の極致と拝せましよう。

御君達の御仏にならせ給いて父母を導かんために御心に入り替らせ給へるか

家族の死は耐え難い苦しみであり、ましてまだ若い子供の死であれば、なおさらその現実を受けとめることは、心が引き裂かれるような悲しみでしょう。

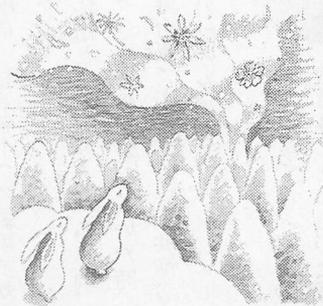
大聖人はこの悲しみに同苦しなながらも、三世という深い生命観のうえから、家族が幸福境涯を求めるときつけをつくれた、子息の使命を感じていくよう仰せだと考えられます。最悪の事態と思われる死さえも、深い使命に変えていく妙法。それはあらゆる人が、どんな状況でも人生に意味と価値をもたらしめる生き方を見つけることができる法なのです。

そして、そのことを周囲の人に感じさせ、法を求めるときつけとしていく人こそ、最も尊い人生を生き切った人だと言えるのではないでしょう。

浄蔵・浄眼の兄弟が、団結して妙法の力による様々な神通力を現じ、父の妙莊嚴王を仏法に帰依させたのは、単なる物語ではありません。信心根本に、よき家族の一員として人間革命していく姿こそ、一家を和楽に導く源泉であり、そこに深き使命があると自覚していかうではありませんか。

その生き方は、家庭においてだけでなく、広宣流布の原理そのものなのです。

御書とともに



画・宮嶋康子

平和・人道の拠点

◆スイス・ローマンド支部男子部長

ドミニック・ユーリー



国際的な街が大好き

私は一九七九年にロンドンでこの信心に出あいました。今は妻と美容院を経営していますが、私がこのジュネーブで暮らすことにした理由は、ここが国際的だったからです。お客さんは、世界中から見えられ、英仏の言葉が行き交う店内です。

ジュネーブは、レマン湖、アルプス山脈、ジュラ山脈などに囲まれた自然に恵まれた街です。特に、晴れ渡った日は、彼方にかの有名な白い山、モンブランの姿を愛することもできます。

人道主義の精神のシンボル

近代におけるジュネーブの国際的役割は、一八六四年の第一回ジュネーブ条約締結に端を発します。これは、アンリ・デュナンが国際赤十字を構想してから五年後のことでした。一八七二年には、いわゆるアラバマ裁定があり、米英間の大きな論争が平和裏に解決されました。こうして、ジュネーブは人道主義の精神と、紛争の平和的解決のシンボルとなったのです。

今日、ジュネーブには他に例を見ないほど多くの団体や国際公務員が集中しています。十六の国際組織、百五十を超える非政府機関、そして百二十以上の常任使節団があります。

ジュネーブは国際都市であり、スイスSGIもこの文化が混在した状態を反映しています。私たちはドイツ、フランス、イタリアという三つの異なる文化を共



仏法の理念を舞台に生かす

◆女優

ドロテー・ブランデン



この街この人

私は現在、ジュネーブの劇場で舞台女優をしています。

この仏法と出あったのは六年前。当時イタリアで仕事をしていた時、幕間に舞台裏で唱題している共演者からこの妙法を教えてもらいました。

それまでは、自身の敵は外にあるものと考えていたのですが、信仰をしてからは、自分の内面に魔が存在することや、自分の周りで起こる一切の出来事は、内面で起こっていることに関わっていました。そうした仏法の理念が仕事においても大きく生かされています。たとえある時の演技がうまくいかなくとも、周りからの評価を気にするのではなく、自分が全力を尽くすことに専心することで、次第に多くの観衆を魅了することができるようになったのです。

今後も、人々に感動を与えられる演技を目指していきます。

WORLD SQUARE

世界の街に広布の若人

38 ジュネーブ



国際都市に輝く

有し、全国レベルのセミナーでは、講義内容はこれら三つの言語に翻訳されます。

◎ スイス初の会館がオープン

これまでの活動は、主にメンバー育成が中心に行われていましたが、昨年十二月六日には、我が国最初の文化会館のオープニングがこの街で行われ、これ以降、より広く仏法の素晴らしさを伝えていけるようになりしました。

この時の会館の落成式は大成功で、来賓の中にはペトロフスキー国連事務次長の姿もありました。SGIは非政府機関として公認されており、同文化会館は国連の運動を応援する役割も担っています。

スイス文化会館の建設が提案されたのは一九八三年のことです。この年は、池田SGI会長がスイスのチューリヒを訪問され、スイスのメンバーを激励していただきました。この時の激励が大きな財産となって、今のジュネーブの青年部がつくられていったのです。

一九九五年には、会館となる建物が入手され、複雑な修復作業の末、一九九七年の十月に完成しました。

文化会館が完成し、それを管理・運営するため、さまざまな活動が行われますが、そうした任務の場は、私たちが一人一人にとって、自分たちの境涯をさらに磨きゆく機会となっています。

私たちの将来の目標は、価値創造の原理を根本とした若い世代を育成し、世界各地で活躍する人材を輩出していくことです。

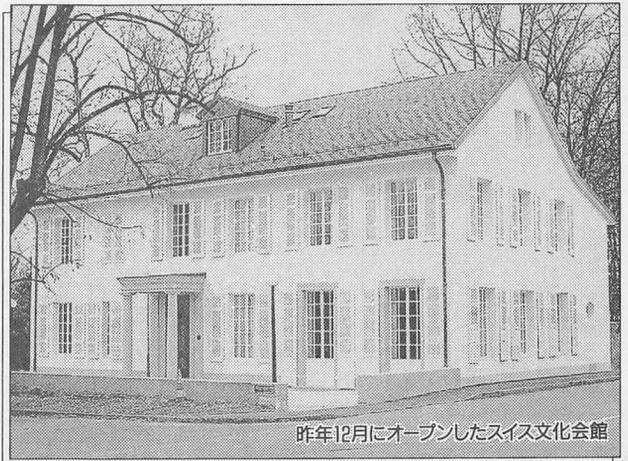
♪ タウンたん town ♪



ジュネーブが人道精神のシンボルとなっているのは、この街の歴史そのものも深く関わっている。

16世紀、宗教革命の指導者カルヴァンもこの街に住み、この地は旧体制に抵抗する人たちの避難場所となった。革新的思想に寛容なこの街のなかからルソーが生まれ、ボルテールやバイロンが安らぎの場所を求めて入ってきた。すなわちジュネーブは、500年もの歴史をもつ国際都市なのである。

「ジュネーブはスイスに非ず」とスイスの他州から評されるのは、国際都市であることの証明でもある。



昨年12月にオープンしたスイス文化会館

「生きる力」の育成

◎「あいさつ運動」で活気ある学級をつくる

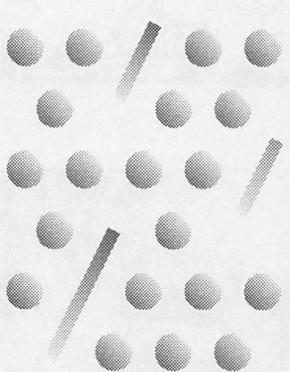
私の所属する東京・台東区の入谷支部には、牧口先生が初代校長を務められた大正小学校があります。新校舎建設の際、学校にお願いして、支部の友と見学しました。校長室には、歴代校長の写真の最初に牧口先生が飾られており感動しました。私自身もこの小学校の出身であり、支部の皆さんとともに誇りに感じております。

牧口先生は、教育の目的は人生の目的と同じであり、「幸福」であると述べられています。私も小学校の教師として、子どもたちが、真の幸福を得られるように、努力していきたいと思えます。

教員としての私の最大のモットーは、活気のある学級づくりを通して、積極的に行動できる子どもたちを育てたいということでした。そこで、子どもたちに活力をつけさせるために、仏法で説く「声、仏事をなす」の原理

から、あいさつ運動の徹底を考えました。学校でのあいさつはもちろん、朝、家を出てくる時に、「行ってきます」だけではなく、「きょうも、一生懸命勉強してくるよ」と言うように指導し、友だち同士でのあいさつも心がけさせました。また、どの教科でも教科書の本読みはクラスの全員に聞こえるように、練習を積ませました。しばらくすると、声を出すことがいやでなくなり、行動にもめりはりがつくという結果を得ました。

次に、仕事を喜んでやれる子どもの育成を図ろうと思いい、「与えられた仕事は、人が見ていようがいまいが、きちんとやるのが大切で、やり遂げたものはいのちの中に財産となって積まれていく。一生懸命やった分だけ自分が得をしていき、さぼった分だけ損をする。そうして積み上げた『いのちの財産』は、だからも取られないし、自分を輝かしていく宝となる」と訴えました。これは仏法の福運論を基にして考えたものです、



●プロフィール

うみの まもる 小学校教頭。後輩の教育部員の育成、現場の経験を生かしセミナー等に力を注ぐ。東京都台東区在住。48歳。



●教育部東京副書記長

海野 衛

さらに、自分の分の仕事が終わったら、人の分まで手伝えることの大切さを教え、一生懸命取り組んだ子には、心からほめてあげるようにしました。掃除などにみんなががんばる様子を見ていた、他のクラスの先生方にもよくほめられ、ますますやる気を出していたようです。

㊦ 感謝やほめ言葉は三つぐらい重ねる

また、子どもに何か特別な仕事（用事等）を頼んだ時には、その用が済み次第、「〇〇をしてくれました」と報告をさせました。これは、子どもが責任を果たしたという自覚と喜びを感じるとともに、お礼やほめる場を確保するためです。家庭でも用事を頼む場合にも、報告させる習慣をつけさせたいものです。そして感謝やほめる言葉は、三つぐらい続けて言うてはどうでしょうか。「ありがとう。よくやってくれましたね。本当に助かりましたよ」と続けて言われると、子どもは、うれしさが増すとともに、またやろうという気持ちになるものです。

授業が終わり帰る時には、その日の反省を全員でします。友だちにされた嫌なことも、うれしかったことも発表してもらいました。嫌だったことは、両方から言い分を聞き、その日のうちに問題を解決し、小さなじめめを見逃さないように心がけました。また、うれしかったり良かったことは、それを実行した子どもへ、みんなで拍手を送り、清掃などの当番活動でがんばった子どもにも、必ず称賛するようにしました。

家庭においても、こうした反省の話し合いの場が必要

であると思います。何げない子どもの話のなかから、学校での様子や、友だち関係などを知ることがができます。心配なことがあれば、担任の先生と連絡をとり、相談にのってもらおうようにしたいものです。子どもは、学校でほめられたことは喜んで話しますので、是非とも「お母さんも、うれしいな」と喜んであげて欲しいのです。

また、子どもにテストを返すとき、間違えた箇所について、原因を聞くようにしました。単なる勘違い等によるケアレスミスの場合には、「このテストの点数は、この通りだけれど、実力は〇〇点だね。次はがんばろう」と激励し、実力についての自信をつけさせるとともに、「ケアレスミスに気をつけていこう」という自覚を促すことができます。お子さんがテストを家庭で見せたときにも、その努力をほめてあげて欲しいのです。それが、次回にはがんばろうという気持ちを生むのです。

今、文部省では、子どもの「生きる力」の育成を掲げております。私たち教育部員の待望の書である『二十一世紀の教育と人間を語る』のなかで、池田先生は「『生きる力』というのは、（中略）言葉をかえれば、『価値創造』ということでしょう。牧口先生は、一人ひとりの子どもたちに、自分自身の胸中の『知恵の宝庫』を開くカギを与えようとした。自分の力で考え、自分の力で行動する人間を育てたい——それが、創価教育の原点なのです」と話されており、この指導をしつかり胸に納めて、子どもにとって最良の教育環境になれるように自分自身を高めていきたいと決意しております。

強き楽観主義は
すべてを良い方向へ導き
治療効果をもたらす

リウマチとこの闘い

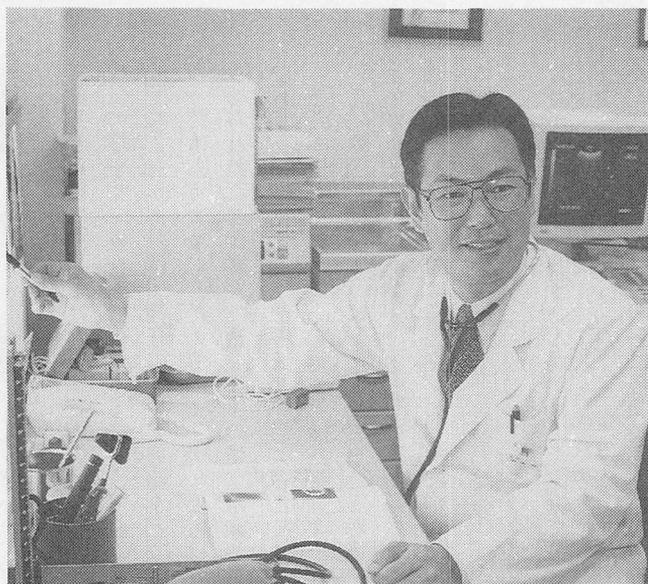
◆ 古代人にもあった関節の病氣

今から三百〇四百万年前に東アフリカの原野で暮らした最古の人類、アウストラロピテクスや数万年前に、ヨーロッパで最後の氷河期を生き抜いたネアンデルタール人の遺骨の関節には、既に病的变化が見いだされています。このことは関節の痛みとの闘いが人類の歴史とともに始まっていたことを物語っているのです。日本でもつい最近、縄文時代の人骨から慢性関節リウマチによると思われる病変が発見され、話題を呼びました。

人間の関節はその可動範囲によって、不動関節・双軸関節・可動関節の三つに分けられます。肩、肘、手や足のほとんどの関節は可動関節で、この可動関節には滑膜と呼ばれる薄い袋状の膜があり、その中には関節液が入っています。このために可動関節は滑膜関節とも呼ばれています。滑膜関節では向かい合う骨のそれぞれの対面は軟骨で裏打ちされ、運動などによる衝撃力はこの軟骨をはじめ関節周囲の筋肉や腱で吸収され緩和される仕組みになっています。そのため滑膜関節は究極のヘアリングとも言われています。

◆ 女性に多い慢性関節リウマチ

私の専門は膠原病で、大学を卒業して以来、関節の痛みと闘う患者さんと接しています。膠原病の代表的疾患としては慢性関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、強皮症、多発性筋炎、結節



◆ 埼玉県ドクター部長

広瀬 恒

いのちの不思議



—— 医と仏法の視点から

性動脈周囲炎、リウマチ熱が挙げられます。なかでも慢性関節リウマチは、私たちの最も身近にある膠原病で、世間一般に「リウマチ」と言われている病気のことです。

現在、日本には約三十〜五十万人の患者さんがいるといわれ、男女比では一对三で女性に多く、しかも、その三分の二は二十〜五十歳代が占めています。したがって、「リウマチ」は女性の敵であり、主婦の敵であり、母の敵であるわけです。

「リウマチ」では、滑膜がたくさんの小血管や炎症性細胞を包含しつつ増殖し、パンヌスと呼ばれる肉芽組織を形成します。このパンヌスが炎症性サイトカインや蛋白分解酵素を放出しつつ関節軟骨や骨を侵食していくのです。

また「リウマチ」の関節では活性酸素が好中球によって放出され、局所の炎症反応や組織破壊の一因となっています。したがって、適切な治療が行われなければ、軟骨・骨、そして周囲の靭帯や腱鞘も損傷され、滑膜関節のペアリング機能は著しく障害され、日常生活に多大な支障をきたすようになってしまいます。

❖ 精神的ストレスで病状が悪化

現在「リウマチ」の病因をめぐり、免疫学的側面からの研究・治療が精力的に進んでいます。

しかし、何故このような異常事態が起きてくるのか、ほんとうの原因は、残念ながらまだわかって

ていません。

一方で、「リウマチ」では古くから次の三つのことが指摘されてきました。

- ① 左右対称性に関節が侵される。
- ② 脳卒中で半身麻痺に陥った人に「リウマチ」が発病した場合、麻痺側の関節は侵されない。
- ③ 精神的ストレスで病状が悪化する。

これらの事実は「リウマチ」の発症・悪化には、精神・神経系が深く関わっていることを示唆しています。脳内にはサブスタンスPと呼ばれるニューロペプチドが存在しますが、これが「リウマチ」の関節で検出され、「脳と関節」そして「心と関節」のかかわりが関心を集めています。

❖ 痛みを理解し希望の励まし送る

新しい抗リウマチ薬が次々と開発され「リウマチ」の治療成績は向上しつつありますが、なかには難治性で痛みや疲労感がなかなかとれなかったり、炎症は治まっても既にくたした関節の変形のために、日常・社会生活に制限を受ける場合があります。このような場合、患者さんの心理として、「頑張り」と思っている、長く続く痛みや日常・社会活動の制限のために心は次第に不安になり、落ち込んでしまうことが少なくありません。ですから専門医として医療上最善を尽くすのは当然のこととして、私は次の二つのことを心がけています。

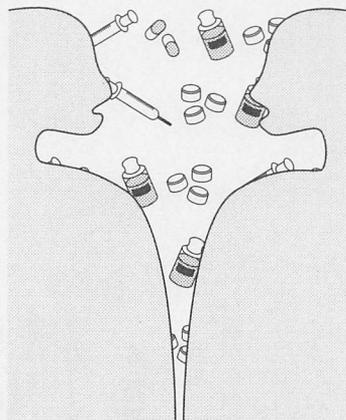
☆ 白血球の一つで、顆粒球とも言う ☆☆ 神経ペプチド。その多くは神経伝達物質として作用する



いのちの 不思議

— 医と仏法の視点から

“リウマチ”との闘い



一つは、患者さんの訴える痛みを、ともに悩んでいくことです。二つ目は、患者さんが希望を失うことのないよう、励ましを続けることです。お一人、お一人状況が異なり、大変に労力を要する作業ですが、池田先生は「生命の医師こそ仏法者の使命にほかならない」と指導してくださっています。このことを心に刻み、日々の治療に尽力しております。

❖ 悲観主義は免疫力の低下をまねく

「悲観主義は気分そのものであり、楽観主義は意志そのものである」との言葉を残した哲学者がおりますが、悲観主義は免疫力の低下をまねき、余病が発生しやすく、医師と患者のコミュニケーションが損なわれ、治療上支障をきたすこともあります。これに対し、強き楽観主義はすべてを良い方向へ向かわせます。

“リウマチ”にかかったある婦人が、私のクリニックを訪れました。この方は既に他の病院で副腎皮質ホルモンと免疫調節剤と消炎鎮痛剤が処方されておりました。副腎皮質ホルモンの“リウマチ”への使用は有用ですが、副作用もあるため必要最小限にとどめておく必要があります。しか

し、急に中止すると病状の悪化をまねく恐れがあるため、私は「一年ぐらいかけて、徐々に副腎皮質ホルモンを中止できるといいですね」と、その方にお話ししました。

ところが、経過を観察していると、病状はどんどん良い方向へ進み、わずか三カ月で副腎皮質ホルモンを中止でき、中止後の悪化も認められず、さらに六カ月後には免疫調節剤と消炎鎮痛剤も半減できるまでになりました。後で分かったことですが、この方は学会の婦人部のリーダーで、悩める人々のために献身の行動を貫かれ、“リウマチ”で悩んでいる暇などない」と笑いとばされておりました。鍛えなき時代にあつて、信仰を通して、一切を自身の追い風としゆく強き生き方に共感を覚えずにはいられません。

❖ 我が生命を太陽の方向へ

池田先生の指導に「我が生命を、太陽の方向へ、希望の方向へ、平和の方向へ、幸福の方向へ向けていく。それが日蓮仏法です。……日蓮仏法には、強き強き楽観主義が脈打っています」とあります。女性の敵であり、母の敵である“リウマチ”。専門医として治療に全力を尽くすことは当然のこととして、なによりも“家庭の太陽”である母の笑顔を消さないためにも、池田先生の指導を胸に微力ながら全力を尽くしてまいります。



●教育学部教授
細田 俊雄

仏典の譬喩と説話

私はこれまで、大白蓮華などでたびたび紹介された原始仏典を読み、インド、スリランカなど仏教有縁の国も訪問してきました。

すると、日蓮大聖人の仏法と最初期の仏典群に深い関連があることが感じられるようになりました。

三 「蘭室の友」の譬え

いくつかの事例を挙げてみますと、立正安国論に「汝蘭室の友に交りて麻敵の性と成る」（三一ジイ）という有名な御文があります。

この表現は漢籍に典拠するもので、「蘭室の友」とは高德の人を譬えた言葉です。

香りの高い蘭のある部屋にいと、蘭の香りが体に染み込んでくるのと同じように、高德の人と交わっていると、いつのまにかその徳の感化を受けるといっ譬えです。

ところで最初期の仏典である「ダンマパダ」（漢訳名・法句経）の中の「花にちなんで」の章に次のようにあります。

「花の香りは、風に逆らって進んでいけない。梅檀もタガラの花もジャスミンも皆そうである。しかし、徳のある人々の香りは、風に逆らっても進んでいく。徳のある人々は、すべての方向に薫る」（中村元訳『真理のことば』岩波文庫）と。

ほぼ同様の文は「ウダーナヴァルガ」（漢訳名・自説経）にもあります。

このような原始仏典の内容から、実際に釈尊は「徳行の香りこそ最上である」と弟子たちに教えていたと推測されます。

今でも東南アジアでは街を歩いていると香りの強い花飾りを子供たちが売りに近寄ってきます。香りを衣服に焚きしめたり、線香を仏前に焚く習慣に見ら

れるように、アジアの人々にとって香は馴染み深いものです。

「ダンマパタ」に見られるように、立派な人格を花の香りに譬えることは、インドで古くから行われていたことが推測されます。立正安国論の「蘭室の友」の譬えには、民族や歴史の違いを超えた人間文化の共通性を感じられます。

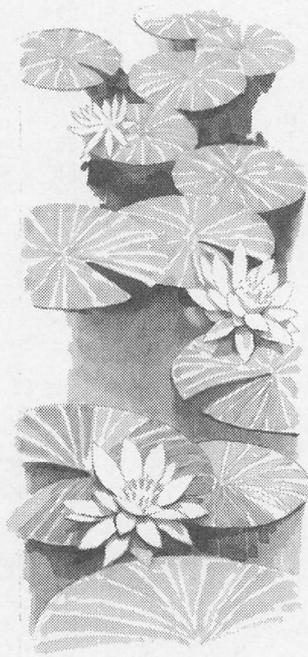
三 蓮華の譬喩

更に、日蓮大聖人は妙法蓮華経の「蓮華」について多くの御書で述べられています。

特に蓮華が汚泥より出て汚泥に染まらないことを地涌の菩薩に譬えた「如蓮華在水」の法理は、入信まもないころ感銘深く学びました。

蓮華といえ、やはり「ダンマパダ」の「花にちなんで」の章に「大道に棄てられた、塵芥の山堆の中から、香しくうるわしい蓮華が生ずるように」という表現があります。

実際にインドなど南アジアは、雨期が長く続いたため、水を溜めたり逃がしたりする池や溝、小川が無数



イラスト・清水 潔

にあります。

その場所が乾期になると少しずつ乾いて、一見ごみ捨て場のようになってしまふのです。しかし、そのような農耕に適さない場所に見事な白、赤、青の蓮華が咲くのです。

もっとも、青蓮華は正確には睡蓮ですが、法華経の「如蓮華在水」の言葉は、まさにそのような情景から生まれたものでしょう。

釈尊は、「チャンダラ」(不可触賤民)と呼ばれて差別されていた最下層の人々を「蓮の花」になぞらえて人間の平等を説きました。

釈尊の最後の旅を記した「マハーパリニツバーナ」(漢訳名・大般涅槃経)には鍛冶工・チュンダとの心の絆が感動的に描かれています。

当時、鍛冶工は賤しい職業とみなされ、社会的に差別されていたのですが、そうした差別され、苦しんでいた人々を最後まで励ましていった釈尊の生涯が偲ばれます。

日蓮大聖人が「日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ施

教 学 随 想

陀羅が家より出たり」(九五八頁)と仰せられていることの意味も深く拝すことができると思われます。

日蓮大聖人は一生成仏抄に「若し心外に道を求めて万行万善を修せんは譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し」(三八三頁)と仰せられています。

この譬喩は、華嚴経の文に拠ったものですが、この興味深い譬喩と同趣旨の譬喩もまた原始仏典に見ることがができます。

やはり「ダンマパダ」の「一組ずつ」の章に「たとえたためになることを、数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。牛飼いが他人の牛を数えているように」とあります。

釈尊はインドの風土にならって牛飼いの話を譬えに用いて、仏法は自ら実践することが大事であることを

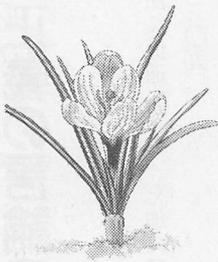
示したのです。

このように見てみますと、大聖人が御書で用いられている譬喩や説話が、数多くの原始仏典と関連していることに驚かされます。

三 仏法の本流

このことから、釈尊と大聖人の人格には、民衆救済に生き抜く仏としての共通の精神が働いていることをはつきりと感ずることがができます。

釈尊、日蓮大聖人に貫かれる人道主義の大道を、今日、正しく継承しているのが大聖人直結の創価学会であることはいうまでもありません。釈尊——日蓮大聖人——創価学会という系譜こそ仏法の本流であることを確信いたします。



●プロフィール

ほそだ としお
東京・綾瀬〈区〉副区長。
昭和28年入会。会計事務所経営。

二十世紀に生きる宗教と創価学会の正義

① 三国四師——正義の言論の系譜

● 埼玉県青年部教学研究室

はじめに

埼玉県青年部では、「二十一世紀に生きる宗教と創価学会の正義」を研究テーマに研鑽を続けてきた。今回は、そのうち仏教史にみる「人間主義の系譜」の視点から「三国四師」に関する論考を紹介する。

仏法の正統——三国四師

日蓮大聖人は、仏法の正統の系譜として、「顕仏未来記」で「三国四師」を挙げられている。

同抄では、次のように述べられている。

「伝教大師云く『浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり、天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し・叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す』等云云、安州の日蓮は恐くは三師に相承し法華宗

を助けて末法に流通す三に一を加えて三国四師と号く」(五〇九頁)

ここでは大聖人御自身が、釈尊、天台、伝教の三師の伝えた仏法の正義を継承し、末法に流通するとの御確信を述べられている。

大聖人が三国四師を仏法の正統中の正統とされたのは、次の二つの点からと拝される。即ち、

- ① 「法華経」の信奉者であること
- ② 忍難弘通を行ったこと

この二点に注目して、他の御書では、どのように仏法の正統を選ばれているかを見たい。

法華経の信奉者

まず、「顕仏未来記」と同じく「釈迦・天台・伝教」という流れを挙げられている御書として、「報恩抄」がある。

同抄には、次のように記されている。

「漢土には陳帝の時・天台大師・南北にせめかちて現身に大師となる『群に特秀し唐に独歩す』という・これなり、日本国には伝教大師・六宗にせめかちて日本の始第一の根本大師となり給う・月氏・漢土・日本に但三人計りこそぞ一切衆生中亦為第一にては候へ、(中略) 仏滅後・一千八百余年が間に法華経の行者・漢土に一人・日本に一人・已上二人釈尊を加へ奉りて已上三人なり」(三一〇頁)

ここでは、天台大師が中国で南三北七を、伝教大師が日本で南都六宗を論破したことをもって、「於一切衆生中亦為第一」(一切衆生の中で第一)の人とされている。

また、三師だけでなく更に広く仏法の正統の相承を論じられている場合がある。たとえば、「報恩抄」の次のような御文である。

「問うて云く天台伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り求めて云く何者ぞや、答えて云く三あり、末法のために仏留め置き給う迦葉・阿難等・馬鳴・竜樹等・天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり」

(三二八頁)

ここでは、天台、伝教の他に釈尊滅後の仏典結集の中心人物である迦葉、阿難、更には大乘仏教の大論師である馬鳴、竜樹等もまた、正統とされたのである。

それは、天台大師が「摩訶止観」で、「天親竜樹・内鑿冷然・外適時宜」と述べているからである。

竜樹は般若経の研究を通して空観を大成、「大智度論」の中で法華最勝を説いており、天親(世親)は、「法華論」の中で、法華経以外の教えはすべて方便であることを明確に説いている。

更には同じく大乘の論師であり中国、日本の仏教に大きな影響を与えた「大乘起信論」の著者ではないかとも考えられている馬鳴も、大聖人は正統の列に加えられている。

また、迦葉、阿難は、釈尊の直接の正統であるということ、ここに加えられたものと思われる。

これと同義の御文として、以下の「諸法実相抄」の御文がある。

「天台・妙楽・伝教等は心には知り給へども言に出し給ふまではなし・胸の中にしてくらし給へり」(一三五八頁)

大聖人は天台、伝教に妙楽を加えられた上で、「等」の文字を加えられている。これは

「報恩抄」の「迦葉、阿難、馬鳴、竜樹等」を想定されておられるものと拝される。

さらに「富木入道殿御返事」の次の御文もほぼ同義と見てよい。

「仏滅後二千二百余年に月氏・漢土・日本・一闍浮提の内に天親・竜樹内鑑冷然外適時宜云云、天台・伝教は粗積し給へども之を弘め残せる一大事の秘法を此国に初めて之を弘む日蓮豈其の人に非ずや」(九五五頁)

ここでは、竜樹と並ぶ大乘の論師である天親が更に加わることになる。また、次に挙げる「当体義抄」の御文では、天台の師・南岳大師が加わる。

「南岳・天台・伝教等は内に鑑みて末法の導師に之を譲りて弘通し給わがりしなり」(五一九頁)

このように、「内鑿冷然・外適時宜」という観点から、竜樹、天親らが仏法正統の人に加わることになる。

内鑿冷然とは、法華経に秘められている一念三千の法門を内には証得していることであるから、広い意味では①の法華経の信奉者といえるだろう。

忍難弘通の実践者

これに対して、次に挙げる「如説修行抄」

の御文は、様相を異にする。同抄では、如説修行の行者は現世は安穩であると法華経葉草喩品に説かれているのに、なぜ三類の強敵が盛んに起こるのかとの問いに対し、如説修行の人が必ず難に遭って来た姿を述べられた後、次のように記されている。

「答えて云く釈尊は法華経の御為に今度・九横の大難に値ひ給ふ、過去の不軽菩薩は法華経の故に杖木瓦石を蒙り・竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面に火印をあてられ師子尊者は頭をはねられ天台大師は南三・北七にあだまれ伝教大師は六宗にくまれ給へり、此等の仏菩薩・大聖等は法華経の行者として而も大難にあひ給へり、此れ等の人人を如説修行の人と云わずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん」(五〇一頁)

ここでは、竺の道生、法道三蔵、師子尊者の三人が天台、伝教とともに挙げられている。

竺の道生は、南北朝時代の中国の僧であり、鳩摩羅什の訳経事業に参画し、羅什門下の四傑の一人に数えられたが、一闍提の悪人も成仏できると主張したために蘇山に追放された人物である。

法道三蔵は中国・宋代の僧である。宋の第八代皇帝・徽宗が道教を重んじ仏教を弾圧した際、これに抗議したことで顔に焼き印を押されて道州に流された人物である。

師子尊者は六世紀頃のインドの人であり、付法蔵の二十四人の最後の伝灯者とされる。仏教に対する迫害の中で首をはねられた人物である。

また、「開目抄」では、法華経には「法華経の行者は現世安穩である」と説かれているが、相次いで迫害を受けている日蓮大聖人のお姿は、それとはあまりにもかけ離れているとして、大聖人が法華経の行者であるとは言えないのではないか、との疑難に答えて、次のように述べられている。

「付法蔵の第十四の提婆菩薩・第二十五の師子尊者の二人は人に殺されぬ、此等は法華経の行者にはあらざるか、竺の道生は蘇山に流されぬ法道は火印を面にやいて江南にうつさる・此等は一乗の持者にあらざるか」(二二〇頁)

付法蔵の第十四の提婆菩薩とは、三世紀頃のインドの人で竜樹の弟子であったが、邪道の論師を破折したために彼らの弟子によって殺されたときれる。大聖人がここで挙げられている三人はいずれも法華経と直接に関係があるとは言えない。

厳密にいえば、この「如説修行抄」と「開目抄」の御文は大聖人が末法の法華経の行者であられることを示すために述べられたものであり、これらの人々が仏法の正統であること

を示されるために述べられたものではない。

竺の道生、法道三蔵、師子尊者、提婆菩薩らは、正像二千年の人々であり、迫害の中で仏法を守ろうとした殉教の精神が、法華経の行者の在り方に通じるところとして述べられたものと拝することができよう。

ここまで、御書に述べられた仏法正統の流れを見てきたが、大聖人がこのことを論じられる場合、三つの観点に分けられるように思われる。

一点目は、「顕仏未来記」や「報恩抄」の御文のように、大聖人が仏法の正統の流れを継承されていることを示される場合には、釈尊、天台、伝教の三師のみを正統として立てられているということである。

二点目は、三大秘法の南無妙法蓮華経の正像未弘を論じられる際に、この三師に迦葉、阿難や、竜樹、天親、南岳、妙楽等の内鑿冷然の人を加えられて述べられている。

三点目は、法華経葉草喩品の現世安穩の御文と大聖人のお姿との矛盾について疑難を投げかけられた場合、さらに提婆菩薩や師子尊者を挙げられるのである。

以上の三点をふまえて整理してみたい。大聖人は、釈尊、天台、伝教については別格とも言うべき立場を与えられ、その業績についてさまざまな角度から諸御抄で述べられている

る。

仏法の源流たる釈尊については当然としても、天台、伝教の業績に対する賛辞は枚挙にいとまがない。

「天台大師・伝教大師こそ仏説に相似してとかせ給いたる人にてはすれとなり、天竺の論師はいまだ法華経へゆきつき給はず漢土の天台已前の人師は或はすぎ或はたらず」(二七一頁)

「夫れ仏滅後に至つて一千八百余年・三國に経歴して但三人のみ有つて始めて此の正法を覚知せり所謂月支の釈尊・真旦の智者大師・日域の伝教此の三人は内典の聖人なり」(二四五頁)

「已に天台等は三國伝灯の人師・普賢開発の聖師・天真発明の権者なり」(二二八〇頁)

「竜樹・天親は共に千部の論師なり、但権大乘を申べて法華経をば心に存して口に吐きたまわず「此に口伝有り、」天台伝教は之を宣べて本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華経の五字と之を残したもう」(九六五頁)

同じ内鑿冷然でありながら、天台、伝教と、その他とを立て分けられていることは興味深い。このことについて「二乗作仏事」では、次のように述べられている。

「無著菩薩の撰論には四意趣を以て諸経を釈し、竜樹菩薩の大論には四悉檀を以て一代

を得たり、此れ等は粗此の意を釈すとは見え
たれども天台の如く分明には見えず、天親菩
薩の法華論も又以て此くの如し、震旦国に於
ては天台以前の五百年の間には一向に此の義
無し」(五九一頁)

ここで大聖人は、大乘仏教の代表的論師で
ある無著、竜樹、天親について、その所論が
天台に遠く及ばないことを指摘されている。

無著は初期大乘仏教の論師の一人であり、
撰論とはその著書である「撰大乘論」を指
す。ここで言う四意趣とは、釈尊が説法をす
るとき意向を四種に分けることによって一
代の説法を立て分けたものである。また、竜
樹の著作とされる「大智度論」においては、
四悉檀が説かれており、仏が衆生の機根に
応じて法を説く様相を示している。

これらは釈尊が様々な法を説いた真意に迫
った点で、仏説を分析、研究の対象としてき
たアビダルマ仏教から大きく飛躍していた
が、大聖人が「天台の如く分明には見えず」
と仰せのように、天台大師の精密さと深さと
は比較にならないのである。

「外適時宜」で、時に応じて教を説いたた
め、現実には説いた教には浅深があったのであ
り、天台にいたって、初めて、一念三千の法
門を具に説き示し、伝教大師が継承し日本に
伝承したのである。

死身弘法こそ仏法正統の証

ただし、天台・伝教も、何事もなく一念三
千という教理を説き示したのではない。大聖
人と比べれば各段の差があるとはいえず、南三
北七・南都六宗と敢然と戦う忍難弘通があっ
たのである。大聖人は天台、伝教の功績を述
べられるとき、南三北七や南都六宗の邪義に
「せめかちて」と述べられ、あるいは「なん
じやぶり」という表現を使われている。大聖
人はそこに民衆の成仏を妨げる働き、すなわ
ち時代の一凶ともいうべき存在との闘争に生
命を賭して戦う仏法者の姿を見いだされたの
であらう。

大聖人が「三師に相承し」と仰せになる
時、それは一念三千の法門とともに、眼前に
立ちふさがる時代の一凶に立ち向かう、忍難
弘通の戦いも継承していることを示されてい
るのである。

その上で大聖人は、次のように御自身の立
場を述べられている。

「止観に三障・四魔と申すは権経を行ずる
行人の障りにはあらず今日蓮が時具き起れ
り、又天台・伝教等の時の三障・四魔よりも
いまひとしをまさりたり。一念三千の観法に
二つあり一には理・二には事なり天台・伝教

等の御時には理なり今は事なり観念すでに勝
る故に大難又色まさる、彼は迹門の一念三
千・此れは本門の一念三千なり天地はるかに
殊なりことなり」(九九八頁)

大聖人は、天台・伝教も及ばなかった一念
三千の法門の真髓を把握され、事の一念三千
たる三大秘法の南無妙法蓮華経として説き示
されたのである。それ故に、天台・伝教にも
勝る大難をも忍んで、死身弘法の実践を進め
られたのである。

そして、その何人にも勝る忍難弘通の姿こ
そ、大聖人が何人にも勝る慈悲をもたれた末
法の御本仏であることを示すものである。

それゆえ、人本尊開頭の書たる「開目抄」
には、次のように明示されているのである。

「今末法の始め二百余年なり況滅度後のし
るしに闘諍の序となるべきゆへに非理を前と
して濁世のしるしに召し合せられずして流罪
乃至寿にも・をよばんと・するなり。され
ば日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万
が一分も及ぶ事なければども難を忍び慈悲のす
ぐれたる事は・をそれをも・いだぎぬべし」
(二〇二頁)

この大聖人の御精神を受け継ぎ、大聖人の
魂である御本尊を根本に忍難弘通していくと
ころに、仏法正義の言論者たる三国四師の系
譜が継承されるのである。

よく効^きく

「薬の話」 中

QUESTION

今回は、新しい薬はどうやって作られているのか、を知りたいのですが。

ANSWER

新しい薬とは、すでに承認しょうにんを与えられている医薬品とは、有効成分や効能きゆうのうなどが明らかに異なる医薬品をいいます。

順を追って、説明しましょう。

①基礎調査

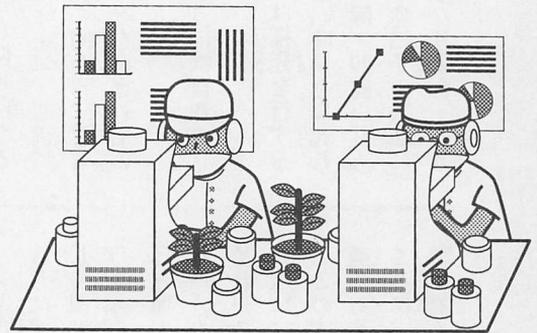
まず、製薬会社は、世の中の動向どうこうや新薬へのニーズ（必要性）の情報を集めて、どのような薬を目指していくかの方針を立てます。

QUESTION

ここまでは、普通の商品と同じですね。

ANSWER

そうですね。



一方、開発活動では、新薬の材料となる新規物質を発見したり、合成・抽出ちゆうしゆつなどの技術を利用して、作り出したりします。更に、その新規物質のもつ化学構造や性状せいじょうを一つ一つくわしく調べあげます。

②スクリーニング

QUESTION

その次の過程にある「スクリーニング」というのは、どういう意味ですか。

ANSWER

「スクリーニング」とは、「選り出す」。

科学が描く
自然・宇宙・生命マップ

トーク

SCIENCE FAIR

新しい薬がどうなるまで

す」という意味で、作り出された多くの新規物質の中から、薬効(薬としての効果)のあるものを選び出すというものです。これにも「第一次スクリーニング」と「第二次スクリーニング」があります。

「第一次」では、特定の効能に絞って調べる方法と、効能を特定しないで、どのような効能があるかを広く調べる方法とがあります。

QUESTION

例えば、効能を高血圧症に絞ってスクリーニングしていても、思いがけず糖尿病にも薬効があることが発見されるような場合があるということですね。

ANSWER

そうですね。
次に、「第二次スクリーニング」では、新規物質がもつプラス面である薬効とマイナス面の毒性を比べ、その新規物質の開発を進めるべきかどうかを決定します。たとえば、よい薬効があっても、毒性がそれを上回れば、その開発は断念すること

になります。

QUESTION

ここまでで、どれくらいの年月がかかりますか。

③ 非臨床試験

ANSWER

およそ二〜三年の年月がかかります。

スクリーニングが終わると、人間に出るかもしれない副作用を実験動物を使ってチェックすることにになります。

まずさまざまな角度からの毒性のチェックがなされます。急性の毒性、慢性の毒性、子孫に影響が及ばないかどうか、発癌性はないのか、などです。また、投与された新規物質が体内において、どのような経路を通り、生体の働きによってどのような変化するかを調べます。

QUESTION

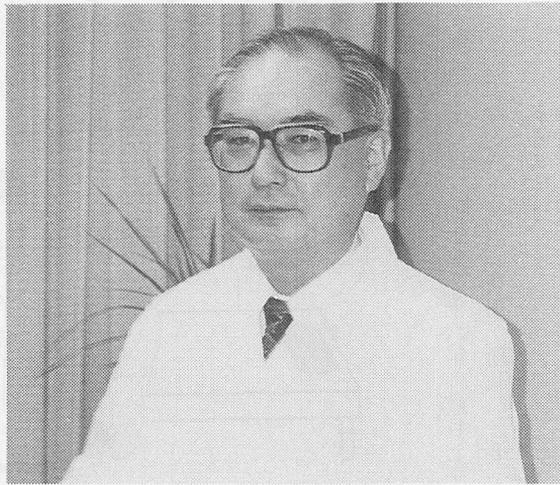
どれくらいの動物を使って行

われるのですか。

ANSWER

試験によって異なりますが、急性の毒性の試験の場合は、一回の試験では、マウス、ラットなどの小動物と、犬などの大動物がそれぞれ一匹五匹ほどが使われ、貴重な動物の生命が犠牲にされる厳粛な実験です。

ここまでの非臨床試験で約三〜五年かかります。



●北海道薬科大学教授

藤本 幸男さん

連載⑩

サイエンス

④ 臨床試験(治験)

QUESTION

いよいよ、ここから人間への試験となりますが。

ANSWER

ここで重要なことは、臨床試験の対象となる人々に、臨床試験の内容を十分に説明し、理解を得て、同意してもらうことです(インフォームド・コンセント)。

まず、最初は、少数の健康な人の志願者(ボランティア)を対象に、人における安全性を調べる実験を行います。そして、健康人による安全性が認められたら、少数の患者さんについて有効性を確かめる実験を行います。

QUESTION

前回、「プラシーボ(偽薬)効果」というのがありますが、本当に薬が効いているかどうかを、どう確かめるのですか。

ANSWER

さきほどの試験で、安全性と有効

性についてほぼ確かめられたならば、今度は多数の患者さんに「比較試験」を行います。これは、新しい薬と、同じ分野で使われている標準的な従来(じゅうらい)の薬とを比較するものです。

この場合、医師も患者さんも、どちらの薬が投与(とうよ)されているか分からないようにしてあり、第三者が判定するようになっています(二重盲検試験)。この後に、更に、多数の患者さんを対象に各種の適応症(てきおうしょう)に対する有効率と副作用などを調べます。

⑤ 承認申請

QUESTION

何度も厳しい試験を繰り返しているのですね。

ANSWER

しかし、薬が世に出る前には、製造の申請↓審査↓承認・許可↓薬価基準申請の認可などのいくつものハードルをクリアしなければなりません。この申請から発売まで二年〜三年です。

以上合わせて、基礎調査から発売



ふじもと ゆきお

プロフィール

東京理科大学薬学部卒業。千葉大学薬学研究所修士課程修了。薬学博士。米国ペンシルベニア大学医学部研究員、東京理科大学助手、北海道薬科大学助教授を経て、昭和57年から現職に。酵素と疾病との関係および酵素の医薬品としての利用の研究などを行っている。

ANSWER

社会的な問題点としては、製薬会社と厚生省と研究機関との関係性によって厳しいチェックが働かないと指摘する意見もありますが、ここでは、科学的な問題点をみてみたいと思います。

ひとことと言つと、人間の場合、個体差がきわめて大きいということです。薬は、生体の中で働くのが本来の役割ですが、生体にとっては、「異物」で、生体は異物から体を守るために、さまざまな仕組みを備えています。

その一つが代謝です。薬は、もともと異物ですから、薬としての作用を發揮した後には、害のないものに変えて排除しようとしています。この代謝反応は、一般的には解毒といわれますが、一部の薬は、代謝によって、より強い薬の作用や毒性を現すものが知られています。例えば、解熱鎮痛剤のフェナセチンは代謝によって、より強い効果を示すアセトアミノフェンを生成することが知られています。この場合も、ヒトによってその程度や、更にまた感受性が違

います。

実は、このようなことは、昔は気づかれていなかった問題点です。

QUESTION

副作用として表面に現れない部分でも、薬は微妙な影響を与えているということですね。

ANSWER

代謝を行うのは主に肝臓なのですが、肝臓にある酵素が変調をきたしたり、高齢化で肝臓の機能が衰えた場合など、解毒がうまくいかない場合もあるのです。

QUESTION

その他には、どのような問題点がありますか。

ANSWER

もう一つは「薬物アレルギー」です。先ほど述べた異物に対する代謝の他に免疫機能があります。アレルギーもその一つですが、薬は多くの場合は、低分子化合物なのであまり免疫反応を起こさないと考えられていたのですが、なかには免疫反応を起こす場合があることが分かっています。

アレルギーは、一般の人には何で



もないものでも、ある特定の人には過敏で好ましくない免疫反応を起こすものです。ゆえに、多くの人々の試験を経た薬物でも、アレルギーの反応をチェックし切れない場合があるのです。また、自分が知らない体質をもっていることもあり、アレルギーのチェックは難しいのです。

QUESTION

そうすると、私たちはどのような点に気をつけるべきでしょうか。

ANSWER

いずれにしても、薬によって異常が現れたり、心配があるときは、医師・薬剤師によく相談することが肝要です。

サイエンス・トーク
よく効く"薬の話"①

根本分裂

⑦ 長老派と進歩派との対立から分裂へ

アショーカ王よりやや前の時代に行われたと推測される第二回仏典結集は、一説によると、ヴェーサーリの重閣講堂で行われ、八カ月を要したという。この結集の契機となったのは、先述（第二十六回・昨年六月号）のように、「十事」すなわち食物の保存、食事の時間など十項目にわたる戒律の解釈に関する意見の対立であった。このとき、長老派によって十事は非法であると決定されたが、十事を可とするヴェーサーリの比丘など、戒律を教条主義的に守ろうとする長老派の決定に承服できない多くの比丘たちは、別に集って法の結集を行ったという。

長老派の立場で書かれたある書は、このことを次のように伝えている。

「上座等によりて放逐せられたる悪比丘跋耆子等は他の味方を得、非法を説く多数の人々一万人は集りて法の結集を行えり。それ故にこの法の結集は大合誦と

呼ばれるなり。大合誦の比丘等は正法に違背したる教法を決定せり」

こうして、これらの「大合誦をなせしもの等は最初の分派」となったという。

つまり、戒律を厳密に解釈し、変更は許されないとする長老派と、時代・社会の変化とともに戒律の考え方も変わるべきだとする進歩派との対立が、十事の問題を契機として表面化し、第二回仏典結集の後に、遂に分裂してしまつたのである。これは、一般的に「根本分裂」と呼ばれており、長老派は「上座部」、一万人が集つた進歩派は「大衆部」と呼ばれている。この両部から、後に多くの分派が生じてくるが、それは「枝末分裂」と呼ばれている。

ところで、十事の問題を契機として根本分裂が起こつたとするのは南伝仏教の伝えるところであり、北伝仏教には、まったく違った説が伝えられている。

北伝では「大天の五事」が、分派を生ずる原因になつたとされており、ある仏典には次のような経緯が伝

連載

30

仏教入門

インド仏教の歴史



アフガニスタンの首都カブール郊外に残る仏塔

えられている。

中インドのマツラー国に商主がおり、その子の名を大天（マハーデーヴァ）といった。父の商主は他国に行つて長年帰らなかつたが、青年となつた大天は母と通じ、帰国した父を殺した。母子はパータリプトラに逃げたが、マツラーにいた時に供養していた比丘に会い、悪事の露見を恐れてこれも殺してしまう。その後、母が他の男と通じているのを知つて、母も殺してしまつた。

五逆罪のうちの三つまで犯した大天は、罪の苛責に耐えられず出家したが、生まれつき聡明な彼は、たち

まち頭角を現して阿羅漢となつた。

ところが彼に仕えていた一弟子が、ある日、大天から精液に汚れた衣を洗わされて「阿羅漢はすべての煩惱を滅しているはずなのに、なぜこういうことがあるのか」と問う。これに対し大天は「阿羅漢には煩惱の漏失はないが、夢などによって不浄の漏失はある（余所誘ふ余に誘わる）」と答えた。つまり、生理現象は阿羅漢といえどもある、ということである。

大天はこの弟子を喜ばせようと、阿羅漢果の記別を与えた。弟子は「阿羅漢は何事も知っているはずなのに、自分には知らないことが多いのはなぜか」と問う。大天は「阿羅漢には、煩惱に関する無知はないが、それ以外の世間のことには無知の場合もある」と答えた。

また弟子が「阿羅漢には疑惑がないとされるが、自分に疑惑があるのはなぜか」と問うと、大天は「阿羅漢は、修行や解脱に関する疑惑（猶予）は断じているが、世間一般のことには疑惑が起ることもある」と答えた。

更に「私が阿羅漢ならば、自分で証知すべきなのに、どうして自分で証知できないのか」と問われると「阿羅漢も他に教えられて自分の悟りを知ることがある（他令入る他が入らしむ）。舍利弗、目連も、仏が記別を与えなければ、自ら知ることができなかった」と答えた。

その後、大天は過去の罪に悩まされ、夜間に床の中で「苦なるかな」と、うめくことがあった。弟子がその理由を聞くと、大天は「聖道は『苦なるかな』との

根本分裂

声から起こるのである。(道因声故起) 道は声によるが故に起こる」と答えた。つまり、「苦なるかな」と唱えることで、世間の苦・無常・無我を感じ、それによって悟りの道に入ることができるといふことである。

④ 大天の「五事」をめぐる論争

以上の①余所誘②無知③猶予④他令入⑤道因声故起、の五つが「大天の五事」といわれるもので、後に大天はこの五事を偈にして「余に誘われると、無知と、猶予と、他により入らしめられると、道は声に因るが故に起こるとは、是れを真の仏教と名づくるなり」と説いたという。

これに対して長老比丘たちは、大天の教説は「仏の説に非ず」として批判した。大天の説を支持する比丘たちに長老は少なかったが、数は多かった。こうして教団は遂に二部に分かれ、仏典には「一は上座部にして、二は大衆部なり」と記されている。

このように、南伝と北伝とは、分派を生じた原因については異なった内容を伝えているが、ともに仏滅後百年ごろに起きたとすることで共通している。いずれにしても、このころに教団が上座部と大衆部の二つに分かれたことは事実といえるであろう。

根本分裂の原因とされるのは、南伝では十事であり、これは戒律の解釈に関する事柄であった。北伝では五事であり、これは阿羅漢の悟りに関する新説であった。しかし、こうした対立は、仏滅百年ごろになって初めて生じたものではないと考えられる。

釈尊は、五十年にわたって法を説いたと伝えられるが、あらゆる人々に、同じ内容のものを説いたとは考えられない。出家の弟子に対する説法と、在家の信徒に対する説法とは、当然、その説き方は違ったであろう。また、同じ出家でも、バラモン出身の弟子と、商人出身の弟子とは、そこに若干の相違があったであろうし、弟子たちの理解の仕方にも差があったであろう。事実、十大弟子といわれた人々も、ある者は戒律について詳しく、ある者は禁欲的修行に優れ、ある者は説法が得意であり、ある者は空の解説に秀でていたと伝えられている。

同様に在家の信徒においても、須達多(スダッタ)のような大富豪や、耆婆(ジーヴァカ)のような医者などに対する説法と、特別な学識をもたない庶民に対する説法とは違いがあったと考えられる。そして、在家の信徒のなかには、維摩経の主人公である維摩詰(ヴィマラキールテイ)のように、出家の弟子以上に、仏法の奥義に達していた人物もいたと思われる。

しかも釈尊には、教団を統一しようとする考えがなかったし、悟りを得た弟子には弘教に歩くことを命じている。したがって、各地に有力な弟子を中心とするグループができたのは自然であったし、そうした弟子たちが法を説く場合、理解の仕方やその得手不得手によって、そこに何らかの差異が生じることは当然でもあった。そして、釈尊もそれらの相違が仏法の本義に反しない限り、認めていたと思われる。

弟子たちの考え方の違いについていえば、例えば、女性を出家させたことについて、摩訶迦葉(マハーカ

ツサバ)は阿難(アーナンダ)を非難しているが、女性の出家は釈尊が認めたのであって、阿難には非難されるべき何物もない。むしろ摩訶迦葉の考え方こそ、柔軟性を欠いていたといえるであろうし、この点に関する限り釈尊の真意からはずれていたとさえいえるだろう。

㊦ 主流派とは別に有力グループも

すなわち釈尊在世のころから、弟子たちの間に意見の相違はあったのであり、そうした違いを釈尊は教条主義的に統一しようとはしなかったと思われる。なぜなら釈尊は、個々の人間が悟りを得て幸福になることを願ったのであって、固定的な教義体系を弘めることを目的としたのではなかったからだ。

しかし釈尊滅後は、法を依処とする弟子たちにとっては、依処とすべき法を、ある程度、体系化して明確にする必要があった。そこで仏典結集が行われた訳だが、以上のような状況のもとで、すべての人が納得するような、統一した内容の結集には無理があったといえよう。当時から、摩訶迦葉を中心とする中心勢力とは別に、各地にそれぞれの指導者を中心とする集団があったと考えられるし、事実、經典には、摩訶迦葉を中心に行われた第一回の仏典結集に従わなかった集団があったことを次のように記している。

「その時、具寿富蘭那(ブラーナ)は南山に遊行し大比丘衆五百人と俱なりき。時に、具寿富蘭那は、長老比丘等の法と律とを結集せる時、随意の間南山に住したる後、王舎城竹林迦蘭陀迦園の長老比丘等の許に

到れり。到りて長老比丘等と相俱に会釈して一面に坐せり。一面に坐せる時、具寿富蘭那に長老比丘等言えり。『友富蘭那よ、長老等は法と律とを結集せり、此の結集を受けよ』『友等よ、法と律とを結集せるや善し、然れども我は世尊の現前に聞き現前に受けたるが如く持せん』

このような態度をとったグループは、恐らく富蘭那の一群だけではなかったと推測され、摩訶迦葉らの、いわば主流派とは異なる考えに基づいて行動した勢力はあったと考えられる。しかし、これらは決して対立抗争したというのではなく、それぞれの立場で釈尊の教法を弘めていったのである。

こうした比丘集団とは別に、在家のグループがあったことも推定され、在家のグループへの指導に情熱を燃やした比丘もいたであろう。釈尊は常に民衆のなかに入って法を説いたし、弟子たちにもそのことを命じている。そして、在家信徒の指導に挺身した比丘たちと、教団の保持に力を注ぐ比丘たちとは、種々な点で、考え方に差異が生じたと思われる。

こうしたさまざまなグループにあった差異が、釈尊滅後百年を経るうちに、十事や五事などの問題としてクローズアップされてきたのだと考えられる。

こうした動きは、釈尊の真の教えはどこにあったかを問う、いわば原点復帰の運動であったといえる。そしてこの動きは、上座部と大衆部に分かれた根本分裂以降、ますます激しくなり、そのなかから、大乘仏教の興起という壮大な動きが生まれてくるのである。

(つづく)

けむり



作・とやま まさゆき 絵・谷 俊彦

隣組の人が、お盆に、おにぎりをのせて、坂を上ってきました。

「おにぎりの配給ですよ」

「まあ！」

「近所の春山さんの家のお米が、半分くらい焼けずに、助かったのよ。少し臭いがあるかもしれないけど、なんとか食べられるわ。それにしても、ひどく、やられたわねえ。でも、家族のみなさんは、ご無事のように……」

「ええ、おかげさまで。ほんとうにご親切さま。どうも、ありがとうございまして」

おばさんは、おにぎりを手渡すと、また、坂をおりて行きました。お母さんは、その後ろ姿に手を合わせました。この世で、いちばん美しいものは、人々の温かい心であり、苦しみから立ち上がる勇氣をもつことです。

反対に、人を傷つけ、相手を平気で殺してしまうことほど、恐ろしいものはありません。殺す方にも、殺される側にも、必ず、親や兄弟がいるはずで

す。
そして、世界中に、自分という人間は、たった一人しかないのです。

「空男、早くこっちへいらっしやい」
みんな、何も食べていないので、おなかペコペコでした。顔は、すすけて、真っ黒になっていました。

お父さんが、雨にぬれたヒノキの葉を、両方のてのひらで軽くはきむようにたたき、それから、手ぬぐいで、ていねいにふきました。

みんなも、次々と、同じやり方で汚れた手をきれいにすると、おにぎりを取りました。

「何もかも灰になってしまった。もうすぐ、この戦争も終わるだろう……でも、ほんとうの戦いはこれからだ。心の中で、灰になったわけじゃない。さあ、元気をだそう！」

お父さんは、力強く言いました。
焼け焦げた臭いのするおにぎりでしたが、一口ほおぼると、生きていてよ

連載

ひとすじの

第5話 焼けあとに広がる青空

かったという思いが、みんなの胸に、こみあげてきました。

「ねえ、お父さん、ほんとうの戦いは、これからだって言ったけど、まだ、どこかの国と戦争するの？」

空男は、戦争ほど、ひどいものはないと、思っていました。戦争は、多くの人が死んでいくし、何もかも、焼けてしまう。サムも、シメも、戦争さえなければ、もともともっと、いっしょに遊ぶことができたと思うと、くやしさが、こみあげてくるのです。

お兄さんが、おにぎりを食べながら言いました。

「戦争が終わったら、どこもかしこも焼け野原さ。こんどは、生きていくための戦いだよ。ねえ、お父さん」

お父さんは、あたりに目をやりながら、静かに、うなずきました。空男は、おにぎりを持ったまま、聞いていました。

「まったく、破壊は一瞬だ。一夜にしてこのありさまだ。これから、どうすればいいのか……」

お父さんは、しばらくじっと考えたあと、顔をあげて言いました。

「まず、みんなが生き抜くために、食べることから始めなければならぬ。空男、それが戦いだよ。建設の戦いだよ。ここを耕して畑をつくらう！」

空男には、わからないことがたくさんありましたが、お父さんの声を聞くと、何か、力強いものを感じました。そして、おにぎりを、口いっぱいにおぼりました。

焼けただれた地球を、そっと冷やしているかのように——。音のない雨が、いつまでも、天から降り続いていました。

そして——。

この戦争は、原子爆弾という不気味な新型爆弾の出現により、多くの犠牲と、深いきずあとを残して、昭和二十年八月十五日に終わりました。

けたたましいサイレンの音も、心臓をふるえあがらせるような爆弾の響きを

も、夜空を真っ赤にこがす焼夷弾のほのおも、まるで、うそのように無くなりました。

あまりの空しい静けさのためでしょうか。そのうち、皆殺しにされるかもしれない”という、わけのわからないうわさや、不安が、人々をつつんできました。

“どうせ殺されるなら、やられる前に死んだ方がましだ”——そんな思いになつて、どうすればうまく死ぬるかを、話しあう人もいました。

どこかの島では、逃げ場を失った日本人が、崖から飛びおりて全滅したとか、姿の見えないうわさが、次第に大きくなっていききました。

空男が、どんなに焼けどを探しても、シメの骨は出てきませんでした。

空男は、悲しみを乗り越えようと、お父さんや、お兄さんといっしょに、くる日も、くる日も、焼けどのかたづけに汗を流し、畑作りに精を出しました。花壇のあったところや、庭を

耕して小さな畑をいくつも作りました。自分専用の“そらおのはたけ”も作りました。

そして、夜は、防空壕の中で、体をよせあい、眠りました。

空男は、みんなが忙しく働くなかでも、なんとか時間を見つけては、近所を歩きまわりました。

“どこかでバツタリ、シメに会えるかもしれない。見なれた景色があまりに変わってしまったので、家がわからないのかもしれない。もし、自分の姿を見つければ、きつと駆けよってくるだろう——”

そう思うと、空男は、じっとしていられなかったのです。しかし、何日たつても、どうとうシメは、見つかりませんし、帰ってもきませんでした。「水こそ生命のみなもと、生活には欠かせないんだよ」

そう言うとお父さんは井戸の周りを、ていねいにかたづけました。そして、焼けどから、鉄の棒を拾ってくると、ポンプの頭のところを直し、

一生懸命にポンプを動かしました。空男も汗びっしりになりながら手伝いました。すると、やがて、バシヤバシヤと勢いよく、水が出てきました。

お父さんは、目を輝かせて、

「おい、水が出たぞー！」と叫びました。

みんな、井戸の周りに集まりました。お父さんは、宝物を掘り当てたように大喜びです。それぞれ井戸から出てくる水を、両手ですくい、何度も何度も、飲みました。

「もう、このひらがママだらけだよ」空男はみんなのためにポンプを動かしながら言いました。

「よくがんばってくれたな。もういいよ。どうだ空男、ひとつ、お前の手にできたママを、みんなで食べようじゃないか」

「ヒエー！」

空男は、おおげさに驚きました。

「ハハハハハ」

お父さんは、笑いながら、その場に寝転がりました。お兄さんも、空男

ひとすじのけむり

も、同じように空を仰ぎました。
 お母さんが、防空壕の前でご飯を作るために、しちりんに火をおこして
 ました。
 ひとすじのけむりが、天に向かって
 のびていきました。

大の字になって、寝転がって
 も、何ひとつ落ちてこない空——。そ
 の、はるかな奥の方から、優しい呼び
 声が聞こえてきそうな空——。
 飛行機ひとつ飛んでいない、真っ青
 な空が、深い深い静けさにつつまれ、

高く高く、どこまでも広がっていまし
 た。
 ◇ ◇
 これは作者自らが体験したことを作品にま
 とめたものです。登場するサムとシメは実在
 した犬です。



なぜなの???



●ファッションコーディネーター

布矢 千春
ぬの や ち はる

流行りゅうこうに流ながされることと流行を自
分のものとして着きこなすのとは違ちが
います。例れいえば近ちかごろのブランド
ブーム。ブランドのロゴマークに
踊おどらされている人が沢たくさん山さんいます。
ロゴを見せて歩あるけば他人たにんにブラン
ド品ひんを持もっていることを自慢じまんでき
る。持もっていない人を見下みくだす。こ
んな気持きもちちの人は決けつして心こころが豊ゆたか
ではありませぬから、どどこかお洒しや
落れがチグハグだった
りします。

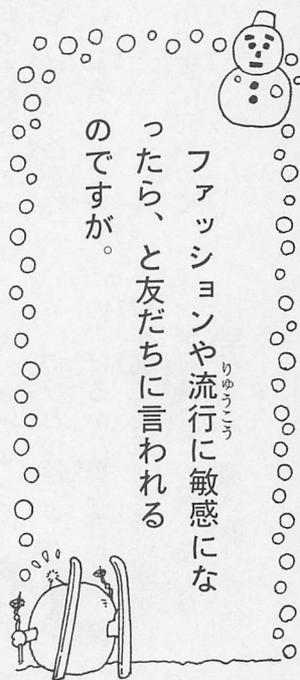
一流いちりゅうブランドの価か
値ちはその伝でん統とうと素す晴は
らしい職しやく人にん技ぎ術じゆつに
支さえられたスタイル
にあります。自分じぶんの
スタイルを持もちT



イラスト・関口たか広

場所・場ばしょ合ありか
P Oを理り解かいしていないと一流ブ
ランドは着きこなせないのです。
こんな例れいもありません。数すう年ねん前まへ、
あるブランドのキャンパス地じのシ
ョルダーバッグが値ねだん段だんも安やすくロゴ
が大きくついていたので、突とつ然ぜん、
日本中にっぽんじゆうで流りゅう行こうったことがありま
す。しかし、欧お米べいで見みかけること
はありませんでした。それもその
はず、ショルダーバッグは、海うみや
プールでのバスタオ
ル入いれで、通つう勤きん用ようで
はなかつたのです。
日本にっぽんは世界せかいから笑わらわ
れていました。T P
Oを心得こころえていたらこ
んな現象げんじやうは起おこりな
かつたでしょう。

またファッションメーカーは新あた
しいものを売うるのが仕事しごとです。沢
山の人が欲ほしがるように、カッコ
いい宣せん伝でんや広こう告こくで商しょう品ひんを買かわ
せよ
うとします。聡そう明めいでないしと次つぎから
次つぎへと新しん商しょう品ひんが欲ほしくなり、商
業ぎやう主しゆ義ぎに踊おどらされていくのです。
反はん対たいに流りゅう行こうを自分じぶんのものとして
いる人は、心こころが豊ゆたかで自じ己こ表ひょう現げんの
手しゅ段だんとしてお洒しや落れを取り入いれてい
ます。決けつして商しょう業ぎやう主しゆ義ぎの犠ぎ牲せいには
なりませぬ。物ものを選えらぶ時ときに確かっ固こ
た
る哲学てつがくがあるのので、自じ分ぶんに
必要ひつやうか必要ひつやうでないかの価か値ち判はん断だんが
明めい快かいにできるからです。
本ほん当とうにお洒しや落れな人は着きている服ふく
の値ち段だんやブランドに關かん係けいなく素す敵てき
に見みえるものです。



ファッションや流行りゅうこうに敏びん感かんにな
ったら、と友ともだちちに言いわれる
のですが。

それはね……

妙法は希望の宗教。人生順風の時ばかりではなく、逆風の時も。そんな時「法華経を信ずる人は冬のごとし冬は必ず春となる」(一二五三頁)との御金言が何と力強く感じられることでしょう。

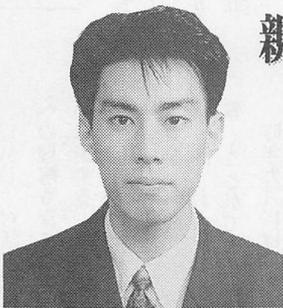
我が家が冬のような人生のピンチに直面したのは十六年前の五月。小学三年生の長男に、学校の検診で血尿が見つかったのです。医師は必死に原因を調べましたが発見できません。その間、食事制限や運動の制約が続き、暑い夏にもプールにも入れず、検査、検査でかわいそうな夏でした。

秋風が吹くころ、今度は父が身体の不調を訴え、入院。検査の結果、胃ガンと分かりました。時を同じくして、私自身も、昔、患った中耳炎が悪化し、手術をしなければ耳が聞こえなくなり、果ては半身不随になるとの宣告を受けました。

よりによって親子三代が同時期に病にかかったことは大変な重圧でした。知人に「お祓いでもされては」などと言われ、心中悔しい思いも。自分がその当事者であったことが何よりも辛いものでした。先輩には「今が仏道修行の時だ。必ず乗り越えられる。とにかく御本尊の前に座り、祈り切ることだ」と力強く激励していただきました。

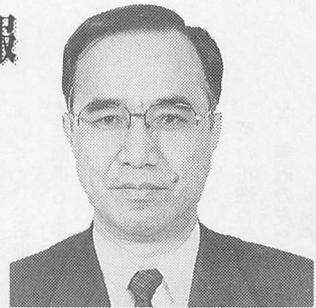
「長男の病気を治すためには、まず自分の病気に打ち勝つことだ」——絶対に負けられないと背水の陣で唱題の時間をつくり、活動も入院の日まで一歩も退かずやり切りました。「役職」

親子三代が同時期に病を克服



●男子部 班長

鈴木 正明



●副会長 群馬県県長

鈴木 宏明

昭和19年生まれ。34年入会。前橋市在住。

受験を応援してくれた思い出

イコール「信心」ではないことを、まざまざと知らされました。

その年の十一月、私も父も手術を大成功に終えることができました。長男も、担当医から「歯に原因があるかもしれない」と歯科医を紹介してもらったことで事態が急転。昔、治療した乳歯から菌が入り、それが血尿の原因と判明。歯を取った後は血尿も止まりました。今となっては笑い話のようですが、そこに至るまでは大変な戦いでした。

我が家にとっての大きな試練でしたが、これを契機に、二人の子どもたちは題目の大切さを身体で知ることができ、かけがえのない信心の財産となつていきます。

父を語る

何事にも明快に答え、励ます父の姿が印象に残っています。夜は学会活動で時間がなかったので、早朝にキャッチボールしたり、朝の勤行を共にしたことなどが父と過ごした思い出の時間です。一番の思い出は、創価中学受験の時のことです。その日に学習した問題集を、深夜、帰宅した父が採点し、アドバイスをしてもらうという毎日でした。家族全員の応援があればこそ学園に合格できたと思います。東京での一人住まいを終えて、再び地元に戻り、更なる成長を目指して頑張っています。

(すずき ままあき)

読者の広場

DOKUSHA NO HIROBA



字数は600字前後。長さの調整上、趣旨を変えずに直ささせていただく場合もあります。ハガキ投稿「ショート笑部」も歓迎します。〒住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記。送り先は「読者の広場」係。採用分には図書券をお送りします。



画・川瀬紀深子

実った弘教に感激

静岡 根上 久美子 (主婦)

私は障害者の兄をもち、息子も三人のうち長男と三男が障害者で生まれました。私は、なんとしても幸せになりたい、幸福な人生は自らが切り開かなければならないと痛感して、昭和五十七年に入会しました。

以来、宿命転換と友の幸せを祈り、折伏に励みました。

親戚中を訪問し、仏法対話をしましたが、一人も入会する人はありませんでした。

しかし、対話を重ねるにつれて、次第に学会への理解も深まり、夫の親戚の大半が聖教新聞を購読するようになりました。

そして、弘教を実らせた！との思いで真剣な唱題を重ねてきました。その結果、平成七年に、同じ団地に住む米田与一郎さんを入会に導くことができました。

昨年九月には、夫とともにブロック長・担当員の任命を受け、新たな決意で活動に励んできました。

十一月に父が入院し、病院へ母を送り迎える時に、自然と母と仏法対話となり、十二月六日には地区の方々には祝福されて、ついに母が入会しました。

御殿場圏の幹部会で拍手に包まれて、新しい人生のスタートをした母は、入会直前に「これから創価学会に入り、第二の人生を歩みます」と子供や親戚に宣言していました。

私も念願が叶い、親孝行ができた喜びでいっぱいです。「新世紀へ民衆勝利の年」も唱題根本に前進します。

「無冠の道」を走る

青森 大沢 正幸 (漁業 31歳)

菜の花畑の作付面積日本一を誇る町(横浜町)を、無冠の友として駆けて八年になります。これまで一切無事故でくることができました。

我が家は祖父母の代から学会員で、両親の姿

を見ながら、私も小さいころから自然に信心をするようになりました。

聖教新聞の配達を始めたきっかけは、当時、地区部長が配達されており、配達区域が広く大変ななか頑張っておられる姿を見て、自分のブロックだけでも、手伝いをしようかと思っただけです。

私は漁業を営んでいるため、その日の漁の具合によっては、配達の前に入った海に出て一仕事を終え、時間をみては陸に上がり、地区の同志や友人のもとへ聖教新聞を配達していません。その後、海に戻って漁を続けることもしばしばです。

これからの季節、特に寒さと雪が厳しくなりますが、「この新聞を皆が待っている」と思うと、つらくはありません。

広布の一切を担い立つ男子部として、仕事、活動、そして配達に生き抜くことは、私自身への挑戦であり、学会青年部の誇りであると確信

都一ト笑部

「伝統の月」

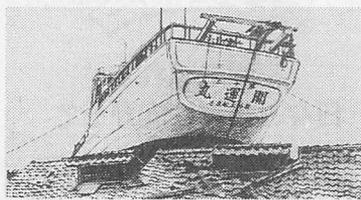
妻 迷っていたあの人が
がようやくやく入会よ
夫 決断まで時間が
かかったネ
妻 あなたの時はもっ
とかかったわよ

(東京・エース氏)





●岩手・地区幹事
とりいきちろう
鳥居吉三



岩手・大船渡港で民家に押し上げられた漁船（資料提供：毎日新聞社、画・内田健一郎）

思えば三十八年前の昭和三十五年五月。外国の地震で起きた津波が未明にかけて突然襲ってきたのです。多くの死者が出ました。忘れる事ができません。湾の奥深い港ほど被害が大きかったようです。この津波は何の音もなしに、急に押し寄せたために多くの犠牲者が出ました。犠牲者の大半はお年寄りや子ども、幼い子を持つお母さんたちでした。

小説「新・人間革命」の時代と私

「先駆」の章

●津波に駆けつけてくれた学会員

一瞬のうちに貴い命が奪われ、家や小船が数百隻も流され、港の道は浮流物でいっぱいになって、人も通れないほどでした。地震ほど怖いものはありません。阪神大震災のように、多くの人命が失われるような危険が、いつも身の周辺にひそんでいることを知らされました。三十七年前の津波の時も、政府は何もしてくれませんでした。警鐘を鳴らし

続けたいものです。この津波のすぐ後に、はるばる京都から見舞いに来てくれたのが学会員の姉でした。その姉に折伏されて、三十八年には六家族全員が入信しました。「先駆」の章にあるように、池田先生が迅速にして的確な手を打たれたからだと感謝しています。現在、妻とともに多宝会で頑張っております。

しています。

同時に、日々配布の機関紙に携わり、誰よりも早く活動できることは、私にとって信仰への発心のバネとなる最大の機会です。

池田先生が、私たち青年に「未来の一切を頼む」と叫ばれたことを思い合わせると、青年時代にこうした苦勞をさせてもらえることに感謝しています。

また、私が、このように使命に燃えて頑張れるのも、地区部長、地区担当員をはじめ多くの同志、家族が温かく励まし、支えてくれているからです。みんなが、笑顔で応援してくれるので、より一層活動にも頑張ろうと決意を新たにしてきました。

これまでの地域配布の歴史をみると、無冠の道を歩むメンバーが、必ず地域の要、柱として

配布に励んでいます。

私もそういう多くの先輩の姿を目標に歩んでいきたいと思っています。

配達を通して一人でも多くの人に学会の温かさと使命に生きる喜びを訴え、仏法理解の輪を広げていきます。

先輩方が築いてきた配布の土台を青年が余すところなく継承し、更なる発展に全力を尽くしていきます。

ブロック座談会に『大白蓮華』を活用

大阪 二宮 優子（主婦）

私たちのブロックは、二十世帯で、寝屋川市の住宅街にあります。私は女子部を卒業して、三年前にこのブロックの担当員になりました。

年配の方が多いのですが、若い私を皆さんが支えてくださっています。

一昨年のブロック協議会の折、支部長も協議に加わり、座談会の充実のためにどうすればよいか検討したことがありました。

壮年部の地区幹事さんから「ブロック座談会では、『大白蓮華』を皆が読んできて、自分が一番感じたところ、学んだところ、感動したところなどを話してはどうか」と提案があり、そうしようということになりました。

以来、この二年間のブロック座談会は『大白蓮華』を読んでの感想を中心に行っていました。

勤行、学会歌の合唱に続いて、巻頭言を読み、そのあとは、参加者全員が自由に、自分が『大白蓮華』を読んだ感想を話し合うコーナー

留学生コーナー

感謝を忘れず 日々、目標に向かって

グラスゴー大学は一四五一年に創立されました。卒業生には、アダム・スミスやジェームス・ワットなど、世界的に著名な学者・科学者が多数含まれ、池田先生が一九九四年に名誉博士の称号を受けられています。私は、創価大学入学以前から、将来は報道に携わりたいと考えていました。その現場で働く父親から「英語が話せれば仕

安村 博

やすむらひろ



事の世界が広がる」と言われ、海外の大学への留学を考え始めました。幸い、創大には多くの海外交流大学があり、留学を身近に感じることができました。現在は政治学、特にEU（ヨーロッパ連合）について勉強しています。最初は、毎日の授業までに読まなければならない文献の多さに圧倒されました。少しずつ慣れてきた現在では、特

に国家の枠組みに対するEUの挑戦を興味深く学んでいます。創大の名誉教授・博士でもあるグラスゴー大学のマンロー教授には、何度も食事に誘って頂き、その度に生活のあらゆることに配慮してくださいます。このようにさまざまな人に支えられての留学です。感謝を忘れず、将来の目標に向かって毎日努力を続けていきます。

です。

一人一人感じるところは、さまざまです。池田先生の指導のほかに、「春夏秋冬」「新入会の方のために」「読者の広場」など、こんなところにこんなに素晴らしいことが書かれていたのかと、一人で読んでみると、つい見落としていた部分がたくさんありました。皆さんの話を聞いて、座談会が終わると『大白蓮華』を全部読んで気分になります。

聖教新聞とともに『大白蓮華』をしつかり読んで、確信を深めながら、素晴らしいブロックの建設に頑張りたいと思います。

無慈悲な日顕宗の極悪と戦つ

徳島 梅津 忍 (自管)

昨年八月、徳島が三分県体制で二十一世紀へ

威風堂々の前進を開始した折、池田名誉会長から「立正安国論」の「如かず彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには」(二四頁)との御聖訓が贈られました。

この御聖訓に、私たち婦人部は、大聖人の仏法の偉大さと学会の真実を叫び、忘恩の輩の策謀を断固、打ち破っていかう、と固く誓い合ってきました。

法華講員を救済していく活動も、一段と真剣な祈りで力強く推進しました。

そのなかで、かつて、私が大ブロック担当員時代のブロック員で、夫婦で脱会した婦人を訪問しました。

それまで、地元の地区担当員さんが訪問しても門前払いしていたようです。

私との対話では、懐かしきからか心を開き、自らの悲惨な生活ぶりを初めて語ってくれた

のです。

そして、名誉会長の「母の詩」の一節を読み上げると、その一言一言に感動し、脱講を決意されました。

彼女は「迷いの命もふっきた」と涙ながらに話っていました。今では、座談会にも参加し、周囲の人たちに信心の素晴らしさを話しています。

また、本人の意思でなく脱会した人もいます。日顕宗の極悪ぶりをまったく知らないまま、寺に通っていた婦人は、今は体調を崩して入院生活をしています。温かな言葉をかけてくれる人もなく、病院へは誰一人見舞いにも来ないと言っています。

草創から広布にまい進してきた人を脱会させ、こんな哀れな姿にした日顕宗に対して、私は怒りが込み上げるとともに、彼女たちと真心

マシメな
冗談



追い込み

「『愉』の字が違うけど
この意気込みなら大丈夫そうね」

の対話を重ねました。

こうして、四人の法華講員を救済することができました。これからも勇猛精進の実践で、一人でも多くの法華講の人々を救済し、本年「新世紀へ民衆勝利の年」を、果敢なる正義の闘争で勝利してまいります。

「サテライト・グループ」の誇り

東京 上平 幸雄 (67歳)

私がサテライト・グループ（衛星中継の受信業務の担当者）のメンバーになったのは、平成三年です。

当時、私は長年勤めた会社を定年退職して、

学会活動の時間が十分にできていました。サテライト・グループの話聞いて、それまで、まったく経験のないことでしたが、広布のために私にできることは何でもしていこうと喜んで、この任務につきました。

以来、六年間、毎月の本部幹部会を中心に、教学研究会、サンデー講座などのたびに出動しております。

私たちの任務で、一番大事なことは、衛星中継が、途中で映像が映らなくなったりすることなどがなく、一切無事故で終了し、これらの会合に参加された方々が、信心の前進をしていけるようにしていくことです。

また、私たちのグループには「人材の育成」「信心の成長」「広布前進」への重要な使命があると思っています。

会合に参加した一人一人が、池田先生のスピーチを直接、見聞きし、また、学会のさまざまな活動の紹介に、感動し、発心し、確信と喜びも新たに、清新な決意で前進していくことができるからです。

私自身も、毎回の衛星中継によって、信心を励まされ、希望をもって進んでく

ることができました。

先生のスピーチを聞き、雄姿を拝見して、どれほど、勇気づけられ、感動してきたか計り知れません。

サンデー講座などを友人、知人にも見ていただき、学会理解の輪を大きく広げることもできました。

私は今、六十七歳になりますが、このような大事な任務につき、広宣流布の大切な行事に参加させていただくことに、喜びと感謝の思いでいっぱいです。

今後も若い牙城会、創価班、白蓮グループの皆さんとともに、毎回の会合が無事故で運営されていくように祈り、サテライト・グループの使命を果たせるよう頑張っております。

伝言板

読者・モニターの方へ

- ◇第32期のモニターの方々から新年号についてのご感想・ご提案など、多数のご意見をいただきました。有り難うございます。今後とも斬新なアイデアなど、どしどしお寄せください。
- ◇新年号は、昨秋実施の「中級試験」の問題と解答例の掲載、本年3月実施の「任用試験」の教材の掲載で、多くの連載が休載になりましたが、今月号から再開されています。今後とも愛読ください。
- ◇今年度の教学研究会の教材「立正安国論」の第一回の研鑽範囲の解説を掲載。資料・コラムなどを加え、充実を図っていきますのでご期待ください。

◆「新世紀へ民衆勝利の年」の開幕です。池田先生のお元氣な写真と、勇壯な富士を上空から撮影された写真、新年の歌に大感動でした。この一年、さあやるぞ！ 何があっても勇猛精進！ という思いで、まずは3・16を目指して頑張ります。

静岡・石井幸子

◆「法華経の智慧」に「何億年、何百億年に一回しか、めぐり会えない御本尊だと思つたなら、一回一回の勤行がどれほど感激に満ち満ちてくることか」とあり、五体に衝撃が走りました。十年間、欠かさず二時間以上の唱題に挑戦してきましたが、その姿勢を振り返りました。先生の教えてくださった一念で、勤行・唱題を實踐していきます。 京都・生島嘉禮

◆表紙の大白蓮華の文字がとてもおしゃべりになって素敵です。池田先生の撮られた花の写真も、寒い季節に「ああ、春が来るのだ」という感動を与えてくださいました。

神奈川・矢沢美知子

◆企画のページでマエハラさんが紹介している、ブラジルSGIが社会の信頼を得ている三つの理由と、「感激には恩返しをするのがルール」との言葉に感動。ブラジルのメンバーの求道心の強さと、

三 二 一 便 三

躍動している心を感じました。私も、先生へご恩返しができるよう、唱題を重ねて頑張っていけます。 東京・山田三夫

◆ガーナのアクラ青年部の実践目標が、私の地区で話し合ったものと通じていました。地域配布はどこであっても、自分だけでなく祈り、人に共感と信頼、希望を与えていくかの戦いなのだ、決意を新たにしました。 奈良・柏木重子

◆「法華経の智慧」を毎回楽しみに読ませていただいています。先月号で完結した如来寿命品ですが、強く印象に残ったのは「師弟不二を教えてあげようという仏の大慈悲の結晶が寿命品」ということです。偉大な師匠のもとに集う弟子として「不二の弟子」を目指し、「臨終只今」との決意で猛然と闘っていきます。 東京・深町孝志

◆任用試験の教材が掲載。受験者の私にはとてもうれしいです。入会はしていたものの、なかなか活動までではできなかった私が、学会の方の真心にふれて、活動にすんで参加し、教学試験にも挑戦できるようになりました。大白蓮華の熟読に挑戦し、活動の励みにしていきたいと思います。 大阪・浅野雅代

編集後記

◆毎年のことながら、年末年始を挟む二月号の編集は、作業時間が例月より約一週間少ない。終着点の校了日まで、残り時間を睨みながらの追い込み作業となる。やり終えてほっと充実感。(由)

◆校了日を前に「完成した後よりも、建設の時のほうが楽しいし、幸せであり、価値がある」との指針。本当にそう思う。今を大切に、建設の日々を、楽しく、充実して生きていきたい。(照)

◆「あしおと」の沢田さんの大石寺での就業時間は、何と朝五時半から午前二時過ぎまで。理不尽な宗門の実態を、断固訴えたい。強き使命の自覚が実証につながることを改めて実感。(幸)

◆正月早々から弘教・新聞購読推進の実りある体験の話題が各地から続々と伝わる。小生も負けずに、昨年に倍する対話の戦いを、外部読者にも通じる誌面作りを決意。(啓)

◆ウソ、作り話の日頭出廷で真実が一つあった。件の手帳の「ウイスキーにありつく」のくだり。法華講には酒は付き合程度と言う男が「ありつく」と。文に表れた卑しい心根は本音。(真)

◆兵庫県西宮市を訪れ、公園に建ち並ぶ仮設住宅を目的に。震災から三年。「立正安国論」に「背正帰悪」の故に「起災起難」と。為政者の失政のツケを払わされるのは常に庶民。(健)

◆一月号の法華経の智慧に全国から反響が続々。師弟の継承がなければ永遠の生命といっても抽象論」との一節に、師を求め境涯革命をし抜くことが弟子の使命と、一生求道を誓った。(敏)



混迷する現代に、仏法の英知を開く

聖教文庫

好評発売中!



人生問答

経営の天才と仏法指導者の友誼の結晶。

松下幸之助 × 池田大作 共著

人類社会への平和貢献を志向する両者が、人間と人生、生と死、文明への視座など多岐にわたるテーマで共鳴の対話を展開。

上 人間について*豊かな人生*宇宙と生命と死
繁栄への道

生命次元からの確かな幸福の実現を。連帯によって全人類の幸福を……

★本体価格762円

中 宗教・思想・道徳*政治に望むこと
社会を見る目

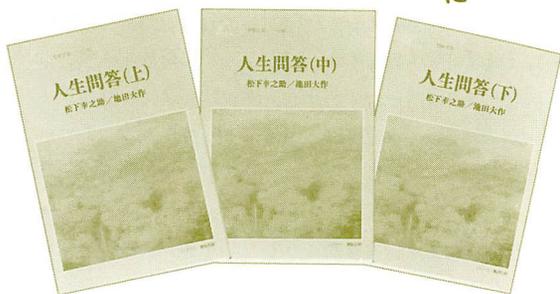
宗教は人間が存在するかぎり、人間とともに、永遠に存在しつづけていく……

★本体価格590円

下 何のための教育か*現代文明への反省
日本の進路*世界平和のために

平和は待望するだけでは実現できない。真の世界平和を目指す実践こそ尊い

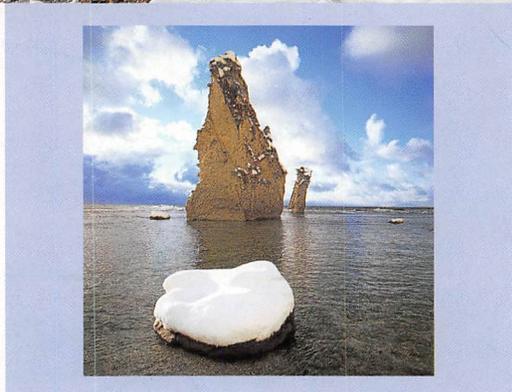
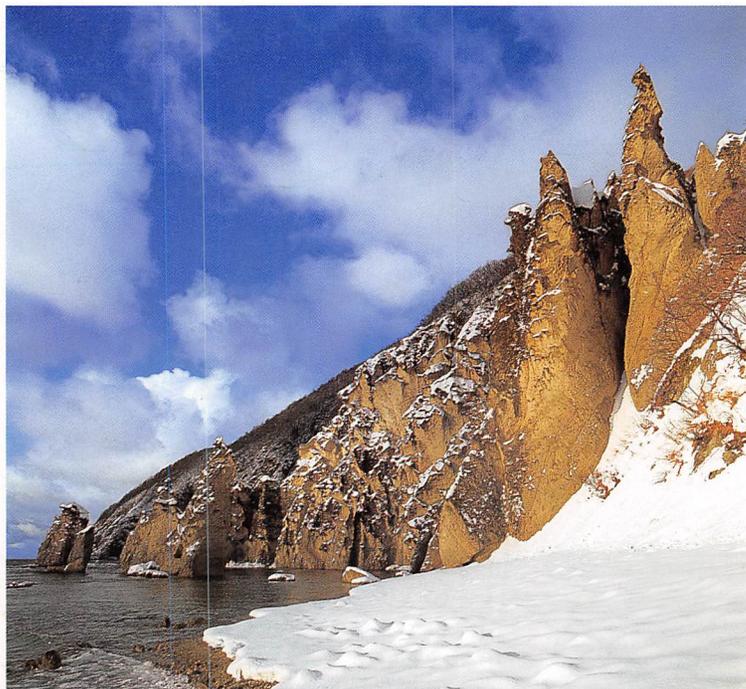
★本体価格667円



ほとけがうら
仏ヶ浦
[青森県]

自然を守る

Conservation of
Nature



厳しい自然への畏怖の心

青森県下北半島(マサカリ半島)の刃の部分にあたる津軽海峡に面した約2*。に及ぶ海岸線には、地上100m近くもある岩石が林立しています。これは凝灰岩が長年の風雨によって浸食されてできあがった自然の造形です。大正11年9月、下北半島の自然をたずね歩き、佐井村を訪れたある文人は、仏ヶ浦を目の前にして、あまりの異様さに驚嘆し、「神のわざ、鬼の手づくり仏ウタ、人の世ならぬところなりけり」と歌いました。地元では、一つ一つの岩石にツツ仏や、五百羅漢、蓮華岩などと名前をつけて呼んでいます。

これらの名は厳しい自然への畏怖の心の表れと思われまふ。人々がこうした心を忘れ、慢心を起こしたとき、環境破壊が始まるような気がしてなりません。

佐井村 総務課長 奥本 好勝

